特105
243

神戸又新日報
掲載小説

男（をとこ）

後編

羽様荷香作

谷洗馬畫

始

特105
243

神戸又新日報
掲載小説

男（をとこ）

（編後）

羽様荷香作
谷洗馬畫

大正
3. 3. 11
内交

樋口隆文館新刊小說目次

渡邊默禪作　千枝子
同　人作　封人窟
同　人作　俠妓小鶴
同　人作　千里眼
同　人作　風流菩薩
同　人作　櫻井一策
伊原青々園作　迷ひ子
島村抱月譯　其女
鹿島櫻巷作　戀の敗者
同　人作　海の豪傑
新田靜灣作　愛と財
同　人作　富の力
伊藤銀月作　予……
根本吐芳作　三人の仇
羽樣荷香作　男……
須藤南翠作　浮木舟……

須藤南翠作　闇のうつゝ
山田松琴作　操競べ
和田天華作　戀の意氣地
同　人作　靜子
同　人作　浪まくら
同　人作　二人の女
安岡夢鄉作　罪の子
同　人作　地獄谷
稻花生作　金齒の於墨
中村兵衛作　父なき子
同　人作　甚九郎稻荷
玉竹園作　香形
小島孤舟作　梅花錄
同　人作　浪がしら
花冠者作　思はぬ戀
春秋園作　俠妓胡蝶

樋口隆文館の出版物は東西各地の新聞紙上に多大の好評を博したる物に付それを讀んでも至極面白い

男（後編）

羽様荷香

（一）

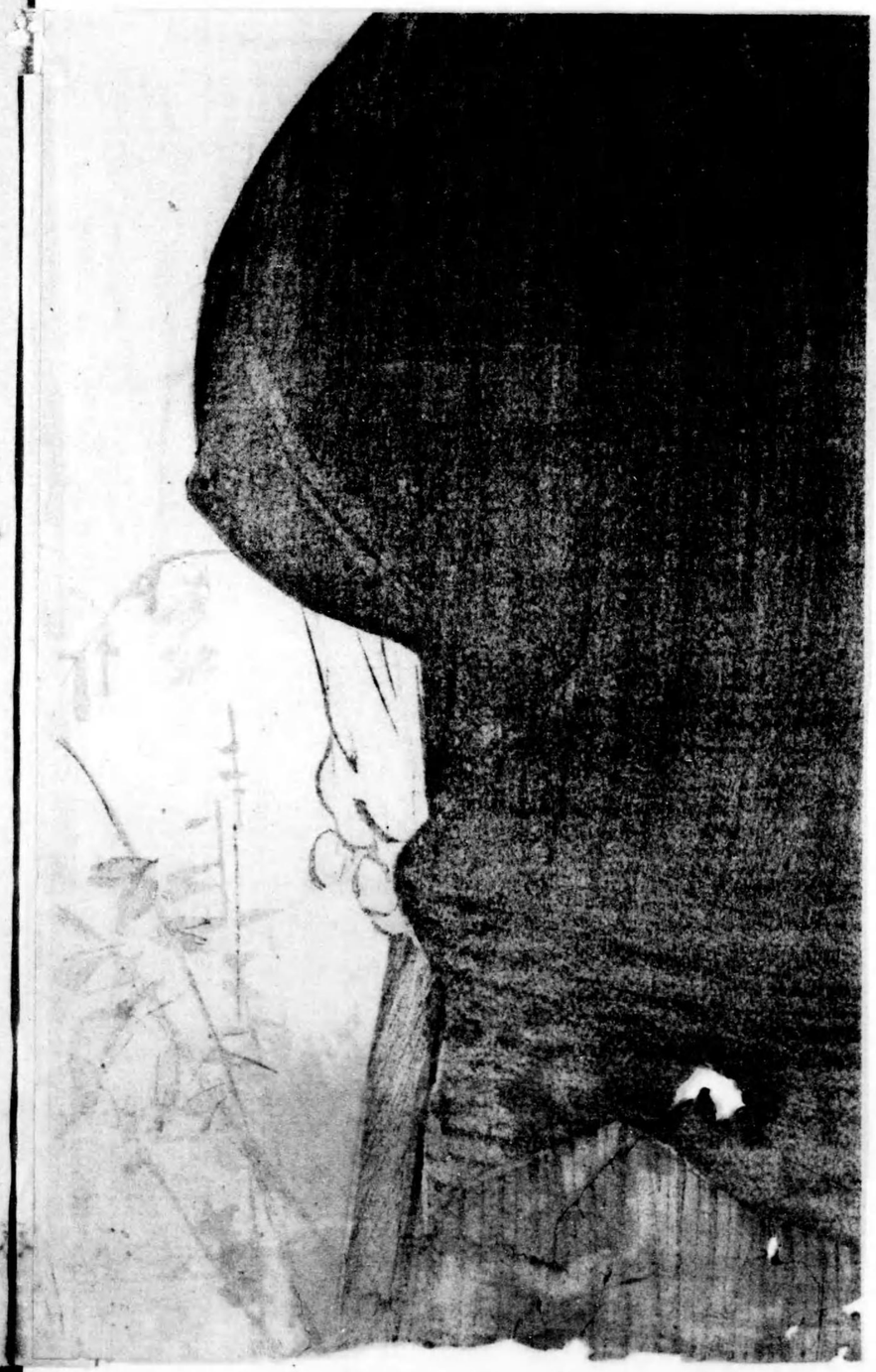
晋藏は痛々しい繃帶の頭を下げた儘暫時黙つて居る、薫は微かに唸つて寢返りをした。

『坊様はいかゞで……』

『何だか例時と違ふ様だからね、お醫者に見せやうかと思つて居ます、原因は能く判つて居るけれどねえ』

『可愛相に腦をお遣られなすつたんだ、大人だつて徹へまさあ……俺ア奥様が倒れないのが不思議で……』

『妾は倒れやうにも倒れられないぢやないかね』



綾子は寂しく笑つた。酷い窶れに美しい顔は凄くなつて、清らかだつた眼は乾く間もない涙に曇る。其面を仰いで音藏は遣瀬なげにホッと嘆息づいた。

『奥様……貴女モウ凝として居らつしやつちやア可けませんせ……』

『……』

『斯な事ア俺が申上ぐる分ぢやアございませんが今日の場合……奥様のお味方と云つちやア坊様ばかり、長い間奥様には普通でねい御恩を受けた俺ア何も默つて見て居る事は出來ませんやモウ旦那様にはお暇を受けた同然の俺だから本來ならお邸を出なけれア濟ねいのでございますが……今の奥様や坊様に此儘お別れする事ア俺には出來ねいので……』

『音藏……有難うよ、妾も坊もお前の情義を……何倍にも受て居ますよ……』

綾子は顔を反けて襦袢の袖を目に當てる音藏は低い聲。

『奥様、泣いてる所ぢやアございません、貴女は何なさるお積りでございます』

『妾……妾はね、斯して凝として居るより他手段は有りません、赤誠は最後の勝利といふからね、何な辛い悲しい事があつても……今日のやうな情ない事があつても妾此邸を動かぬ決心です』

『ヘエ……そのお美しいお精神は……何とも申上げ様もございませんが……奥様斯して旦那様の爲さる通りにして居らつしやつちやア其お精神の貫く時はありますまい、今の佐藤男爵の妹つて奴め屹度旦那様と腹を合せて、奥様を逐出した後釜に坐る狂言たア能く判つて居ますからね、反對に逐還された意趣を含んで、此上何を爲出すか知れませんや、旦那も屹度御立腹で、今度御歸邸になつたら此上奥様が居るに居られねいお仕向けを爲さるに極つてますからね』

『それは然うだらうねえ、種々の事がまだ有うけれど……妾の守る道は唯一つだものねえ』

『其點でございます、俺の思ふのは、正しい道をお歩きになる奥様は、それを邪魔して通さぬ物が出て來た時は、場合に依ちやア邪魔物を押退けてお進みになるお志意が……』

『強い意志になれとお云ひのだらうがね……音藏妾此子さへ居なかつたら……』

とスヤ〳〵眠る薫の寝顔を見て。

『斯なに逼るまで凝としては居ないのです……旦那の變つたといふのもお精神なら、妾の一生懸命も意志だから、假令邸へはお歸りがなくとも、妾から隨いて行つてゞも、お傍を離れず御意見をして以前のお方にてし見せる……強い覺悟は此胸に有つて居たのだがね……お母様

は如彼のだし……不自由な身の此子だから、萬一や妾がお氣に逆らうて此處の家を出る樣な事になつたら……此子が定めて困るだらう……榊先生とはあれ程慕ふ仲を引離したのだものそればかりでも病氣同樣になつてるのにこの上妾が居なくなつたら……と、妾此子に惹かされて妾の爲なければならぬことは皆な時機が過ぎたのです、此子の大恩人の榊樣に對して如彼御迷惑を掛けた時、妾さへ居なかつたらお母樣のお憎惡は消ねるだらうと、當邸を出る覺悟もした位だけれど……何事も此子の爲に心が鈍つて……强い決心は有つて居ながら……爲る事は皆な何の役にも立ぬ弱い弱い女になつて了ひました』

袂を顏に泣き伏す綾子。

『妾この子に……別れる事は出來ないからねね』

と微かに聞ゐる血に咽ぶ聲、音藏も手拭を口に咬へる。

（二）

音藏は此上は早く玉川の綾子の實家へ目下の現狀を打明けて相談を遂げ、両親の力を借るが可

からうとの意見を立てたが綾子はそれを肯かなかつた、何も知らぬ老人に苦勞を掛け、折角勤め向きの都合も善く樂みに働いて居る妹にまで憂慮させるのは子とてし姉として忍びぬから、身と精神と持堪へるまでは此儘に獨りで難儀と鬪ふて行く、と悲しい決心を語る。

『妾の居る所へ彼な婦人を連れて家庭一切の事を任すと有仰る位だからね、此上何な目に遇はされるか知れないけれど、妾は唯離緣を承諾しないといふ事だけが楯なんだよ、法律の手續を爲なければ現今は夫一人の了簡で別れるといふ譯には行ないからね』

斯う云つた綾子は我を虐む苦惱が、物の形と其處に現はれたかの樣に、目を閉つて身を顫はせた。

『音藏、妾斯な情ない……法律といふ物の力を借らねば夫や我子の傍に居られない身にならうとは思ひませんでした』

『奥樣、俺ア法律なざ解りませんが、旦那は奥樣を出す事は出來なくても、旦那が出てお歸りにならない此頃の樣なのぢや、實際別々に被在るも同樣でごせいまさあ、此事を云つて、偶の俥の御用の時俺ア何度と知れず御異見を申しましたが、モウ精神が全然變つてる旦那の耳には入りませんや、出世が爲たかア俺にも邸へ歸るなつて無体な理屈を……それを云ひ破る

辯口は俺風情にアごせいません、強つて御異見をして解雇ると云はれたら其限り、奥様や坊様ともお別れをしなきやなりません、奥様、俺ア昨日で七日の間、毎晩夜の曉方に、信心の成田不動に水垢離とつてお願ひしたんでごせいます』

『お前が？……まあねね、音藏……妾何にも云ひません』

と綾子は感謝の心に掌を合せる。

『奥様、勿躰ねい事を爲さいますな、ナニ俺アね、旦那のお精神が何しても合點が行きません民友黨の名士で名を轟かせた旦那様が、いくら巽さんや佐藤さんが豪いたつて、出世がして い富豪になりていたつて、コロッと手の裏反してのあの醜態ア……あの御様子が腑に落ちませんや、これが俺ら仲間の無教育な、何も知らねい徒輩なら金に靡くの襟に着くのといふ事もごせいますが、代議士まで爲される旦那の行動ぢやア、これには何か深い理屈があるだらう、旦那の本心が解れば又奥様や坊様も御心痛も薄らぐ事もあらうかとね、俺ア灼かな不動様にお絶り申したのでごせいますが……昨夜が滿願の今日といふ日に、あの狐阿魔が乘込むんぢやア、不動様も聞えねねと……俺ア業腹で堪りませんや』

一圖の誠意に佛を罵つた。

『併し奥様、俺ア旦那から追拂ひになつても、奥様と旦那の間が以前のお睦じい中に復つて、あの榊様を連れて來て坊様に遇はせる迄は、身が粉に骨が砂利になつたつて、屹度蔭ながら御奉公を致します』

熱した聲ざまは火を吹くかとばかり、眞情の極みを盡した。

綾子は身に餘る苦痛を誰に相談の倚賴も無い今、母子を思ふ音藏の切なる情義は心に泌みて嬉しかつた、五年前に緣あつて抱へた後、二年目に女房が長の病氣で死んだ時、綾子が何彼と世話をした深切が、モウ江戸ッ兒の殿かとも思はれる、俠氣と涙に富んだ此音藏の肝に忘れられぬものに深く彫りつけられたのであらう。

（三）

『今日は變つた事のある日だこと』と口の中に呟やきながらお濱が座敷に來た。

『奥様、神田の寺田様から電話で、奥様に御相談があるから今から直にお越し下さいます様に と……』

『寺田さんから？』

と云つて綾子は音藏と顔を見合せた、姑の兄寺田幸作の店からの電話である。

『お母様から』

『イヱ男の方の聲ですよ』

『お母様は高輪の別莊に被在る筈だから……まだ繋いであるね』

綾子は急いで電話口へ出たが間もなく座敷へ戻つて來た。

『音藏、お前御苦勞だが妾俥で行つて來やうと思ふが……一寸妾に至急話したい事があるといふのだがね、乞度妾の身の上の事だから何だか獨りで行くのが……お前負傷はまだ惡からうねね』

モウ音藏は立上つて居る。

『此位の負傷は……奥様寺田様から呼びに來るのは碌な事ちやアごぜいませんせ、僅た一軒の御親類だが、あの方は御隱居様の味方の上に、第一世間の評判が巽さんの御用人の様に云つてますからね、今度は旦那と一つ腹かも知れませんせ』

綾子は頷いた。

『妾にも左樣思はれるがね、來いと云はれて行かない譯にも……それから此方から進んで話をしやうとすれば此上は矢張りお母樣にお縋り申すより他に手段はないのだから、お母樣にもお目にかゝつて、妾モ一度何な……何なお詫でもして來ませう……』

罪なくして詫びるといふ綾子の意中を察して音藏は涙を呑んで部屋へ下つた。

× × × × × ×

大野邸の門前の老櫻は今を盛りに咲いた植物園の花見歸りが、知るは態々立寄り知らねは思はぬ發見ものに三々五々打連れて老木の春を賞するのである。

『これは驚くべき物ぢや、斯んな花は東京中何處を探しても有るまい』

『花が覆ひ被つた門の風趣が何とも云へないね』

『オイ〳〵君達は花にばかり驚いてるがモ一つ驚くべき物があるぞ』

『何だ何だ』

『此門の標札を見い標札を』

『大野廣之……か』

『ソラ民友黨の名士といふ面を冠つて世間を瞞着した大野廣之よ』

『ウンあの代議士の、彼奴の邸宅か』
『それァ怪しからんな、實に怪しからんな』
『何がだい』
『櫻花がよ、家もあらうに變節漢の門前に咲くといふのは怪しからんぢやないか』
『はッは、、、』
『は、、、、、』
書生風の一隊は過去つた、罵つて行く人の後ろへ花は一片三片散つた。
『見事な花やおまへんか』
『然矣、立派なもんどすえなァ』
『祇園の花と何だすやろ』
『勝負になりまへん、櫻は京阪より東京だんな』
『オ、こゝの宅大野代議士の家だつせ』
『大野代議士て、あの民友黨を脱いた？』
『左樣や巽伯に買收された評判のある人やがな』

『能う此門壞さなんだこつたすな』
『櫻のお蔭で助かつたのかも知れまへんせ』
『は、、、』
『ほ、ほ、、、』
京阪者らしい男女の群が通つた、これらの聲が聞えたか何か、門内に俥を曳出して掃除にかゝつて居た音藏は、忌々しさうに門前を覗いて舌打をしたが、軈て轅を上げて玄關へ寄せやうとすると、久振り衣裳を着換へた綾子が薫の手を引いて此方へ歩んで來た。
『奥樣そこへ持つて參ります』
『イヱ、此子が門まで送るといふからね、お留守番をする約束だから、何かお家苞を買つて來ませうね』

（四）

『お母樣早く歸つて頂戴……僕寂しいから』

『エ、宅の俥だから直ですよ、ねえ音藏』

『オ、坊樣お留守番でごせいますか、そんなら音藏が宙を飛ばして行つて來まさ』

『まあ美しく咲いたねね』

と綾子は空を仰いだ、春に反く身は門前の花を眺むるも憂く、二三日前から女中の喧ましい報らせにも玄關まで出て來なかつたのである。

『花を見て種んな事を吐かして行く奴がありますからね、今年ばかりは咲いた櫻が恨みでさ』

と音藏は愚痴を云つた、種んな事とは夫を罵しる聲とは綾子にはスグ通じた、憂思あれば花に涙も恨みもある、日に輝いて咲き誇る色よりも、風に任せて散る花片の、いつそ心易くはある

まいかと、今チラ〳〵と我に降る白い物を凝視て綾子は恍然とした。

『お母樣、去年はお花見をしたねえ、ホラ榊先生が此處で劍舞を舞つたらう、お父樣も居た、此處へ莚を敷いて毛布を敷いて御馳走を喫べたらう、ねね音藏、音藏も居たねえ』

『オ、坊樣能く覺ねて被居る、違ねねえ榊樣の劍舞に旦那の謠曲も……』

と云つた音藏は去年と今年の一年の間に同じ花の下に立つ人の同じ身の上でない感慨に、後の詞は喉に塞がつて出なかつた、綾子も懷ひは同じである、花の散り込む盃を獨りで乾すは興な

いと自らに分けた夫の今は〳〵黄昏を酒宴移す座敷の途、木のもとながらまどろめば櫻に結べる夢かうつゝか……寢てか覺めてか春の夜の……と謠の節も面白く我に戯れ酒の機嫌の手をとつて、優しい詞もあつたものを、實に夢か現か去年に今年の變る身は、此花再び咲き出づる時此處に佇む母子の運はいかに開くかいかに散るか、花に問ひたい人の身やと、花の下蔭色映らうと面も輝く春の光を浴びながら、冷たい雪に立つ心地で、聲も發せず俯向いた、音藏は寂しげに花を眺める薫を慰さめて。

『坊樣、今日お留守番の代りに明日は御母樣に御馳走を拵へて戴いて又此處でお花見をしませうよ、ねね奥樣』

『ほんに左樣だねね、それは可いねね、妾何か御馳走を澤山しませうね』

『花見だつて榊先生は居ないもの、詰らんなァ』

『エ、一寸お願ひが……』

と此時門の前に立つて此方へ聲を掛けた男がある、廣告屋めいた色の洋服を着て頭髪をピカ〳〵させた西洋の道化人形に魂入れたやうな綺麗な小男で音藏が『何だね』と云つて出て行くとピョコ〳〵と器械の樣に二三度頭を下げて、帽子に挾んだ大きな名刺を出した、○○活動

寫眞會社一等辯士中野嵐舟と書いてある。

『ヱ、手前はそれですがヱ、甚だ恐入つたお願ひですがヱ、お邸宅の御門前を暫時拜借したいのでヱ、』

『門前を？、お前さんがね、何をするんだい』

『ヱ、この櫻花爛熳の光景を背景と致し暫時撮影の許可をお受け申したいのでヱ、當會社を代表して手前が伺つた樣な次第でヱ、撮影は舊演劇の舞臺で藝題はヱ、』

『チョッ一寸待ちねい、お前さんばかりがべラ〳〵喋舌たつて些とも解らぬ今御用が混んでる所だ手取早く解る樣に云ひなせい』

『イヤ甚だ何もヱ、活動眞寫の舞臺に此御門前を暫時拜借したいのでヱ、』

『ウンお前さん活動か、この櫻を寫眞に撮りていといふんだね、それは勝手にしなせい、お邸へ迷惑のかゝらねいことなら』

『有難う、何も有難う、實に見事な櫻花ですなア、撮影の藝題はヱ、花は櫻人は武士赤穗誠忠錄と申すのでヱ、此櫻に斯幕を張らして頂いて其下で彼の淺野内匠頭が切腹を……』

『何だ、切腹だ？』

『ヱ、あの腹切場で』

『ヱ、ッ途方もねえ、そんな事は可けねねね』

『そ、そんな事を仰有らないで』

『ヱッ可ねいつたら可けねえ、愚圖々々〳〵吐かすと毆り倒すぞ』

怒鳴り立てた聲に小男は縮み上つて走つた、遙かをまだ走る後姿を眺めた音藏は苦り切つた顏をして。

『チョッ心配してる矢先に緣起でも無え事を……腹を切つて……切れて堪るもんかッ』

（五）

寺田の神田の店は石材の問屋で、主人幸作は此店と深川の材木の店を掛持にして老齡の加はると共にます〳〵活動を增し女房も子も有たぬ獨身を、何の慰籍ぞと蔭口利く世間に頓着なく、世界の有金悉皆己が金庫に吸寄せねば目を瞑さぬ了簡らしく、黃金の冷にも感冒一つひかぬ身體は店の石材より頑健を誇つて、モウ幾度か成功雜誌に寫眞入の成功譚を掲げられ、その金

力養生法といふ奇抜な主張は文盲な實力家として彼を崇拜する一部の人に喜ばれた事もあつた。

幸作は此處と深川の店を事務所にし高輪の別莊を夜の寢所に極めて居るのであるが寢所は大抵空虛で其家には廣之の母で自分の妹の仲子やら別莊番やらが留守をし、幸作は彼が所謂『どれと極ぬのも勝手が可い』主義で彼方此方の妾宅を氣の向き足の向きで夜の巢とするのであつたその事務所の神田の店へ綾子を呼寄せたのは何事か解らぬが、一時間前に廣之の姿は此處に見えたのである廣之が俥で何處へ行つた後幸作は急に小石川へ電話をかけたのであつた。

綾子は表通りの店を避けて横丁の門から入つた、土が金の樞要の場所をこれだけ取圍んだ富だけも大分の物だらう、石疊を三間ばかり進むと赤煉瓦の小締りした西洋館で、軒下はスグ日本建の店に續く三階建で楷下には諸國產の石材標本を美しい飾筥に容れて陳列し、博覽會の賞狀賞牌が壁に隙なく掲げられる、隅の螺旋梯は美しい塗色と金具の裝飾に、折柄窓帷透す夕陽が映らうて灼燦しさは眼も眩む樣である、綾子は此家へは初めて來たのである、音藏は俥を門前に置いて綾子に隨いて扉口まで來た、十四五の女給仕が出て店の方へ取次に行くと暫くして。

『只今來客ですから暫時此室で』

と陳列室へ導いた、音藏は門側の腰掛で氣遣はしい顏をして居た。

柱の大時計が六つ鳴る、電燈が點つた、まだ幸作は出て來ぬ、綾子は薫が家に殘してあるのが氣になるのと、今スグ來て呉れとの電話をかけながら一時間餘りも待たせる幸作の心を計りかねぬ、不安の念に堪へぬので何度も給仕に催促させるとその度に只今といふ返詞である、音藏も扉の外まで行つたり戻つたり、いづれは善くない話と極めた主從は待たせらるゝ程苦痛の增すのに心を刺々させた。

三楷と二楷の戸締りだらう、鐵戸を捲下す轟然たる音、其音にも綾子は胸を騷がせた、女中に托して置いた薫に何事か？……拵らへた想像が當つた氣がしてハッと思ふと冷たい汗がタラ〳〵と流れる、居堪らず音藏に電話をかけさせやうと椅子を離れた時。

『ヤ待たせてお氣の毒だつたの』

と幸作が現はれた、長い間訪れぬ詫やら何やら叮嚀に綾子が挨拶するのを輕く受流して。

『俺ア夕餐が未だぢや、一緒に喫べやうかの』

と給仕に何か命じる、綾子はそこどころではない。

『あの妾失禮ですが今日はチト心急きでございますから』

『急く？、は、、、久振りぢやないか貴女に遇うのは、まあ然う急かんでも可い、夕餐を喫りながら話さう、チト相談したい事があつての』

と幸作は落つき拂つて居る。

『此室は可ん、此室は店同様ぢや、二楷へお上り、誰も居やせん、誰も居ない所でないと話し難い……といふと豪い粋な話の様だなはッは、、、』

話し難いといふ詞に綾子は偖はと今更ながら胸を抱いて、螺旋梯を踏む足の、一歩一段に身は消え込む心地。

二階は高い天井に王冠型の電燈が釣つて白火屋の二つだけ點つて居る、それでも美しい裝飾の全部は華やかに照された、悉く富を誇らぬ物もない中に何といふ石か彩筆で施れた如き花形の斑ある石面の卓子は疊一枚の大きさのが一つ二つ三つまでも、滑かな面に光りを受けて月に照る雪かと美しい、其中央のに紋純子張の肱掛椅子を寄せて肥滿した體格を靠せかけると。

『さあ貴女此席へ、今に何か御馳走が來るぢやらう』

(六)

百味の飲食も箸とる氣は生るまい、綾子は人の憂鬱を知らず顔に悠々と夕餐の用意を命じた幸作の心を恨めしく思つた、早く要談が聞きたい、寂しく我を待つ薫の所へ歸りたいと椅子にもホンの眞似の様に腰かけて。

『偶に伺つて身勝手ばかり申上げて濟みもせんが宅には子供と女中ばかりで……子供も少々惡くて臥せつて居りますので……』

『薫さんが不快かの、併しそれは氣遣うには及ばん、恰度貴女と入違ひ頃に仲子が歸つた筈ぢやから』

『お母様が？』

絶ねて歸つて來なかつた母が不意に……それも恰度自分と入違ひ頃を計つて……綾子は變に思つた。

『そう貴女の様に急いても少時と埒の明く話でも無いぢや、マア能う氣を落付てな餘り物事は

急遽しては可ん俺を見なさいこれで却々忙がしいテ、三百六十五日算盤放す隙は無いのぢやがそれで隨分と氣保養もする命の洗濯も爲やうといふもんぢやはッは、、、』

『ほ、ほ、、、』

と詮術なしの交際笑ひ、その中に洋食らしい物が運ばれたが美しい皿や道具も何が何やら綾子の目にはとまらなかつた、幸作は手酌で細長い標色の壜から飴の樣な液を小さな玻璃盞に注々と注ぎそれをグッと仰いで舌打すると、大きな手を伸して綾子に差した。

『あの……妾御酒は不調法で』

『マア受けなさい、此酒は西洋の滋養酒ぢや、女や子供でも飲める、バアと氣が散じて極可い俺は毎晩此酒を二三ばい飲つてから始めて自分の身體になるテ』

『お酌を致しませう』

と盞を排ける手段には壜持つより方法が無い。

『や貴女の酌で飲むかの、酌は美人ぢやはッは、、、』

綾子は厭な顔をした。

『お話しを伺ひたいのでございますが……』

『オ、要談か』

と云つたがまだ幸作はケロリとした顔、急いで來て呉れの電話は忘れた樣にして居る。

『お話は妾の身に干つた事とは存じて居るのでございますが……種々の事がお耳に入つて居る事でございませう……皆な妾が行届かないからでございます』

モウ堪りかねて此方から切つて出る、何せ姑方夫方の幸作である、理非の辨解を此處で爲たところが何の役にも立つまい……と始めから自分を沒てかゝつた。

『その事かの』

と幸作は憂然と皿に肉叉を置く、宛然その事でも無い樣な氣振で。

『それは聞かん事は無い、聞いて居るがの、俺は斯いふ性分ぢやから不必要な事はなる可く忘れる樣にする、役に立ん事は此耳へ入れば此耳から抜かせて了うから、唯總括んだ肝腎の事のほか心に留めんよ』

『ハイ……それでお要談は……』

『要談も括んだところぢや、一切の紛擾は云ふのを廢にしての』

と又盞をとり上げたが、厚い唇を舐りながら、俯向いた綾子の輪廓の正い横顔やら白い襟首

にかけ流るゝやうな電燈の光が美くしう射し添つたのを凝と見遣る、今度の詞が？、と綾子は胸を轟かす。

『はッは、、、然し貴女は何も鬱々と心配する事は要らん、俺が居る、俺は廣之の伯父ぢやからつて廣之や仲子の最負ばかりは爲ん、此場合になつては僅た獨身者の貴女の爲に充分力添をして上げる積ぢや、ナニ廣之ばかりが男ぢやない、大野の家に今夜から歸れんたつて些とも心配する事は無い、世界はそんな狹まくろしい窮屈な物ぢや無いテ』

綾子はハッと水を浴せられた氣がした、急に出ぬ聲を絞らうとする、それに被せて。

『要る點が廣之は貴女を厭といふ、貴女は嫌れても居る……と斯なるのぢや、併しだの、廣之の厭といふのが惡いか、貴女の理屈が善ねかはそれはモウ問題にならぬ、一旦厭となつた女房は好きにはなれん、貴女もぢや、離緣される覺ねが無いと云つたところで、他人扱ひにされる所に喰付いて居る譯に行んと云ふて裁判所へ驅け込むで、両人の恥辱になる事を世間へ曝す事も出來ずぢや、そいぢや貴女は何したら可ねかといふに何も思案も心配も要つたことぢや無い、厭といふ男は此方も厭ぢや、まだ子供が男で幸福、荷物の無いのが將來からの貴女に何程有難いかも知れん、サッサと出て了うたら可い、出ると思うと腹が立てば抛つて出て遣るのぢやはッは、、、』

（七）

幸作の口から正しい筋道の話を聞うとは豫期しなかつた綾子も彼が平然として語り出す無法とも亂暴とも云ひ樣のない詞には暫時呆れて其顏を眺めるのみであつた。

『貴女の考へはソラ俺とは違うぢやらうだけどの、必竟の終局がそれになる、それになるより道は無いテ』

『妾にはそんな事は出來ません』

と云放つ綾子の詞を大きな燒肉を頰張り口をムグ〳〵させながら『ウ、、ウ、』と受けた幸作はナイフを離しもせず、靜に喉へ落すとニタ〳〵と笑つた。

『さ、其點ちや、貴女が然云ふ事は遇はん前からチャアンと判つとる、貴女は物を一圖に思ひ詰る性質ぢやから左樣なる、けどそれは損ぢやの、それは貴女の大きな損ぢやの』

『妾損德の考へなぞはありません、妾唯女の守る道を……妻として盡す責任を……』

『女の道と云ふのかの』

と何をか嘲けつた笑を見せて。

『俺の云ふのも女の道ぢやが今の世界に通用する女の道を俺は云ふのぢや』

『妾夫や子供を抛つて出るといふ様な……そんな事は女の道ぢやなからうと思ひます』

幸作は些とも騒がぬ。

『ナル程貴女の云ふのも道ぢやつたらう瀛車や瀛船が出來ても函根の古道はまだあるからの、貴女は旅をするのに古い險い山阪道があるからといふて便利な汽車汽船に乘らんかの、損といふのは、そこの事ぢやが』

我ながら巧い比喩を引張り出した哩といふ風で哄笑をする、綾子はモウ此席に居るのが堪へられぬ苦痛である、薫は寂しがつて待疲れて居るだらう、母が歸つたと聞いては猶更に家が氣にかゝる、先刻幸作が大野の家に今夜から歸れんとなつても心配するなと云つた詞は家を明けた不在の間に萬一やそんな事になつたといふ意味ではあるまいか？、怪しう心は騒ぎ出し動悸は躍る、今鳴つた八時の時計が早鐘と響いた。

『女の道も男の道も時世時節で變つて行くからの、そこを能う分別せんと獨りで馬鹿な損を見

るのぢや、貴女が今其分別せんならん瀬に立つとるのぢやが兎角人は自分の事は目に見ねん傍からなら善惡が能く判る、俺は貴女の味方をするからの、貴女何ぢや一番此際そんな損な事云張らんと俺に打倚れて呉れんかの、それが何より上分別と俺は思ふテ』

『……貴方に倚れよと仰有るのは……此事をお任せするといふ事でございますか』

『此事といふて此事はモウ決定とるぢやないか、緣が無いのなら詮術が無い、モウ大野の家を出た貴女ぢや、將來からの身の所置に就て俺がウンと一肩入れやうぢやないか』

と椅子からズウと身を伸して低い聲。

『これは廣之や仲子に秘密ぢやがナニ貴女は俺が安樂に世話して上げる、の、薄情な男に情を立る事は要らん、先方が先方なら此方も此方ぢや、その復讐はそれ、の、實力のある方が勝つ、これ見たかに……』

綾子は柳の眉をキリ、と動かし衝と椅子を離れた。

『妾は……妾は大野廣之の妻でございますよ』

『はッは、、、貴女のそれが惜しい物ぢや、まあ然う腹を立てんかて可い、その相談が出來んといふてまた他の……』

『お呼びになつた御用はそれでございますか妾失禮ですが還らして頂きます』

聞くは穢れと耳に蓋する氣で、胸一ぱいの無念にカチ〳〵鳴る齒を喰締り、入口の方へ行かうとする綾子を、幸作は呼止めた。

『歸るといふて貴女は何處へ歸る氣ぢやの』

『ハイ妾には大野といふ夫の家がございます』

『はッは、、、貴女は存外正直ぢやの、大野の家にはモウ貴女を入れまいテ』

『エッ』

『だからそう立腹せんでも可い、俺が力になつて上げやうといふのもそれでぢや、マアお掛けなさい、今夜は泊る氣で緩乎するが……』

綾子は入口の扉を明けやうとすると何時の間にか外らか錠が下ろされてあつた。

（八）

押せども動かぬ扉の前に綾子は面相凄く顧向つた。

『此扉をお明けなさつて……』

『其扉はスグ明く、去るの出るのは餘り外聞の可い話でも無いから態と締めたのぢやが……其扉は俺が此處の電鈴を押せばスグ明く、それよりも貴女の身の上の埒をあけたら何だの』

幸作は憎い程悠々と構へる、盞を持つた儘斯云つた。

『妾モウ自分の身なぞは何なつても構ひません、御相談も致しません、此扉を……此扉を早くお明けなさつて下さい』

大野の家にはモウ自分を入れまいとやら今夜は泊つて行けとやら、必定不在の間に變つた事の起つたらしい樣子は解る、錠を下した一室に厭らしいこと云ふ幸作と此儘時刻が過されやう、萬一や薫の身に……、綾子は氣も逆上つて力任せに扉を打叩き押し試みたが手は萎ゑ身體は彈き反されるばかり。

『貴方は妾を……妾を此室に無理に押し込めやうとなさるのですか』

『は、、、貴女他人の深切をそんなに惡くとるもんぢや無い、まあ左樣バタ〳〵せんとモ一度此席へお掛けなさい、俺が能う貴女の腑に落る樣に云ふて聞かさう、其上で熟りと思案を決めるが可い、其扉は明ければスグと明く、貴女が今から大野の家へ歸つたところが彼家の門

の戸は却々明く事ぢや無い』

『エ、』

『貴女の今日の不在の間にスッカリと形勢は變つて居るのぢや、薫は男の子で男親に隨くのが當然ぢやからの、これは廣之さんが取る、貴女は一先づ生家へ引取つて貰う……とこれは母子相談の上ぢや、併し俺も賛成した、といふのはモウ其手段より他は有るまい、何程貴女ばかりが……』

綾子は半狂亂の態で再び猛然と扉に身を投げかけると。

『音藏ッ、音藏ッ、此扉を明けてお呉れ……音藏ッ』

と悲しい聲を振絞る、哀れな姿を冷然と見遣つて。

『貴女ばかりが離れぬ氣でも夫の心が變つて居ればコラ緣の無い話と諦めるよか詮術が無いぢやないかで、別れるとなると心變りの廣之さんに未練も有るまいが子供には貴女も惹かされう、これは貴女の爲にも薫の爲にもイッソ知らんと別れとした方が罪が無い、と斯う決つたのぢや一寸殺生の樣にとれるぢやらうが能う考へたら慈悲の計ひと俺は賛成したのぢや』

『エ、鬼とも畜生とも……貴方達は揃ひも揃うて能うそれ程……弱い女の妾獨りを能うそれ程

程に……』

『イヤそら違ふ、俺も一緒に云ふて貰うたら豪い迷惑ぢや、マア斯談が決つたからの、其處までは俺は廣之の伯父といふ資格ぢや、大野の家の納まる樣に爲んならん、出來ん事を何時迄も引張つて泣いて見たところが何になる、がこれからが貴女の味方ぢや、夫と子に別れた貴女の身になつて考へる』

『エ、ッ貴方の樣な……貴方々に味方になつて貰ひません……音藏……音藏ッ此扉を……此扉を明けてお呉れ……薫が……薫が……』

『は、、、、、薫の事はモウ貴女が心配せいでも可い、彼子は大野の後繼者ぢやで廣之さんが大切に爲やう、夫よか貴女は自身の事を考へたら可が、此儘玉川の實家へ歸るといふのも餘り見つとも可い事でも無い、又貴女が今から田舍の土に埋れるといふのはコラ寶の持ち腐れぢや、そんな勿体ない事は無い、まだ〳〵貴女なら今から一花も二花も咲く、子供といふ荷厄介が無いのが幸福と云ふたのは此點ぢやテ、物は取詰めて一圖に考へると大きな後悔をする、何の俺が惡い事を云ふもんか、酸いも辛いも知り抜いて浮世の風に頭の毛抜かした幸作ぢや、心配も考へる事も要らん、之が反つて貴女の爲には良い運の廻り合せといふもの、な

マア氣を落附て今夜は……今夜だけぢやない十日でも二十日でも俺の宅に居て……』

耳に両手で確と蓋して扉の前に俯伏せになつて居た綾子は、脊を撫すられて屹驚して起上る。

『何をなさるのです』

『はッは、、、マア左様嫌うた物ぢやあるまい、貴女も今日から獨身なら俺は繫累なしの男鰥ぢやはッはッは、、、』

強い酒の香が温う顔に被る、綾子は捉られた手を振放し懸命の力で幸作を突いたヨロ〳〵として踏止ると。

『何、何をするのぢや、老人を手荒い事は爲んものぢや、些と優しうして呉れても』

と又もや縺れかゝる淺ましさに、綾子は今は明かぬ扉を飛退いて窓の下へ決心の身體を寄せる身は碎けてもと手を掛けるのを、後ろから確かと抱止めた、二歩三歩引戻されて『アレー』と悲鳴を上げる時、聲の響きか觸ってか、チャラ〳〵〳〵と厚玻璃は外から碎け、ドット黑い姿が躍込む。

『オ、音藏かッ』

『奥様御安心なせいまし』

（九）

主人の危難に飛込んだ伸夫音藏は綾子を後に衝立つと、これはと驚く幸作の胸倉を鷲攫みにしてグン〳〵と二三度小突廻し、ドッと突放すと一間ばかり飛んで壓やげた様に倒れる。

『ヤイ毫碌奴ッ、何するんでい奥様を』

音藏は腕を捲つて再び飛込んだ、長うなつた上へ馬騎になり續け様に幸作の禿げた頭をピシヤ〳〵毆りつける、ウン〳〵唸く幸作の聲は苦し氣である。

『音藏、早く、早く妾を連れて歸つてお呉れ、此處を早く……』

『ヘイモウ大丈夫でごせいます、餘り長いからお氣遣ひして上つて見ると扉が閉つて明かねいそれに中からドン〳〵叩く音がするんで俺ア肝を潰して屋根へ上つて覗いて見ると此醜態でごせいまさア、コン畜生すんでの事に奥様を』

と又グッと襟を締上る、コッン〳〵と頭で床を鳴らす、幸作は眼を白黑して掌を合せた。

『音藏、それよりも早く、早く連れて歸つてお呉れ、妾斯しては居られない……』

『ヘイ只今……奥様斯な時で無くつちやア……此奴らが寄つて群つて奥様や坊様を虐めるのでごせいまさア、あの上がまだ虐め足りないで仕舞にア斯な大それた事を爲やがるんだ、ヤイ死損ひの狒々野郎ッ、奴らが腹を合せて奥様や坊様を虐めやうと爲たつてな、この音藏が隨いてらア、惡い事にお味方をしなとらぬいお日輪様が照つてらつしやるんだ、豪氣な屋躰を拵へやがつて不淨な金の番をする奴らを何時まで神佛が拋つて置くものかッ、さ何だ、云分あるなら云つて見ろ』

『も、も、物が云へぬ』

と虫の聲、幸作は喉の手を排けやうとして片手は音藏を拜むのである。

『はッは、、、俺を拜むので奥様を拜めッ』

『これ音藏妾は心が急く、妾の不在の間にお母様が歸られて……モウ妾を大野家に入れない事になつてるそうだから』

『エッ』

音藏は仰反るばかりに驚いた。

『何と仰有る、お不在の間に？』

『モウ薫にも遇はせない事になつてるそうだからね、妾を早く連れて歸つてお呉れ』

『そゝれア事實の事でございますかッ』

幸作を放して突立つ音藏。

『了つたッ、お、奥様、今日は何も變に思つたのでございます、それぢやア此奴が奥様を誘き出して、其間にスッカリ……エヽ糞ッ』

床踏鳴らして口惜しがつた音藏は、矢庭に卓子の上の青銅の花瓶とるより早く振かぶつて幸作に躍り蒐る、其手に取縋つて。

『これ音藏、そんな事を爲たつて、怪我があつたら此方の過失です、それよりも早く、早く妾を連れて歸つてお呉れ今頃薫が何うして居るか……妾モウ……』

『チ畜生ッ』

音藏は吠ゆるが如く大喝すると、石の卓子に花瓶を拋た、恐ろしい音がして美しい卓子は角がとれ、花瓶は轉がつて棚の石膏像を微塵に碎いた。

『覺へて居やがれッ、さ奥様、歸りませう』

『音藏、そこの電鈴とかを押すと扉が明くと……』

『電鈴を？』

と見廻す彼方の柱に赤い矢の印を描いた板が掲つて其下に白い釦が見へる。

『アッこれだ』

音藏が押すと扉は自然にギィと開いた。

『畜生ッ、斯な魔法見ていな仕掛けを爲やがつて此室で惡い事を企畫んだな、今に俺が此屋躰骨も奴の禿頭も叩ッ壞しに出直すから待つてろよ』

（一〇）

車上の綾子曳く音藏、心は宙を飛んで小石川に歸つた、幸作の言振りで不在の間に變があつたとは知れる、非常手段を行ふて自分を再び大野の家に入れぬ運びにした夫を始め人々の鬼とも蛇とも言語に絶えた擧動では、薫の身の上に何な事があらうも知れぬ、早く樣子が知りたいと身を悶えた綾子は門前に着くとヒラリと飛下りる、音藏は湯のやうな汗を拭ひもせず、果して閉め出された門の戸を力に任せて割れよと叩いた。

寂寞として聲は無い、朧ろの月に花が散る、叩けども應へのないに業を涌して『ヱ、ッ』と唸つた音藏は扉に身を打付けたが何の甲斐も無つた。

『奥樣ッ』

『音藏』

兩人は無情の扉の前に佇つて名を呼び交し顔を見合せた、落花は地上に白う敷く、白い上に茫然と立つ兩個の影。

微かに下駄の音がした、音藏は占めたッと喜び再び强く叩き出す。

『奥樣のお歸りです……奥樣の……』

『誰だへ、何によそんげいに門を叩くだッ喧しい』

肯て知らぬ老人らしい疎略な聲、音藏は躍起になつた。

『奥樣がお歸りになつたのだッ、早く此戸を明けなせい』

『あに奥樣だあ、何によ云やアがる、空家に奥樣があつて堪るもんで無えはッはッは、、、』

『空家だ？、オイ〳〵お前は誰だッ』

『俺空家の番人賴まれた者だい、左樣云ふお前は誰だね』

『當邸の大野のお邸の奥様が只今お歸りになつたのだッ、何でも可いから早く此戸を……』

『ウンにや此戸は明ることなんねわだ、お前達大野さん尋ねるのかね、それならモウ當所で無えだ、何でも高輪か何處かへ急に轉居したで、家財道具は後から運ぶからそれ迄俺に番をして呉れと頼まれただ、何でも事情があると見ねての、誰が來ても此門を明ける事はならねわと云ふのだァ』

音藏は當も無く睨んで地團駄を踏む、綾子は犇と身を寄せて。

『あの子供は何したか知つて居てなら詳しく話して下さい』

『オ、足の惡い男の子かの、彼子は奥様だッべえ、美しい女の人と……何とか云つたけの獨りで飛走る車よ、あれに乘つて先に行つただ、それから車で婆さんと息子どんとが出て行つたせ』

『音藏』

と微かに唸く様に云つた綾子は敷石の上へバッタリ倒れた。

『オ、奥様……奥様……何うなすつたので……お氣を確り……奥様ッ』

吃驚して抱き起す音藏に縋つて、遠くなる知覺を勵ましながら、聲はしどろもどろに。

『音藏……薫は今朝の佐藤男爵の妹に連れられて何處かへ隱くされたのだよ……妾覺悟はして居たけれど……彼の子を奪られやうとは思はなんだ……妾あの子を……普通の身躰でない彼の子を何して彼な……彼な人達に渡されやう……渡して凝としては居れない……あゝ妾……音藏ッ妾何したら可いだらうねね』

『御道理でございます……チ畜生ッ……、モウ旦那たァ云はねいや……人の皮着た犬猫同然の……奥様お許しなすつて、俺ア旦那とは今日限り奉公の縁を切つ了ひます、彼な人間は俺らの敵でさ……』

『薫……薫……音藏ッ、妾薫を彼な人達に渡して置く事は出來ないから……お前後生だから薫だけ取返してお呉れ……それで無いと妾……生て居る氣は……』

氣も狂はんばかり悲嘆に沈む綾子を介抱しながら、音藏は脅したり欺したり術を盡したが門は遂に明かぬ、音藏は此上は警察の保護を借つてといふのを綾子は制した、一家の紛擾を外に漏らしてはいよ〳〵此方の負になる上に、夫や薫の恥辱である、とそれを何しても肯入れぬ、更け行く夜を櫻の梢に月漸く傾いて、冷たい風に花はいよ〳〵舞ひ散つた。

『奥様、其處に被在しつちや冷ますからね、又御身躰に障つては可けませんや、此車へ入つて

暫時……』

『車に乗つても……妾行く所はありません……』

『……僅た一軒の御親類が如彼ぢや……奥様何だつて貴女のやうな方を寄つて群つて虐めるのでございませう、貴女はスッカリ悪い奴に取圍まれなすつたんだ』

『妾の身を退きさへすれば可いのだけれど……妾道理といふものはそんなに曲げられはしないと思ひました』

『道理も糸瓜も今の世の中にア有りませんや、強い悪い奴が勝つて、弱い善人が負ける時勢になつ了つたんだ……』

遙かに遙かに、月が語るか花が囁くか、夜氣に冴ねた朗々の聲。

（一一）

音藏の勸める車にも乘らず固く閉められた門の戸に倒れかゝるやうに身を寄せて綾子は詮術を知らず唯泣くばかりであつた、音藏も茫然として餘りに不意の出來事に當惑するばかり、憎い

人々を罵りながら空しく立盡す、憂愁を抱かぬ身であつたらいかに風情ある夜櫻の美觀ぞ、四邊の夜色も香ばしく、凝つて動かぬ白雲の梢から月の滴露と花が散る、散る花は情なく空に舞ふて、起つ人と蹲まる人と憂きに泣く姿へ美しう落ちて行く。

『音藏ッ、妾自分の身に愛想が盡きました、妾今までは何な……何な辛抱をしても夫に隨いて行く決心だつたから……假令法律の力に縋つても以前の夫にして見せると……人にも云へば自分にも堅い覺悟を極めた積りだつたけれど……それは自分も人も欺いたのです妾には此上法律の力を借るの警察へ願うのといふ樣な事は迚も出來ないものねえ、そんな怖ろしい事は妾には到底出來はしない……切れた愛は繋いで見せると云つたけれど……繋ぐ手段はこれ以上妾には無いのだから……妾モウ諦めます、夫も……子も……諦めて了ひます、……弱い妾は他人のする通りに服從はねばならぬ樣に生れて來たのだから、誰を恨む事もありません妾僅た一人で可い、今日から孤獨で暮すからね……』

『奥樣、そ、そんな心細い事を仰有つちやア可ません、何とも譬へ樣の無い非道な手段だから貴女樣のお意中をお察し申しますと俺ア此腹ン中を掻剝るやうでございますが……精神の腐つた旦那は兎も角、坊樣は誰が何と云つて邪魔をしたつて貴女樣のお血ぢやございませんか

旦那との御縁は切れても坊様とお母子の間は人間の力で分ける事は出來ませんや、そんなお心弱い事を仰有らずに……、奥様お考へもごぜいませうが暫時此音藏にお任せなすつて下さいまし』

『有難いお前の深切は……厚く禮を云ひますよ、十年も添ふた夫から捨られた妾を奉公人のお前がそれ程に配慮してお呉れのは……今の妾には神佛の慈悲よりも嬉しう思ひます、けれどね、妾は何う思うても玉川の實家へは歸れない、老父母と妹に憂慮や厄介をかける事は出來ないから、モウ誰にも縋らないで……縫針の賃仕事をしても獨身だけの糊口は出來やうから……お前も妾の樣な者を庇護て呉れた爲に斯な連累に遇つて氣の毒で濟みませんが、これも何かの因緣づくと思つて堪忍してお呉れ……今迄盡してお呉れの深切は屹度忘れはしないからね』

涙を拭いて綾子は起き上る、ガックリ傾いた丸髷に白い花の二つ、三つ、月の照らす横顏に血の氣は無い。

『音藏モウ斯なに遲くなつて氣の毒だけれど、妾を高輪まで送つて置いてお呉れ、寺田の別莊まで』

『寺田の別莊へ？、御隱居の所へでございますか』

と音藏は腑に落ちぬ返詞をして。

『奥樣御隱居の所へは止になせいませ、腹を合せた惡黨共が何をするか知れません、それより今夜は何處か目立ぬ宿へお越しなすつた方が、俺が付添申して御安心の出來る所へお送りいたしませう、明日になつたら又御思案もごぜいませうから』

『イエ妾大野の家を出る氣なら彼の人達だつて何も爲ないだらうから……お前に賴みたいと思つたけれど、妾が直接に行つて賴んだ方が早いだらう、妾モ一度薫に遇つたらそれで可いのよ、一寸でも可いから薫に遇はせて貰う樣に賴む積りです……此儘でモう遇はれないと思うと……妾こればかりは諦めが付かないから……』

『御道理で……奥樣坊樣には此音藏が命にかけてもお遇はせ申します、仕義に依つちやア此方へ奪返しても屹度お連れ申しますから暫時、俺にお任せなすつて』

『……奪返して欲しいのは妾の心だけれど、それも弱い妾には出來る事では無いと諦めました唯モウ一目遇ふだけが……』

緩く遠く聞ねて居た吟聲が近づく、音藏は聲する方を屹と見て、思はず二三歩前へ出る。

（一二）

去年燕巣主人屋。今年花開路傍枝。
年々爲客不到家。舊國存亡那得知。

聲する方は廊に霞んで見ねわかぬが花の此方へ歩む下駄の音と共に詩吟は高く低く明瞭と聞えて來る。

『奥様……奥様……』

『……』

應答のないのを振顧くと、綾子は冷たい敷石に膝を突き袂を顔に潸然と泣いて居る、音藏は眼を擦りながら、車の上の膝掛を取つて後からそつと着せる。

『……胡塵一起亂天下。何處春風無別離……』

『オヽ矢張り左樣だッ』

音藏は引きつけられた樣に又二歩三歩、月と花とに夢より淡い薄墨色の地を透す洋杖だらう空

に振る音。

『奥様、榊樣でございますせ』

『エッ榊さんが……何處に？』

『あの詩吟は確かに榊樣の聲でございます、あの美い聲を忘れつこはありません』

『音藏……妾彼の方にお目にかゝられた義理ぢや有りません、早く妾を隱してお呉れ』

と起上つてサッと車に乘る、音藏は勇んだ聲。

『奥樣、天道樣に見殺しはございません、恰度此難義な場所へ榊樣の樣な頼もしい方が被入しやつたのは……』

『イエ妾彼の方にあの上の御迷惑を掛ける事は出來ません、さ早く彼方へ遣つてお呉れ』

『ぢやア萬望俺にお任せなすつて、暫時車上で』

と音藏は車を門の隅の小暗い所に押遣り提灯を吹消すと、自分も櫻の根方に低く身を屈めた。

詩吟の主は榊直也であつた、一度び大野邸を去つた彼の姿は何處へ行つたとも更に判らなかつた、音藏は彼時から間もなく其神田の下宿を訪ねたけれど何處かへ移轉たとばかりで皆目消息が知れぬのであつた。

直也は櫻樹の下に空を打仰ぐ、依然として髯の埋めるに任かせた顏、取換へぬ古帽は頽れた椽が夜氣に濕つて、病葉の舞ふ形に額を厭ねる、太い洋杖を後ろに背を靠すやうに衝立つた。

『はッはゝゝゝ去年の如く咲いてるな』

『今年の花は去年の好きに似たりか』

獨語つた彼は靜に四邊を見廻はすと、ッカッカと門前へ進んだ、溝石に洋杖をカチリと云はせて兩手をそれに支へると閉された門扉に向つて、人に物云ふ如く微かに詞を發した。

『薫君ッ、君も此花の如く健康で居るだらうな、僕は花を見に來たんぢやない、君の安否を花に尋ねに來たんぢやが……花語らずぢや、僕は君の消息を人間の口から聞く事が出來ん、それを聞けば不愉快な事を併せて聞んならん、僕は今一切煩雜な人事を絶つて或事業に着手つとるのぢや、それを終る迄は世間との交渉は無い僕ぢやが……僅た一つ……僕に斷ち切れん人事がある、それァ君ぢや、君の事ぢや』

木蔭に潛んだ音藏は濕んだやうな直也の聲が一々聞取れる。

『僕の意志は何物にも捉ねられぬ覺悟ぢや、この獨立の僕を束縛するのは僅た一人の君ばかりぢや、君の小さな腕は僕を捉まへて放さぬのぢや……君の事を思ふと同時に忽ち不愉快極ま

る寃罪を想出して僕はゾッとする、それに……それに君の事が又しても頭腦に一ぱいになる人事と斷つて專念に筆を有ちたい僕の覺悟を滅茶々々に破壞する……僕に連れて行けと云つて弱らせた君は今頃何して居るだらうか……折角美しう作りかけた君が家庭の動搖の爲に詰らぬ影響を受けはせんか……斯な想像……モウそんな事は僕と何の關係も無いのぢやが……それが大きな不安の塊りとなつて二六時中僕を惱ますのぢや……』

直也は今は眼の前に少年薫の姿が居るかとばかり、誰に漏らす由もない胸中の感慨を人無き境に獨り語り盡す。

『君が無情に拂退ける僕の袂を握つて、……僕先生に隨いて行くと云つた、あの詞が僕を苦しめるのぢや……僕の過去の經歷は……僕が從來歩いて來た半生の旅の道には、隨いて行かうとする僕を突放した繼母は居る、隨いて來なければならぬ筈を逃げて了つた妻は居る……僕に隨いて行くと云つて呉れたのは君……世界に僅た一人の君ばかりぢや』

慘たる面の髯は濕れ浸つて熱い涙が玉と貫く。

（一三）

直也は答ふる聲もない門前に薫と語る心で暫時佇んだ、更けた夜をざあ〳〵と寒い風が渡る、地上の花は枝に復るかと美しう渦に波に舞ふ。

『オイ薫君、僕はモウ去くよ、此處まで來ると君に遇つた氣分になれる、櫻花が咲き誇つて居るのを見ると君も健康で居るなといふ感應が享けられるちや之で可い、之で自分の意慾は充實になる、能く勉强したまへ、君は僕に遇ひたい時は勉强するんぢやぞ、君の智識には僕が二年間の努力が潜む、讀む書籍が僕ぢや、描く文字が僕ぢや……勉强して堂々たる人格になるんぢや』

云ひ捨て彼は門前を離れた、ホッと吐く太息と共に帽子目深の其面は地上に凝と視線を落す、梢の影は鮮やかに、月は今雲を漏れて花落は白銀のやうに光る、靜かに空を仰いだ。

『君は是れ花を護り花は君を護るか……はッは、、、可憐な少年を護つて呉』

去るに重き足を移して直也は來た道へ引返そうとする、櫻樹の根方の黑影は躍り出た。

『榊樣ッお待ちなすつて』

直也は驚いて振顧へる、音藏は突然其袂を引捉んだ。

『榊樣、音藏でごせいます、音藏で……』

と云つたが後は詞なく顏を覗き込む、直也は帽子の椽をグッと前に引いて顏を隱す樣にして凝と音藏を見た。

『榊樣……俺ア只今のお詞をスッカリ聞いて居たのでごせいます……あのお詞を坊樣に……坊樣に聞せたうごせいます……』

『……』

『榊樣、貴方樣は何といふお優しい方でごせいますか……俺ア今迄泣いて居ました……泣かされて居たのでごせいます……』

『……』

『モシ榊樣、此音藏はモウ大野の……あの精神の腐つた大野廣之の抱車夫ぢやアごせいません可愛想な坊樣や奥樣の味方でごせいます、この邸にはお腹立がごせいませうが、音藏の性根は知つて下さる貴方樣だ……お詞をおかけなすつて』

默つて居た直也は此時苦しそうな聲を發した。

『放して呉れ……折角愉快になつた感情を……美しい情緒が穢れて了うのが情ない』

『穢れると仰有るのでございますか』

『穢れた人間の世界に呼び戻されるのが堪えられんのぢや』

と直也の聲は顫えて居る。

『君の美しい人格は知つとる、雖然君達に接近すると……僕の事業は破壞される、僕の仕事は成就せんのぢや……それでなかつたら僕は薫君の安否を君迄尋ねる……人を避けて今頃來やせん……放して呉れ……頼むから放して呉れ』

『俺もお頼みでございます、榊樣ッ萬望此袂に縋らせて上げて下せいまし』

『ナニ』

『誰一人力になる者もねい可愛想な奥樣を……萬望お助けなすつて下さいまし』

『大野夫人を……夫人が何かされたか』

『ヘイ……到底御離緣でございます』

『ナニ離緣？、それア事實かッ』

と暗くなつた門の屋根を見上げた。

『ヘイ而も今夜の只今の事でございます……榊樣、世の中にモウ神佛アございません、惡い奴們が寄つて群つて弱い奥樣獨りを酷い目に遇はせるのでございます……僅た一軒の御親類は』

『君、モウそれから後を云うな、僕はそんな事を……そんな他人の身の上の事を聞く譯には行かぬのぢや』

捉れた袂を振放して直也は足早に立去らうとする、音藏は周章て前に立塞がると足下に低う身を屈めて。

『榊樣ッ、押してお願ひの出來る事柄ぢやアございませんが……それ程お心に掛る坊樣のお身の上でもございます、萬望暫時……貴方樣の優しいお詞もモウ此の邸に居らつしやらねい坊樣にア聞えません、櫻の花は去年の通りに咲きましたが、このお邸はモウ空家でございますよ』

（一四）

『空家？』

と直也は聞咎めて。

『此邸には薫君は居ないか』

『へイ……』

『フム……大野家の家庭は……まだ平和にならんと見ねるな……薫君は何した何處へ行つた』

『それを何處だか知る事も出來ぬい樣な……情ぬい事になつ了ひました、奥樣と俺が一寸外出の其間に惡計の腹を合せて、歸つて見ると、モウ此通りに門は閉つて、中には空家の番人が……』

『フム……』

直也は眉を寄せて後方を見る、屋根の影が暗く落ちた門の隅から女の咽び泣きが漏れた、其が耳に入ると直也は急に姿勢を正して聲を勵ました。

『其處を退いて呉れ、僕は此處に居る事は出來ん』

『そ、そう仰有ねえで……榊樣ッ、今といふ今に逼つた奥樣の御難義に萬望御相談相手になつて上げて下せいまし、音藏がお頼みでごせいます、誰一人味方の無い……』

『エ、退けと云ふに退かんかッ』

餘りに烈しかつた聲に音藏はヘイと云つて袴の裾持つ手を思はず放した。

『馬鹿な事を云ふな、夫人の爲に不義の寃罪を受けた僕だ、其僕が夫人の相談相手になれるかッ』

『御道理でごせいます、が……モウ大野家の奥樣ぢアごせいません……餘りの非道に御決心なすつて、モウ再び大野の家へはお歸りにならぬ御精神でごせいます、杖柱の旦那はお心變りお命同樣の坊樣までお奪られなすつた……お可愛想な奥樣を……孤獨の婦人の方を救つて上げて下せいまし』

音藏は大地へベッタリと座つた、血を吐くやうな赤誠の聲には、岩をも貫かでは止まぬ堅い意氣が迸しる、勢込んだ姿を崩して直也は眼を閉つて默つた。

『モウ大野の奥樣じやアごせいません……惡い奴らの爲に酷い目に遇つた方を……』

『……』

『モシ榊様、坊様を思つて頂く優しいお心を可愛想な奥様にも……』

『イヤ可ん』

と直也は決然たる態度で、洋杖を腋下に挾むと、音藏を擦避けてサッサと大跨に歩み出す。

『榊様、それじやア現今の御住居だけでも』

と音藏は縺れる様に後に隨く。

『ナニ僕の宅か、僕も家は無いのじや、はッは、、、、』

と寂しい笑聲を殘して行く、音藏は腕を組んで茫然と佇つた、綾子の歔欷は微かに聞ゐる、月は落ちて花は消ゑ込むやうに暗くなつた。

『あんな人情に厚い方があつたもんじやア無ゐ、あの方をお賴みしなけア』

と音藏は再び後は追はんとする。

『音藏待つて……待つてお呉れ』

綾子は車から轉びる様に下りて音藏を遣らじと引止める。

去つた直也の下駄音が又近づいて來る、綾子は音藏の後に闇を楯に身を屈めた。

『オイ君』

と直也は後戻りして間近く佇つた。

『ヘイ榊様……』

『夫人はモウ大野家へ歸らん精神と云つた樣じやつたな、離緣を甘んじて身を退くといふ決心といふのじやな、確と左樣じやな』

『ヘイ……その御決心より他に手段が……』

『オイ音藏君、僕は更に關係の無い人間じやから敢て斯な事を云ふに及ばんのじやが……君に……君だけに一つ忠告をして遣らう、君も何時までも彼な夫人の爲に骨を折るのは止せよ』

『エッ何と仰有るので』

『如彼な……意氣地なしの女性の爲に力を盡すのは無益じやから止せといふのぢや』

斯う云つて直也は其人の居ると思はれる闇の彼方を屹と見遣つた。

『女性の生命は何ぢや、貞操ぢや無いか命に掛けて守らんならんのは操ぢや、假令何な苦しい思ひをしても、何な悲しい目に遇つても命以上の操を保護しなければならぬ、それが出來ん奴ア女性の資格は無いのぢや、利口な世の中になつて女性の貞操を破らすのに種々に重寶な

口實が出來とるが、あれは皆な嘘ぢや、獸類に等しい男共が女の肉を弄びたい爲に自分勝手に拵へた理屈ぢや、それを又有難い事に思つて我と女性の資格を打壞す意氣地なしが澤山居る、僕は大野夫人がそれらの仲間入をする女とは思はなかつたが……イヤ女性といふ奴ア何奴も此奴も絶望だなア」

（一五）

「モシ榊樣、奥樣に限つてそんな……」

と直也の罵倒に躍起となる音藏。

「そんなお方ぢやアごぜいません、あのお美しいお精神は……」

「それが買被りぢや、己れの貞操を保護する意思が夫人にあるのなら大野家を出る決心は出來ん筈である、虐待されるのが苦しいからと云つて夫を捨てるのは安樂の爲には貞操を拋つ女ぢや、虐待が何ぢや、苦しい位が何ぢや、命以上に守らんければならぬ貞操の前にはそんな事は何でも無い事ぢや」

「そ、そこでごぜいます、何な辛い事も御辛抱なすつて今日まで被居つたのでごぜいますが、欺して外へ拋出して家を疊んで隱れるッてい遣方ぢやイカニ奥樣が出ない考へでも何する事も出來ねいぢやアごぜいませんか」

「同棲を拒むのは大野氏の不法ぢやが其不法を遂げさせるのは夫人の過去ぢや夫人が緣を切る決心をすれば夫をして不法を遂げた惡人たらしめる、惡人に貞操を許したと云はれても構ん氣か、夫人は身自らの貞操を侮辱するのか」

疊みかける直也は其人を詰り問ふ氣勢である。

「今の奥樣ぢやア何う爲すつたら可いのでごぜいますか、そこを萬望御相談に……」

「他人に相談するよりも夫人自からの貞操に問ふのぢや、貞操といふ事が一人の夫にほか見えんといふ位ゐの事で女性の威嚴が何處にある、一度び貞操を許した夫は即ち一心同體ぢやないか、貞操は愛ぢや、眞正の愛の力は最善最美何物も之に及向う事は出來ぬ、之を捧げて惡に墮る夫を濟ふ……自分の善に同化させる、こゝに到つて始めて貞操の眞意義が生じるのぢや、夫婦は道連ぢやない、同棲は相宿と違ふ、善と惡との岐路になつて思ひ々々に好きな方へ行くのぢやア可ん、お先へ左樣ならで別れる事は出來ん筈ぢや、それが出來るなら虛僞の

愛ぢや、辛いとか苦しいとかいふのは貞操ぢやない愛ぢやない、虐待の限りを盡されたら此方は愛情の極致を捧げる、この確りした性根も据ゑぬ中に形骸ばかりの夫婦になりよる男女ばかりぢやから直に別れる、貞操を汚しながら犬の様な面を曝して歩く、そして云ふ事は趣味が一致せんの束縛されるのと云ひたい放題を吠える、束縛されぬ愛があるか、人間の絶對服從は夫婦に於て始めて現はれんけらばならぬ』

舌端火を噴くが如く直也は熱烈な夫婦論を音藏に浴せかけた。

『暴力で同棲を拒む事は出來やうが愛情を避ける武器を人間は持合さぬのぢやそれ位ゐの事は知つとる大野夫人と思つたが……貞操の女と正義の男兒は何處へ行つても拂底ぢやはッは、ゝゝ』

と笑つて。

『イヤ君への忠告が飛んだ所へ外れたな音藏君、今云つた如しぢや、お互ひに男にア男の魂がある女には女の魂がなくちや可ん、それの無い様な夫人の爲に何時まで君は骨を折つて居るかぢや、僕はそれを君に向つて忠告する迄ぢや、能く考へて見るが可い……薫君は君でも……誰でも可愛いだらうな』

『へイ……それを奥様も……一目でも可いからモ一度遇つた上で別れると……』

『それが眼前の小さな愛ぢや、眞に薫君が可愛いのなら永遠に母たる地位を棄てぬ覺悟が要る假令一時同棲が出來んでもぢや、我夫である我子であるといふ大きな愛の心を以て有ゆる迫害や艱難と闘ふて行く中には屹度夫に醒覺が與へられる、今夜殘酷に閉められた門は感謝の手で開かれて夫人を迎へるに違ひない、それ迄は決して妻たる身分を失つちや可ん、母たる地位を拋棄しちや可ん……』

沈んだ調子で云つたが急に改まる。

『はッはゝゝ斯な事を君に云つたところが門違ひぢや、眞に夫を愛し眞に子を愛する……大きな强烈な愛情のいかなる物であるといふ事を知らぬ、大野夫人には猶解るまい、音藏君、君が夫人に盡す眞情もそれでなくちやア可んぞ……イヤ彼な意氣地の無い夫人は可い加減に見限る方が當世ぢやぞ、はッはゝゝ』

『榊樣、御深切なお詞は能く解りました奥樣も嘸お喜びでございませう……』

『夫人が何だらうと僕干せずぢや、オイ君に云つて置くぞ、僕は夫人の爲に不義の寃罪を受けた、其僕に近づく事は斷じて許さん、僕は有ゆる人事と絶縁して今或事業に着手しとるのぢ

やから……僕の爲ばかりぢやないぞ、解つたかモウ遇はぬぞッ」

と云ふが否や姿は闇へ。

「榊樣ッ」

と云つた音臧と、掌を合せた綾子の耳へ微かに殘つた直也の聲ば。

『黨君を賴むぞ』

（一六）

人の心は花より早く移らうて、議會の閉ぢた今日此頃は型の極つた歸省代議士の報告演說に義理か役かの聽衆が集るばかり、政界の空氣は燻み切つて了つた、賽の目の勝負を爭るやうに、議場の多數決といふ事以外に研究も調査も平日には野暮と忘らるゝ人々に依て、さしも政變一時を凄じかつた後の春は悠々と花に明け花に暮れ、行樂の喧騷は家に巷に滿ち溢れた。

巽伯の卒ゆる同志黨では議會勝利の餘勢を以て近畿遊說を試みる事になつて、伯の股肱たる彼の佐藤男爵が二三の幹部連と共に出掛ける事になつた、これは近畿は從來敵黨たる民友黨の地盤が堅かつたのであるが今度大野廣之等の脫黨で此地方にも尠からぬ動搖があつた、此機會に

乘じて一擧に城を陷いれ樣といふ黨略に基くので、黨首たる總代理の資格を以て佐藤男爵が出馬するのである。

今日は出發といふ日、自動車を共にして停車場に趣くのは男爵を見送る巽伯で、其作戰が見ン事功を奏して議會で大勝利を獲て以來伯が男爵を信用し寵愛する程度はいよ〳〵深くなつた、二なき物に用ひらるゝ男爵が黨の大小樞機は殆んど獨りで握つて居る、大野廣之は全く陰の人である、之は廣之自身が好み望んだ地位で、人に世に忘れられて居る間に彼は或事業を成就せんと努力するのであつた。

『ナル可く早く歸つて貰ほう、中央を虛にするといふ事は頗る心細い、大野はまだ暫時帷幄の奧に藏つて置んければならぬからのう』

といふ伯爵の詞を『は』と承けて鼻眼鏡を直すと首を低うする心持で。

『心得て居ります、豫定より早く切上げて歸る心算でございますから御安心下さいます樣に、ナニ閣下の御名代といふので顏を出して置けばそれで私の任務が濟むのでございますから』

『イヤ左樣輕く蔑視つても可くまいテ、却々一般が頑固な土地ぢやからのう』

『ハイ……でございますが其頑固な點を巧く利用したい考へで居ります、それで私は有ゆる

機會を捉へて閣下を吹聽する積りでございますから此點は豫めお許諾を受けて置き度うございます』

『はゝゝ、俺の名の出る事は構わんが……主義方針といふ上にも充分倚頼させる樣にする必要も有うテ』

男爵は成算此處にありと胸も叩きたい風、

『ハイ其點も充分注意を致しませう、屹度お賞めを頂く報告を持つて歸りますから萬望御安心下さいます樣に』

と云つたが急に何か思出して。

『閣下、先日具申して置きました文士招待の事でございます、あれを此際是非急に御決行が願ひたいのでございますが』

『君の不在にかね』

『ハイ、特に私の居ない間に行つて頂きたいのでございます、私は如彼いふ連中には酷く誤解されて居ますから、私がお勸めして黨の人氣取りの爲に行つたと云はれては面白くございません、又一方には此際黨首たる閣下に綽々として餘裕のあるところを世間に示すに絶好の手段だらうと考へます、嘗て誰かゞ行つた事もある樣ですがあれでは面白くございません、如彼知名の大家ばかりでなく、實際に技倆のある連中を選拔して招待して頂きたい、其方法は意見書にも書いて置きましたが最近著作の小説文藝物の成績で資格を定めるのです、幸ひに瀨川博士が居りますから萬事御下問になつたら直に纏る樣に略手順を運んで置きました』

『左樣か、それなら行つても可い、何でも無い事ぢやが而し功能があるかの』

『間接です、間接の功能ですが此際私は斯いふ風の方面で一般的の……極めて衆俗に喜ばれる方法を執る事も最も大切だらうと信じるので』

伯は深く頷いて。

『それは左樣ぢや、そんなら急に行らう幸ひに邸の櫻が咲いて居るから觀櫻會といふ名義でも可いかね』

『エ、名義なぞは何でも來ます、筆では理屈ばかり描いて居りますが小説家なぞといふ者は至つて罪の無い……起きて居て種々の夢を見て居る暢氣な連中で、私共の眼から見れば宛然小供ですからな、閣下が親しくお出席になつて胸襟を開くといふ風をお見せになれば忽ち隨

喜して閣下を謳歌します、案外お氣晴しになるかも知れません』

『ウム、ぢや君の不在に行らう、小說なぞといふ物は小供の時八犬傳を讀んだ事がある限ぢやがはッはゝゝゝ』

『それで結構でございます、萬事は瀨川博士が心得て居りますから、唯御出席にさへなれば』

『イヤ君も我輩老人を種々の趣向で活動させるのはゝゝゝ』

『ハイ閣下の御事業の爲でございます、黨の地盤さへ固まつたら御氣樂に見て居て頂きます』

自動車は此秘密な對話を載せて新橋に着いた。

（一七）

廣い臺所一面厚玻璃の天井で覆はれて、目に見ぬ塵埃もとめぬ明い淸淨な大臺所は巽邸の自慢の一つで、嘗て何とかいふ料理雜誌の口繪に出た寫眞は人を驚かせたものであるが、瓦斯爐と玻璃天井だけが西洋臭いばかり、諸道具一切純日本式なのは伯爵夫人歌子の方の趣味から出たもので、歌子は同族中に聞ゑた、捌けた粹夫人の名と共に食味通を以つて許された奧方である。

臺所の次の女中部屋は若い女の燥いだ聲で朝の仕度の濟んだ一時を賑やいだ。お露といふ女中頭らしい年增の髮をお君といふのが弄つて居る、それを取卷いて三四人、口入屋が自慢に揃へたか醜くはない程の十八九が密々と語つては笑つた。

『そこが奉公の辛いところよ、同じ華族のお仲間で、ソラ當邸より氣樂な所は何程でもあるわ　だけど氣樂な代りに又ねえ、……此邸のは物が解り過てらつしやるのよ、それだけ難かしいけれどそこを能く會得で勤めればそれだけの事は德があらうといふものよ、兩方可い事はないわ』

とお露は若いのを訓へる口吻、一人が引取つて。

『雨方が可いのは君どんが今度の宿下りにほゝほゝゝ顏を見るばかりさ』

『あらッ覺えておゐでよ』

と睨むやら打つ眞似やら、埒もない折柄壁に設置られた呼鈴が劇しく鳴る、皆が一齊にそれを仰いだ、令孃雛子の居室からと信號の蓋が傳へる。

『誰の番、お雪さん？、早く行つて御用を聞いてお出』

お露の指圖に新參の女中が廊下へ走り出る。

『チョイト〳〵、お前さんお嬢樣の御用は能く念を押してお聞き申すのだよ……あのお方は一寸……ね、變つてらつしやるだらう、だから能く氣を注けて粗忽のない樣に爲ないと可けないからね』

間もなく歸つて來たお雪は轉げる樣にして部屋に入ると、ほゝほゝゝと堪へられぬ苦しさに袖を顏に笑ひ倒けた。

『あの……ほゝゝゝお嬢樣がお晝餐は御自分に洋食をお拵へになるんですつて』

『それが何故可笑しいだらう、奥樣は洋食は大お嫌ひだけれど、お嬢樣も御前樣も召上るぢやないかね、又例時の通り鷄卵のサラドか何かをお慰みにお拵へになるのだらうね』

『それが今日のは違うんですよ、西洋料理の精進料理ですつて、ほゝほゝゝア、可笑しい、あの、ほゝゝゝ』

と又笑ひ出す。

『これ御用が遲れるぢやないかね、御嬢樣を怒らせたら、大變ぢやありませんか』

『あの……ビックリとビイといふお料理ですつて』

皆がドッと笑つた、女中頭は吹出したいのを漸と制へて。

『お前の聞間違ぢやないかね、だから能く氣をお注けなさいといふのだよ、それで何々の品が要ると仰有つたの』

『あの紅い蕪と蜜柑の青いのを揃へてお座敷へ持つて來いつて』

『ビーッだわね蕪の事が……それ限？ビックリつて何だらうね、妾お聞き申して來るから、ぢや皆で早くお道具を揃へてね、お座敷へ運ぶ樣にして下さいよ』

お露は周章奥へ行く、後はビックリとビイが再び可笑うて堪らぬ問題になり、普通ならぬ令嬢雛子の事を散々に語り合ふ。

『それでもあの佐藤男爵のお嬢樣つてお遊び伽が出來てから餘り亂暴が始まらない樣だわねね』

『それと此頃は舞踏がお廢めになつたから有難いわ、此前に居たお種さんなんか餘り舞踏のお相手をさせられて到頭お腹の具合が惡くなつて宿へ下つたのよ、それから一時音樂が夜遲くまで洋琴やらオルガンで些とも解らないのを感心して聞いて居なければ御機嫌が惡いのだから……本統に何の御不自由もない當邸に彼なお嬢樣がねえ』

『滿れば缺くるつて云ふのよ』

『西洋料理位なら優しいけれど、又風向きが變つて何な事になるか知れたものぢやないよ』

『早く何處へ嫁つたら可いわねね』

『ほゝほゝゝ彼な難物を誰が、女旱魃ぢやあるまいし』

『だつて澤山持參金が有れば可いわ』

『ほゝほお持參金だから、所望者があらうけれどもねね』

『ほゝほゝゝゝ』

『はゝはゝゝゝ』

巽伯には三人の子がある、長男は大學卒業後外交官試補となつて目下は歐洲の某地なる我公使館に居る、次は女で同族某に嫁し二人の子の母である、殘る末の一人がいかなる罪に呪はれた肉塊ぞ、生れながらの低能兒雛子姫であつた、今年二十一の青春を理性の蓋暗く覆うて、微かながらの分別はありながら、今世に時めく父伯爵の威望を身に飾つて交際社會に輝く果報は持腐らしにする不幸の身の上であつた。

（一八）

居室に搬ばれた器具で雛子は西洋料理のお稽古に餘念も無い、雪白の上着をつけて默つて動作くところは一寸見には低能者とも見ねぬのである、美人で聞ねた夫人には似ず、肥太つた面貌から躰格まで父の伯爵に其儘の上に、極度の近眼で何處となく緩んだ醜い顏に金縁眼鏡がチラ〳〵光る。

瓦斯昆爐の熱で逆上せた赤い顏の額には玉なす汗、肉汁鍋から蒸々と立つ湯氣は美しい座敷を籠めた。

『チョッ此の紅蕪は可けないのだよ』

と雛子は手に持つて居た花の樣な紅蕪を白金巾敷いた臺の上へ抛げつけると、木鉢に盛られたのも矢庭に引くら覆す、青い蜜柑と共にコロ〳〵と珠が轉げる。

『これ雛さんお前何したのだねね』

と優しい聲、何時の間にか椅子の後ろに歌子夫人が佇つて居た。

『お母様、妾口惜しいッ』

と云ひ様上着の胸を掴んでビリ〳〵と引裂くと母に縋り付いて幼兒の如く泣き出した。

『又そんなに肝を起しては可ないわね、何を拵へるお積り？、え何かお父様に拵へて進げるの出來なければ例時の通り臺所人に手傳せたら可いわね雛さん、さ泣かないで云つて御覽』

『お母様、妾あの精進のお料理を拵へてお母様にも進げやうと思つてよ』

『西洋のお料理で精進の？、まあそんな物が出來るかねえ』

『妾學校で習つてよ、サニタリアム料理つて、肉やら卵やらは遣はないでお精進物ばかしよ、ビックルド、ビーツつて紅蕪を煮いて蜜柑の汁をかけるの、だつて此紅蕪は些とも皮が剝けないんだもの、屹度故意に皮の剝けない物を持つて來て妾を困らせるのよ、妾腹が立つわ、モウ料理なんか爲ないから可い、お父様が困つたつて拵へて進げはしないから』

『ほゝゝゝそんなに怒らないでも可いわ又お母様が皆を叱つて置きますからねさ機嫌を直して今日はモウお料理は止めて何か他の事をして遊びませう、お庭へ櫻を見に一緒に行きませう』

『お母様花がお好き？、彼な物、妾あの花皆な叩き落したいわ、腹が立つわ』

『能く雛さんは腹が立つのねね、花は美しいから誰でも好きですよ』

『花なんか美しか無いわ、見て居ると穢くなるわ、お母様、花と妾と何方が好き？』

『ほゝほそら雛さんが好きよ』

『妾と花と何方が綺麗なの』

『……それも雛さんの方が美しいわ……ぢや斯しませうね、お母様は今から化粧室に入るから雛さんもお出なさい、お母様が雛さんを花よりもズッと美しうして上げませうね』

雛子は嬉し氣に笑つてツイと起つ。

『モウ料理なんか止めちやつてよ、つまらないわ、ねえお母様』

『その御本何？』

と夫人は椅子の下に落ちた書籍に目を注ける。

『此本お母様まだ讀まないの此小説』

『何といふ小説？新小説』

『涙ッていふの、神木朱衣といふ人の描いた』

『あゝあのお演劇にする？、高田に河合で演たつてねね、悲劇でせう、お母様彼劇見られなか

つたわ』

と左も殘念相、夫人は演劇が大好きである。

『朱衣ッていふ方小説が上手ねね、悲しくつて詮術が無いわ、ねえお母様、小説作る人何な人？』

『左様だねえ、能く人情の解つた人だらうね、お母様も小説家に面識は無いけれど……、雛さん小説家が知たいの』

『妾此の神木朱衣といふ方に遇ひたくつてよ』

『ほゝほ雛さん見ぬ戀ねね』

と夫人は何時も斯な粋な事を云ふ、雛子は流石に一寸顔を赤める。

『遇へない事はありません……オゝ雛さん小説家を見る機會があるわ、お父様のお催しで豪い小説家ばかし御招待なさるのよ』

『あらッお母様眞實？、神木ッて人來るの』

『それは何だか……イエ雛さんが其人が見たければ屹度お父様はお招びなさるわ』

『ほゝほゝゝ』

と雛子の笑ふ時、女中が佐藤男爵の妹喜代子の訪問を告げに來た。

（一九）

佐藤男爵の妹喜代子は此頃繁々と巽伯爵の邸へ出入するのである、其用向は令嬢雛子のお相手をするので、普通でない雛子の難かしい機嫌をとつて萬搬にお氣に入る様に仕向ける喜代子が物の三日も姿を見せぬと夫人や傍の者を弱らせて雛子は手の付けられぬ無理を云ひ出すのである、で喜代子の來るのは皆に大歡迎される、其華かな姿が玄關に立つと雛子より前に夫人は走つて迎へるのであつた。

『あの今もねえ、お料理を拵へるつてそれが思ふ様に出來ないと云つて妾を捉まへて泣くのですものね、佐藤さんお察し下さい妾本統に嬢には命を縮めますよ』

『お察し申しますわ』

と喜代子は夫人の苦勞に同情して。

『妾の様な者でも彼如してお氣に入つて居るのでございますから毎日伺がつてお相手が致した

いのですが」

と身の退かれぬ用事の爲に心ならず無沙汰をする事、可愛相な雛子は自分の妹とも思ふて慰めたい事を、人を引つける爽やかな辯で陳立る。

『彼な者ほど不憫が懸るのが親の情ですからねね、人の力で出來るものなら何な事でも爲て遣りたいのですが生來た低能ですから醫者も藥も手のつけ樣がないのですものね、それでも人の深切は能く解ると見えて貴孃を一番に懷かしがつてお越しになるのをお待ち申して居りますよ』

夫人はそつと涙を拭く、足はぬ事もない榮華の生活に雛子許りが黑い影である。

『妾左樣思ひますわ、嬉しいと悲しいとの御分別がお有りなさるのですから雛子樣の如彼は癒らぬ事はないと思ひますわ、御自分の一番お好きな人とか、愛して被居る物……そんな專ら御注意を惹くことがある時はお精神は屹度普通狀態だらうと思ひます、妾その考へで及ばずながら御注意申して居るのでございますが……あの從來に誰ぞ大層お氣に入つた方でもあつたといふ樣な事はありますまいか』

『それは貴孃が初めですよ』

『イヱあの異性に對する愛といふ樣な』

『あの男に對してゞすか、ほゝほそんな氣の利いた事がある位ゐなら可ござんすけれど、妾孃に戀でも出來たら何なのでも叶へて遣らうと思ひますよ』

『そのお心持は解して被居る樣ですわ、小說もお好きぢやありませんか』

『小說は好きですがね』

と云つた夫人は何か可笑しい事でも思出した樣に笑たつ。

『小說と云へば可笑しいのですよ、先刻もね、あの『涙』つて小說がありませう何とかいふ人の作つたね』

『神木朱衣でせう、此節大層な評判ですわ、何でも大家の變名だらうといふ事で、近頃の名作だつて噂です、彼作でせう』

『妾はまだ讀みませんけれど、あの小說に大層感じたと見ゐましてね、あれを作つた人に遇ひたいといふのですよ、それがね、今度文士招待を當邸で致す事になつて其事を話して聞せますと、其時あの『涙』の小說を作つた人も來るかつて聞くのですよ』

『左樣ですか』

と喜代子は頷て暫時何か考へて居たが。

『そんな事があれば大變好い機會ですわ是非遇はせたいものですわねえ、何な人か知らないのですけれど、あれ程の作者なら屹度同情の深い優しい方に違ひありませんから、事情を妾からでも能く打明けて賴んで置いたら其方の爲に雛子樣のお精神が又どれだけ慰むかも知れません、そんな機會を利用して專ら一つ點に御注意を引付けたいといふのが妾の考へでございますの』

『萬望其事に付ても貴孃のお骨折を願ひます、妾からは其神木つていふ人が當日の招待に漏れない樣にお賴みする積ですからね』

『妾屹度お引受けいたします』

此對話が濟むと間もなく喜代子は雛子と打連れて花美しい庭園を逍遙するのであつた。

（二〇）

『ねえ喜代子さん』

と一歩前に進んだ雛子は櫻花の下で振顧いた、喜代子は何かの思案に精神を傾けて居たらしく急に自分を呼ばれて『は』と調子外れた返詞、直と沈着いた優しい聲になつて。

『何有、貴孃』

『此花と妾と何方が奇麗？』

眩しげに空を見上げては自分の姿を眺める雛子の傍へピタツリと寄添ふと。

『ほゝほそれは貴孃がお奇麗に極つてよ花なんか貴孃のお傍へも寄れないわ』

『お母樣も左樣仰有つてよ、ほゝほゝ妾嬉しいねえ、花より奇麗だつたら屹度あの方も妾が好きだから』

『あの方ッて何誰？』

『……喜代子さん笑ふわ』

『あらあんな事を、妾貴孃を笑つた事なんか有りはしませんよ、早く仰有いよ貴孃妾に物を隱したら厭ですよ……妾貴孃のお身の事ばかり思つて居るのに貴孃はそんなに水臭いお考へね』

と何時も努めて愛嬌を浮べる眼瞼に素の儘の險しい色を見せて一寸睨む、睨まれた雛子は猛獸使ひの眼に射られた獸類の如く畏怖の情を顏に現はして。

『妾隠しはしないから勘忍して下さいよあの妾涙ッて小説を描いた神木朱衣といふお方、あの方が妾好きなんだから……あの方も屹度妾好きだらうと思ふのよ、だつてチャンと書いてあるんだもの、喜代子さんまだ此本見ないの』

と懐中からサッと取出す。

『まあ貴嬢持つてらつしやるの』

と喜代子は先刻の夫人の話と思ひ合せて呆れて顔を眺める。

『此小説に書いてあるわ、花より美しの物あらば我戀はそこに……ッて喜代子さん解つて？』

『まあそんな事が書いて……、それぢやその神木ッて人は屹度貴嬢にあの戀を捧げて居るのですよ、まあねね』

此上表情の出來まいと思はれるほど左も感に堪へた態度を見せて、人を憚らぬ築山の四阿で喜代子は蜜の垂る様な甘い戀の話に雛子を捉まへた。

『小説家は天才の人といふのですからね筆ばかりぢやなくつて眼も能く見ゐるのですよ、それで貴嬢を何時かチャンと見て獨りで戀に擒はれて居るのですわ、まあ何といふ優しい心でせうねね』

意味の判らぬ事を云つたのが我ながら可笑しく、吹出したいのを堪へて俯向くと。

『妾早く神木さんに遇ひたいわ、小説家ッテ何な人？、ねね喜代子さん』

『それは優しい人ですわ、一人で男やら女やらの情味を知つてるのですものねね、恰度俳優と同じ事ですわ』

『俳優見たいに好い男？』

『俳優の様に白粉やら紅やら塗けないから本統に男らしいですよ……妾小説家大好きだわ』

『妾も好きよ、妾『涙』のやうな小説描く人好きだわ、神木さん好きよ、神木さん屹度妾も好きだから……妾花より奇麗なんだものねね』

『貴嬢戀を貫く勇氣が無くちや可けませんよ』

と喜代子は凝と相手の顔を見る。

『妾戀を貫くわ、『涙』にもあるわ、雪江といふ婦人は外國まで戀人を逐ふて行て結婚してよ』

『誰でも戀といふものには苦勞するのですわ、けど貴嬢はそんな苦勞なんか爲さらないでも可いのよ、お父様は伯爵で居らつしやるし、人の羨む御財産はお有りなさるし、何な戀でも叶ひますわ』

『戀にもお金要つて？』

『お金の要らぬ物は今の時節にありませんわ、その代りお金で出來ない事は何だつて有りませんよ』

『お金さへあれば神木さんの所へでも嫁かれて？』

『嫁かれますとも、誰だつて好きな人の所へ嫁かれますわ』

『妾お金だつたら何程でもお母様から貰へてよ、お母様から貰つたのでも澤山有るわ』

喜代子は自ら打笑るゝ面を他方に向て。

『妾お母様から何も彼もお頼みを受けて居ますからね、安心して妾にお任せなさいませよ、今度お父様が小説家を御招待なさる時には妾貴嬢にお付添申して屹度お好な神木さんに……ほゝほゝ、ね、ですから何でも妾の云ふ通りになさるのですよ、妾の云ふ事に背いちや神木さんに遇はしはしませんよ、可ござんすかね』

雛子は嬉しさうに頷くのであつた。

（二）

『宍戸君違ひはせんかね、漸次心細くなるぢやないか』

『イヤ確か駒込の奥と聞いたです、神明神社からまだ大分歩くといふのですから』

『はゝゝゝモウ其大分を通り越した樣だ可いかね、電車を下りてから小半時間歩いてるよ、彼所で家は仕舞らしいぜ』

『あの畑の上に藁葺屋根が見えます、彼家かも知れぬ』

と洋裝の若い方が背伸びをする。

『あの森の前の小屋見たいな？、は、、、、、眞逆幾ら榊君が變物でも彼家には住むまいよ』

『イヱ彼の男の事ですから判りません、駄目にして彼所迄行つて見ませう』

『行くかね、何しても捉へなけアならぬのだからねえ』

と塵避を着た紳士風の風采の好い男。

『併し一寸乙な景色だねえ、君は此邊に出掛けたことは無いかね』

『繪を描きに來た事はないですが學校に居る時一度遊びに來ました、あの森の中に良い水があつた樣に思ふです』

『雜木らしいね、秋が佳いだらう』

『恰度秋で風祭とかいふお祭の最中でした、あゝ見えてあれで一つの部落を爲して居るのですよ』

『左樣かねゑ、ウン大分家が見えて來る、土藏もあるね、ナル程村ぢや、或は彼村に居るかも知れない、『涙』の序のあの女主人公雪江の詫住居ねゑ、そら雜木林を透す日影ばかりぞ彼の女に唯一つの暖き光り……といふ、あの叙景と何となく彷彿した景色ぢやないか、君は左樣思はないかね』

『左樣ですかねえ』

『君の描いた口繪の注文にはそんな事はなかつたかね』

『何も無つたです、先刻もお話した通り出版元の番頭が出て來て作者の注文だから是非僕に描いて呉れといふのです小說の序の所を讀んで其印象を繪にして呉れたら可いといふ口頭の注文です妙な作者だと思つて番頭の秘すのを强ひて白狀させて始めて神木朱衣といふのが榊の

變名だといふ事を知つた位ですからなあ』

『君の繪には先生餘程憧憬して居ると見えるね』

『左樣でも無いでせうが……僕は神田の下宿を默りで引上げた限何處へ姿を隱した榊の居所が知れると思つて大喜びで尋ねると、何處に居られるかそればかりは眞實知らぬといふのですそんな馬鹿な事は無いと思つて僕は態々出版元迄出掛けて主人を詰問して榊の住所を告げなければ小說の繪は描ぬと脅して遣つたのですが、實際知らんのですな、唯飄然と原稿を懷中にして遣つて來て極めて少額の稿料と引換へに去つて了つたといふのです、其時モシ出版するなら宍戸の繪にして呉れ、それが出來なければ繪なしにして呉れと云つて僕の宅を敎へて置いたのですな、斯なに當らうとは思はなかつたから反古同樣に買つたのでせう、此が普通の人間なら無論其後出版元へ出掛けて金錢にするのですが彼の男だから更に寄付んと見ねて、今度來たらスグ僕に知らせる樣にッて賴んであるのですが遂に消息が無いです』

『此好評は知つて居るのだらうがそれを知つて出版元に出掛けぬ所が榊君の豪い所だねゑ』

と紳士は深く感じた體。

『ねゑ宍戸君、文士の墮落々々で情ない事ばかり聞されるお互ひが榊の樣な男を知己に有つの

は頗る意を強うするぢやないか、恰度東京の塵埃の底から脱けて斯な清々した田舎の空氣を吸ふ氣分になれる、早く遇つて見たいねえ、何して居るか』

『両人で隱家へ現はれたら驚くでせう、併し貴方の御用は喜びもします まいな彼の氣風だから』

『ウンそれは俺も覺悟の上ぢや、大分議論を鬪はせなけりやなるまい、君も是非應援して吳れたまへ』

田舍道を話しながら歩む両人から二三間を隔つた前の田甫を横に入つた麥畑に一人の農夫が佇つ、長閑な空を仰いで一息いれる後姿は、古手拭の頰冠り、鍬を斯う杖の姿態が面白い、宍戸はポケットから寫生帖を取出して筆を走らせる。

『君そんな暢氣な事をしないであの農夫に尋ねて見て吳れたまへよ』

『あんな圖は却々町では得られませんからなはッは、、、』

宍戸は大跨に急いで。

『オイ〳〵一寸物が聞きたいのだがね』

農夫は振向いた。

『あの此邊に……ヤツ君ア』

宍戸の驚く聲に紳士も足早に近づいた。

（二二）

宍戸が驚くも道理、古手拭に包まれた農夫の顏は尋ぬる榊直也である。

『榊ぢや無いか』

『榊君かね』

両人は餘りの意外に呆れて佇立る、直也は手拭取つてその髯面を明るい日光に曝すと。

『宍戸かはッは、、、發見されたね』

と云つて此方へ出て來る。

『これは驚いた、變裝の妙を極めて居る、榊君松岡です、何も永い間遇はなかつたのに其異裝だから些とも判らなかつた』

『オ、松岡先生ですか、失禮です、僕は今斯な生活を遣つとるのですから』

松岡は省三と云つて古い文學士で、嘗て直也が某私立大學に居た時の講師であつた。

『オイ榊、君ア何故僕に秘して斯な事を爲るか、默りで姿を隱すのは酷いぢや無いか、僕は何れだけ探したと思ふ、眞逆斯な所で農夫になつて居やうとは見當が付まいぢやないか』

同胞の樣にした親しい友の怨言に直也は弱つた顏。

『許して呉れたまへ、僕は急に都會が厭になつたからな、ナニ何れ知らせる心算だつたがね』

『知れたこと云へ絶交した覺ねは無いぞはッは、、、イヤ怨言は後の事にしやう、今日はね松岡先生が僕の宅へ來られて君に是非急に面會したい事があるから一緒に探して呉れと云はれるので朝から今迄方々歩き廻はつたせ』

『何して知れたい』

『何してたつて亂暴ぢやないか、厭になつた都會と共に友人を捨てはすまいが、尾行した奴が神明神社の森で見失つたといふから君は狐にでもなつたかと思つて心配したさ、農夫に化けた手際は狐以上かも知れんぞ』

『尾行されたか、それが發見の端緒になつたなはッは、、、』

『是非俺が探して貰ふ樣に賴んだので、急にお目にかゝりたい事が出來たのでね、迷惑でせう

が暫時話を聞いて貰ひたいですが』

『は、甚だ穢い所ですが』

何處だい何處の家に居る?』

『ウン案内しやう、君一人だつたら逃けるのぢやが先生に來られては』

『逃げる?、オイ〳〵そんな事を云ふな、君が居なくなつて僕は實に寂しい思ひをして居る、モウ逃しやせんぞ』

直也は鍬引擔げて前に立つ、後に續く兩人は笑み交した。

曲折つた田甫を雲雀の聲に送り迎へられて行く途上も、宍戸は友の肩なる光る鍬の刄と、日に燒けて黑い其首筋やら、補綴だらけの筒袖股引やらを眺めて、鎭まらぬ驚嘆を漏して止まぬのである。

『オイ榊何故そんな事をする、農夫の眞似を爲んかて可いぢやないか』

直也は肩を動りながら應へた。

『眞似ぢやない、僕は眞劍ぢや、此鍬の刄で彼所に花の咲いとる豆も作つたのぢや、大根も大きくなつとる、土は人間の樣に欺けん、眞似ぢやあ花も實も出來て呉れんからなはッは、、

、」

「眞劍だつて……本統に勞働してるのか」

「誰やらが云つたな、頭腦ばつり使ふと惡魔になる手足ばかり使ふと獸畜になる？、あれだ、僕は其仲間を行つて半農半文の生活ぢや」

「何か大きな動機に接したのですな、急に田園生活を慕ふといふのは、誰でも理想とする所ぢやが實際其鍬を擔ぐといふ事が却々困難です、能く行るですねえ、身體に徹へはしませんか」

と松岡學士が問ふた。

「イヤ愉快です、動機と云つては唯都會が厭になつたといふのみですが……鍬を振上げて肥えた土塊を打碎く時は、自分の力が直に地の心に傳はる氣がするです、種子を蒔けば花が咲いて實を結ぶのがいかにも自然で素直で適切であつて、人間を相手の仕事の樣に……誤解だの矛盾だの、侮辱だとか中傷だとか醜い爭ひが無いだけ遙に意味がある樣に思はれてならぬのです、僕の樣な情に煩はさるゝ者はイツソ斯な境地に身を置いて人間を研究した方が善くは無いかと思ふものですから」

低い軒の茅屋の前へ出た。

「此家だ、一寸此處で待つて呉れたまへ」

「榊、そんな事を云つて逃げるんぢやないか」

と宍戸が笑つた、直也も流石に孤獨の今を友懷しいかニタ〳〵と笑ひつゝ、撥釣瓶の井戸側で泥の足を洗ふ。

(二三)

「土間を通つて裏へ廻つて呉れたまへ」

と云はれて蘆廬の散らばつた、低い竈のある暗い土間を通り抜けて背戸へ出る、寂閑として人の氣勢は無い、矮雞が不意の人の姿を相警めるやうに鳴いた、裏は老樹の森に近く其處から引いたのだらう木を刳つた水槽に寛の水がチヨロ〳〵落ちる、湛つた清水は日光を反射して暗い座敷の澁紙色の障子に圓を書いたり消したりする、狹い椽は雞で泥だらけだ。

「オイ榊、一體何處のお座敷へ通す積だい」

と宍戸はクス〳〵笑ひながら珍しい四邊の樣子を見廻はす、秣の蒸せた香がプンと鼻を撲つ。

『君そんな事を云つちや可ん、誰か居るのだらう』

松岡學士は制する樣にしたが同じく變な顏で佇つ、モウーと牛が鳴いた。

『ヤ牛が居る、牛が接待に出て來るんぢやないか、奇扳々々、オイ障子を明けても可いかい』

と障子を引明けた宍戸は一室の光景に又眼を睜つた、袁染色の破れ疊の敷いた六疊の中央へ穴の明いた古毛布を展げて其上には一脚の机？、机といふよりも臺といつた方が早解りがする、荒削りの松板一枚を柳行李と角火鉢の上に渡した速製の机の上には原稿紙に墨汁壺とペン軸が載せてある、唯それ限りである。

『此處に立籠つて居るのだな、驚いた事をする男だ』

『何に驚くのぢや』

と直也が筒袖を着換て現はれた。

『まあ此處へ上れ、松岡先生これが僕の城廓です、有望お上り下さい』

『城廓？、斯な穢い城が何處にあるものか』

宍戸は靴を脫ぎ〳〵面白半分に罵しる、良輔と云つて直也とは心の友と相許した仲である、行

衛知れなかつた友を尋ね得た歡喜に、生來の快濶を掛構へなく發揮する。

二人は奇扳な机を中に對座つた、松岡學士は嚴そかな態度で。

『柳君此處であの「涙」が出來たのですか』

『「涙」？、僕がですか』

と直也は變な顏をする、宍戸が。

『オイ隱すなよモウ知れてるのぢや、神木朱衣先生の正體此處に有りさ、僕が先生に告げたよ書肆を調べ上げて白狀さして遣つたのだ』

『我輩達にまで匿す事は要らんぢやありませんか、實に俺はあの作者が君の變名だといふ事を宍戸君から聞いた時は雀躍つて喜んだのですが、此處へ來て親しく君の事情を見、此部屋の光景を睹るに及んで一層彼作に對する尊敬の念を增したのですよ』

直也は頭を搔いた。

『は、、、あれを知られたのは今日の發見よりも苦痛です、オイ宍戸、貴樣は俺の詮議立ばかりするなよ』

『そんなら何故默つて隱れるかッ』

『フ、、、、』

『はッは、、、』

割つて碎いた男同士の哄笑が穢い座敷に美しう響く。

『實に名譽の傑作です、あの小説に就て實は宍戸君に無理を願つて君を探したのですがね、榊君俺は今日、學校からの使命を帶びてるのですよ、君先づ之から見て下さい』

松岡學士は懷中から恭しく假綴の認め物を取出した、直也は怪訝な顏をして之を受取る、それは學校文科の講師達の名を連ねた直也の推薦狀とも見るべきものであつた、彼が神木朱衣の變名で作した小説「涙」が近時文壇の代表的傑作である理由を細かに批判した長短十種の論文と、彼が尊重すべき人格である事を證明的に記述したものである、直也は不思議な物でも見るやうな顏で首を傾けて繰展げる。

『オイ「涙」は何も大した評判だぞ、能く書いて呉れた、それで俺に默つて隱れたのを不問に付して遣るはッは、、』

宍戸は獨りで愉快氣に笑つて覗き込む。

『先生皆樣の御同情は實に感謝します、併し之は……斯な物は何の爲に要るのですか』

『それは之からの主題です、今度我々が日頃口に筆にした文士優遇の理想に對して其一端を現實にする事を得る機會が來たのですよ』

と松岡學士は膝を乘出した。

（二四）

松岡學士は熱心な口調で語る。

『このお話をするに先つて君に含んで置いて頂きたいのは今君に交渉する件は君が出られた學校からの希望……希望といふよりは寧ろ委托とも云ふべきですから、君の性質としては直に快諾せられない事かも知れんが何うか能くお考へを願ひたいので』

と冒頭して。

『今度ね、我々の理想に近い文士招待會が催されるのです、理想に近いといふのは』

嘗て某貴顯に依て催された同種の招待會は徒らに大家の名に拘泥して實際の技倆ある新進作家を漏らし其結果として文界に何の功果も刺戟も與へぬ骨董的會合に終つた代りにお大名のお遊

伽といふ侮辱の世評を蒙つた、今度のは其失敗に鑑みて、公表された最近の作品に就て最も嚴正な批判を下し眞技倆のある代表的文士を撰抜して敬意の招待がしたいといふので、作品の批判はそれ〴〵斯界の權威を以て許された大家に囑托されたのであるから、此招待に列する名譽は無上のものであるが、此擧に依て一般社會をして眞摯なる作家の存在と文藝の有する尊嚴を知悉しむる効果は決して尠くはなからうと信ぜらるゝのである。

と先づ文士招待會の趣意と方法を説明して。

『俺の學校の瀬川博士も調査を委托された一人で、博士は君の「涙」を以て最近文壇の第一傑作と認められたのです、無論君の作とは知られんのですな、で僕も其事に干係して居るから、神木朱衣といふ人に遇ひたいと思つて探して居ると圖らずも宍戸君から君の變名だと聞いて實に涙が零れる程嬉しかつたです、早速瀬川さんに報告すると博士も非常に喜ばれて、母校の名譽だから是非君を探し出して當日の招待に出席させる樣にして呉と云はれるのです、之が俺の使命ですよ』

と松岡學士は得意の沙翁物を説く講壇の辯を振つた、沈默を餘儀なくされてムズ〳〵して居た宍戸は詞を引取つて。

『オイ榊、此推薦が何の必要だといふ君だからオイソレと出席を承諾せぬ事は判り切つてるが、絶望だと判り切つた事に先生と僕が出掛けて來て居るのだぞ、能く考へて、イヤ考へたら理窟が出るだらう、何も考へないで一思ひに快諾して呉れ、可いか、厭といふ事はならん、厭は許さんぞ』

『は、、、君のは宛然喧嘩の樣だな、ねゝ榊君、これは是非承諾して下さい君の氣象でも詰らんと思はれるだらうが母校の名譽といふ事に就て考へて欲しいですよ』

『誰が招待するのですか』

と直也は顔を上げた。

『イヤこれは甚だ顛倒して居た、招待はあの巽伯爵が主人です、伯爵の邸内の櫻が咲いたから一夕花見を兼て招待したいといふのです』

巽伯と聞いて直也は不快な顔をした。

『巽元卿が文士を招待する？、訝しい事を遣るですなア、眞面目ぢやないでせう、盛に黄白を蒔いて代議士を誘惑したといふぢやありませんか』

『そんな攻撃もある樣ですな、併し彼地位らになると種々な非難の的になるのは免れない、瀬

川博士の樣な人が親しくするのですから敵黨に云ふが如き人格ぢやないでせう』

『惡い點も善い點もある所謂二重人格だらうよ、而しそんな事は何でも可い、敢て問ふ所にあらずだ、敬意を表して招待すると云へば行つて遣るさ、ね、柳行くだらう』

『僕は行ん』

と膠もなく云放つた直也の顏を兩人は『サア始まつた』といふ同じ思ひで凝視た。

『松岡先生、巽伯は何でも可いですが、あの小說はあれはバン代です、飯を食ふ爲に止むを得ず描いた作です、僕は彼作では僕自らの良心を……藝術的良心に責められて居るのです、唯突然收入を失つて當惑したものですから……腹さへ減らなけァ描くのぢや無つたです、それで名を署する勇氣が無つたです、僕をして嘗て知らぬ卑屈の經驗を嘗めさせたのはあの「涙」です、ですから今ぢや彼作は僕の憎惡の的です、それが過つて好評だらうが推薦されやうがそれは僕の苦痛を增ばかりです、一身の事情で止むを得ず筆を執る……僕は實際當時の自分を顧みて慚愧に堪へません』

飯を食ふ爲に止むを得ず描いたと他人事の樣に曝け出して云つた直也は、突然に大野家の家庭教師を廢めて收入を失ひ物質的に困厄を極めた當時の事を想ふて、親しい友にも師にも打明け

られぬ感慨に憮然とした。

（二五）

何事か深い感慨に捉られた風の直也を宍戸は凝と横から見据ゑて。

『急に收入を失つたと云つて、一体あの大野の家庭教師は何したい、あれは廢めたのか、僕は彼家で聞いたら居所が知れるだらうと思つて一度訪ねたら住む人が變つて居るのだ、モウ彼の方は廢めたのか』

大野といふ詞は直也には何とも知れず悲しい切ない底に暖い懷し味の籠るものに響く、けれどもそれを聞くのは自分に許されぬ事の樣な心地もする、聞きたい聞きたくない大野家の消息と一切耳を絕ちたい爲に我は獨りで東京を遁れたのでは無いか。

『ウム彼方は廢めた何時までも教師といふ柄でも無いからなァ』

『而し精神を打込んで完全な人間を作り上げて見ると云つてた小供は何したんだ、僅た一つの慰籍だつて愛して居た彼の跛の少年は何したい、下宿へも能く連れて來てたぢや無いか』

『彼の兒か……』

直也の聲は語尾が微かに消ゐる、それを紛らす樣に急に大きく笑つて。

『何したか今は一切干係なしぢやから知らん、それは何でも可い、先生、今云つた樣な譯ですから學校や先生達が僕を思つて下さる御厚情は忘れはしません、あの小說で推薦を頂いたり招待に應ずる事は僕厭です、堪へられんのです、何か先生から……』

『可ん、可ん、そんな事は可ん』

と學士が何か云はうとするのに被せて宍戸が喚くやうに出る。

『オイそんな事を云ふなよ、パンの料に描いたら猶尊いぢやないか、生活の努力が一番眞面目ぢや、先生然うでせう、世の中には女色の爲に描く奴が居る、金の爲に描く奴が居る、僕の知つてるのに大勢の妾を畜ふ必要に餘義なくされて一日に五六種の駄小說を描き拋る先生が居る、それでも老大家の名を世間も怪しまんけれァ御自分も平然たるものさ、實價を世間が認めて賞讃するのに强いて韜晦する必要が何處にあるそんな事を云はんと出席して呉れ、なァ榊、僕ァ此機會を君に捉まへさせたいのだ、君と僕とを文學の畑へ引張り込んだ山本は死んで了う、僕は中途で畵工になる、君だけでも功名をして呉れんと寂しいぢやないか、地步

を占めて置くといふ事は作家でも緊要の事だ招待會は愚だらうさ、巽伯は尊くは無いよ、唯此機會を利用して文壇に一地步を占めるといふ事は此方の智略だ、可いか、眼中巽なく招待會なしさ、唯默つて臨んで呉れたらそれで可いのだねえ先生然でせう』

友を名譽の光輝く贐れの會合に加へたい其技倆をいよ〳〵世に認めさせたいと思ふ友愛から宍戸は熱辯を慕しかける。

『俺は君が母校の推薦を受けたといふ事を考へて呉れて欲しいのです、學校經營者たる人々から云はせると君の如きを出したといふ事を大いに誇りとしたい事情もあるでせう、それは兎も角ですね、瀨川博士も俺も君を推薦する以上は責任といふものがある、君の迷惑になる樣な事は斷じて無いと信じるから』

両人は種々にして說伏せるべく舌の疲れる程詞を重ねたのであるが直也は頑として承諾しなかつた。

『今御厚意に反くお詫は屹度する、それは此作が脫稿た時です』

と机の上に置いた部厚の原稿紙の假綴を見せた、表紙に「愛」と記されておつた。

『今は此家で勞働の手傳ひをするから糊口の方の配慮は無い、一切の煩累を避けて執筆する此

作には堂々と署名して出す積です、之は僕が今の全力を注いだ物ですなら此作の批判なら毀譽共に進んで當る覺悟です、僕が書齋の秘密を開放するのは先生と宍戸君の誠意に酬ゆる保證です、それ迄萬望許して下さい、ねえ君何か待つて呉れたまへ』

『困るねね、其作はそれです、其作を出すにしてがいよ〳〵宍戸君の說の樣に地步を占めて置くといふ事は賢い手段だらうと思ふのですがねえ』

と學士、宍戸はモウ根較といふ態度で。

『榊ッ、君が何と云つても僕は出席させにや置んから左樣思へ、今日から毎日推かけて來ぞ』

『はッは、、そんな事をすると又逃げるぞ』

『逃げるなら居催促だ』

『嘘ぢや、此處は逃げはせん、豆やら大根やらが逃さぬからはッは、、、』

長閑に牛が鳴き矮雞が歌ふ。

（二六）

空しく榊の寓居を引上げた松岡學士と宍戸の兩人は往路に直也の農夫妻に驚かされた田圃道を語りながら歩む。

『君何處かで飯を喫はうぢやないか、落膽したので急に腹が減て來たやうだ』

『喫りませう、併し左樣落膽なさらいでも可いです、僕が引受けて屹度承諾させるですから、モウ居所が判つたのですから』

『イヤ却々難攻不落ぢや、而しいよ〳〵榊君の人格には敬服させるね、如彼でこそ眞の文藝の士たるに恥ぢぬ、名利に色を動かさぬといふ事は修養を積んと出來る事では無いからねえ』

『嬉しい男です、鍬と筆とを使ひ分けるなぞア彼の男でなくちや出來ないでせう、「愛」といふのを書きかけて居ましたね』

『餘程精力を傾けて居る樣子だから又文壇を驚かすだらう、早く見たいが……それよりも今度の事を先生承諾して呉れないのは實に遺憾だ、君は此上何して說く心算だね』

『それァ僕に方略があるですよ』

『有るかね、ぢや飯を喫りながら君の方略を聞かうぢやないか、何しろ招待は今度の日曜といふのだからねえ』

神明の森に近い街道へ出る。

『此邊に何でも風の變つた飯屋が有るといふ事を聞いたがね、君は知らないかね、紳士も車夫も行くそうだ、神社の近所といふ事を聞いてるが』

『左樣ですか、それは面白い、あの辻に居る車夫に聞いて見ませう』

宍戸が客待の車夫の前に佇つと。

『へッ何處へ』

と車夫は蹴込から離れた、松岡學士は。

『車にも乘ん事は無いがね、此邊に何とかいふ飯屋があるだらう一風變つた』

『へイ上下屋で、彼所の交番の所を曲つたら直繩納簾が見えまさ』

『左樣か、ぢや歸り迄客がなければ乘つて遣る』

『旦那方はお支度でごぜいますか、それぢやァ御案内いたしやせう、俺も一ぺい飲酒まさ』

『ウムお前達も其處へ行くんだね』

『へイ豪い方でも人足でも行くからそれで上下屋でさあ』

『面白い今日の發見物ですな榊と共に』

と宍戸が興がつた、車夫は榊の一言に酷く驚かされたもの、如く『エッ』と云つて其顏を見る。

『其家へ行う〳〵』

車夫に案内されて兩人は飯屋へ入つた、酒めし、鰌汁と書いた障子に繩納簾の出入口、中は可なり廣い土間に共同食卓の板が渡され、六疊程の座敷もある。

『旦那方は座敷へお上んなせい、此處は俺らの世界で』

と車夫は腰を掛けると『オイ烏賊鍋で一本つけて呉んな』

兩人は座敷に上つて小さな衝立の彼方で飯を始めた、車夫の向ひ側には同じ稼業の年の若いのが煮豆腐でコップ酒を煽つて居る。

『源公遣つてるな、馬鹿に景氣が好いぢやァねねか』

『オウ音さんか、何有カラッキシ駄目だァ、眞の自棄酒さ、お前は?』

『朝から無客よ』

『ウフッぢや自棄の仲間入りだね、斯な時はグッと景氣を付けるんさ、此の大きいので飲んね

えな大きいので』

とコップを高く上げた手付は酔つて居る音と呼ばれたのは頭を掉つて。

『俺モウそんな豪氣な事は出來ねい、ホンの草疲休めさ齡は取りたくねいせ』

『フ、、、お前なんざお抱ねで永年貯め込んだ財貨があつてよ、道樂に車を曳くんだから草疲れる程稼がねねだつて可さそうなもんだが、貯る程左樣は可かねいと見えるね』

『は、、、左樣見ねるだけが有難いとでも思つてるかね』

と云つた老車夫の笑顔は寂しかつた、チヨビリ〳〵と杯を傾けながら彼は案内した客の座敷の對話に耳を傾ける。

『フムそれで肉薄しやうと云ふのだね、大丈夫だらうか』

『成功を信じるです、極めて多恨多涙の性質ですからなア、僕といふ兄弟も同樣にしてる友人の爲に曲げて出席して呉れといふ風に遣りませう、出席を保證した僕の立場がなくなるからと理屈は廢めて情の方面から攻めて遣つたら案外脆く承諾するだらうと思ふですよ』

『ちやアそれでモ一度出掛けて呉れたまへモウ日數が無いからね』

『一度は愚か毎日僕は襲ふて遣る心算です』

『併し先生弱るだらうな、折角如彼して靜かに書いてる所へ』

『構はんです、僕は善良の友たる責任を盡すのですから、今彼の男を吹聽せんのは彼に取つて實に愚ですからなア』

『俺もそれを思ふのだよ……併し先生何して急に家庭教師を廢めたかね、何だか妙に理由を曖昧にして居たちやないか』

『彼事は僕にも解せないです、薫とか云つて足の惡い賢い子を自分の弟の樣に可愛がつて居ましたがね、自分は親同胞の愛といふものを知らんから其子供に依て人間の情味を研究するんだなんて能く一流の氣焔を吐いて居た位ですが』

『それを廢めるとスグ彼處へ隱れつちやただね』

手に取る樣に聞へる話聲に老車夫は我を忘れたもの、如く、盃持つた儘腰掛を離れてツカ〳〵と座敷の方へ近寄つた。

（二七）

衝立の彼方に松岡學士と宍戸の對話は勢む、一句も聞漏らすまじと老車夫は上り口にそつと腰

を下す。

『何か大きな動機があるに違ひない、君にも默つて彼な所へ隱れるといふのは……先生戀で無いかね』

と學士の聲。

『彼男は女性に干しては苦しい經驗を有つて居るらしいです、何でも早く兩親に別れて繼母の手で育てられたのですな、そして許嫁が何か有つたのが、其妻たる婦人が繼母と共に榊を捨たとかいふ悲慘な經歷を背て朧げに語つた事があるです、ですから女性に對しては強い反抗を有つて居た樣ですから』

『ぢや先生には餘程悲慘な經歷があるのだね、それが彼の詩を生むのだ、眞實を語つて居るのだらう』

『或は然うかも知れません、何の繫累も無いと云いて威張る裏面に孤獨の悲哀を充分に解した心持が見へるのが榊の特色です、あの快濶の談話振を聞いてると唯愉快といふよりも涙が催される樣な愉快を感じさせるです』

『フム……情の人だねえ榊君は』

と松岡學士が云つた時老車夫は怖々と聲をかけた。

『モシ旦那一寸恐れ入りますが、只今お話中の榊樣ッてお方は萬一やあの榊直也と仰有る方では……』

兩人は顏を見合せた。

『ウム直也といふのぢや、貴方榊直也を知つてるかね』

『ヘィ……あの以前小石川の大野樣で……チョイ〳〵お目にかゝつた事がございます』

『大野で？、然うだ、その榊だ』

『あの只今は何處にお住ひでございますか』

『今か……、今は或所に隱れて居るがね先生』

と宍戸は學士を顧て。

『他人に知らさん樣にして呉れと云つた樣でしたな』

『左樣だ、一切人事と絶ちたいのだねえ』

『ナアニ俺は強いて伺はなくても可うがすが……以前あの方に賴まれた事がございますから……』

『頼まれた事がある？、何だ何んな事だ』

『へイ……それはあの……家の事でございますがね、好い借家が發見かつたもんですから』

『然か、そんな事なら云ふてやるが可い家に困つたのだらう、此處から直だ、彼處は何とか云つたな、其處の街道を眞直に畑へ出て十丁ばかり行くと左側の高見に森があつて村があるだらう、彼村の最端の百姓家だ榊の居るのは』

『へェそんな所に？』

『はゝゝゝ其方行つたらまた驚くぞ、鍬を擔いで農夫してるから』

『榊様が……左様でございますか、何も有難うございます』

と車夫は顏を引込めた。

『それぢやア俺は急ぐから彼の車で行かう、君は電車にして呉れたまへ』

『は、左様しませう、明日は朝早くから出掛けて座り込んで遣ります、其結果は學校の方へ報告します』

『是非努めて呉れたまへ』

兩人は座敷を出る。

『オイ車夫、車夫』

『何處へ行つたのだ』

待つ筈の老車夫の姿が見ねぬ『あの車夫なら今周章た樣にして酒代を置いて表へ飛出しましたよ』といふ女中の詞に。

『訝しな奴だア、今榊の事を聞いて居たぢやないか』

『妙な車夫ですなア』

と外へ出ると、車ばかり其處の軒下に、曳く人は影も形も遂に其界隈に見ねぬのであつた。

（二八）

『モシ先生樣、御飯でございます、モシ先生樣』

と呼ぶ聲に直也は假睡の夢から覺めた。

『ヤ寢て了つたな、晩飯かね、これア驚いた』

障子の外のは主人である。

『疲れが出たのだせ先生、餘り勞働が過ぎるもんぢやけに、五反田の畔全部鍬ア入れてあるに俺吃驚したゞよ』

『ナアニ彼位の事が』

と直也は大欠伸をしながら椽に出る、年老つた農夫の主人は喜作と云つて夫婦暮し、息子は兵役の不在である、直也は初め此家の一室を借りて住む積で來たのであるが、働き者の息子を取られた老夫婦が田畑仕事に難義の狀態を見て、小説に筆執つて疲れる間閑には草取りの手傳ひ麥蒔く加勢を面白半分にしたのであるがそれが何時か一廉の役に立つ樣になり、木訥な田舍氣質の喜作夫婦は如來樣のお授け物と直也を歡んだ、月の飯代座敷料を取らぬ上に小遣錢に迄氣を注けて先生樣々々と我子の如く眞情を盡す、此眞情は直也をして勞働の疲勞を感ぜしめぬ上に、健康を保つ方法として筆と共に鍬持つ趣味を此上なく樂ましめたのである

『これで當分小閑ちやけに先生樣學問の方精出して呉れさつせや、來月になると苗床で又意外に忙がしくなるだ』

『はれ良人は、先生樣チヤンと書入れにしてるだもの、先生樣モウ農夫厭にならつしたらうに ほゝほゝゝ』

『イヤ滅多に厭にはならん、斯な面白い事は却々止められんよ、詩を作るより田をつくれといふ事があるが或は眞理かも知れんはッはゝゝゝ、お蔭で僕ア斯なに身體が强壯になつた』

『身體の藥は土弄りに限るだがね、先生そんげいに眞黑にならつしやつたら東京の娘ッ子が泣くでねいかの』

『はッはゝゝゝ』

『ほゝほゝゝゝ』

直也は、筧の水で顏を洗ふて夕飯を濟ませた後、氣を爽かにして背戸に佇んだ、モウ夏の意は杜に來て居る、時鳥も過るだらう、みづゐさす梢白い雲を仰ぐと、春の倦怠を破る活動の音づれ、志ざすに物皆成らぬは無い勇ましい敎訓は自然の形象に滿ち溢らて居る。

『ウン一氣に遣つけやう』

斯う獨語つて彼は椽に腰を掛た、會心の作と自ら許す小説「愛」は今其半に進んだところである想を構へるのか文を練るのか直也は長い間眼を閉ぢて居た、夕闇が藁屋の軒に濃くなつた頃、

『あゝ』と云つて起上つた彼の顏には堪え難い苦痛の色が漲つて居る、腕を撫つて獨語つた今の前の勇ましい詞に變つて、物を悼む風情で靜かに机前に坐つた、彼は假睡の夢を覺めての今も

想ふのである。

『先生、先生は酷いねね、だつて僕を拋といて獨りで逃げるんだもの』

と全身全濕になつた薫が杖に縋つて恨めしさうに此方を見て佇つて居る。

『オ、薫君、君を救はうと思つて僕は骨を折つたけれどな、君が沈んで了つたから何する事も出來んなかつた、勘忍して呉れたまへ』

『僕先生に遇ひたいから一生懸命に泳いで上がつて來たのです、先生獨りで逃げる事は厭よ、僕を連れて逃げて下さい。ね、これからは僕を……』

『諾、これからは決して僕獨りで逃げはせんから安心したまへ』

『先生――先生――』

『何した、何したんだ』

可憐の姿は影の樣になつて我に遠ざかる今度は遣らじと追かけやうとする足元は鍬やら書籍やら小山の樣な黒汁壺、自由にならぬ身體を藻掻いて『薫君待てエ』と聲振絞る時夢は呼び覺された。

『ア、薫君ッ』

直也は夢の詞を其儘に唸るやうに云つて机に肱を突いた。

薫の姿は永へに直也の心臓に彫りつけられた深い深い傷であつた、杖に倚る痛ましの少年を彼は遂に忘るゝ事は出來ぬのである、蒔く種に咲く花を見ては鍬に倚つて少年を聯想した、專念の執筆は屢此追懐の爲に妨げられた、薫は夢に度々此農家に訪問れるのである。

『あの先生樣、先生樣に遇ひたい云ふて車夫見たいな人が來たゞアよ』

と主婦が外から呼んだ。

『車夫？宍戸が寄越したのだらう、困るなア』

直也は呟きながら立出る。

（二九）

直也は俥夫と聞いて宍戸からの使者と思つて椽に出た、モウ其處へ黒い影が佇つ、座敷の洋燈の光りは庭まで達かぬ。

『僕が榊ぢや、何だね』

と云ふ聲の下、腰を屈めた俥夫はッカッカと椽に近づいた。

『オ、榊の旦那ッ』

『……』

『俺でございます、音藏でございます』

『ナニ音藏ッ』

直也は愕然として身を退く樣に後ろの障子へ寄つた、音藏といふ聲は彼の神經を烈しく刺戟したのである。

『漸との思ひで探して參りました、旦那あの……』

『君は僕に近づく事は許さんと云つた事を忘れたかッ』

『ヘイ其お詞は忘れはいたしやせんがお報せしたい事やら御相談が……』

『ナニ報せる事と相談？何を報らせて呉れと賴んだ、君達から相談を受ける理由は無い、何時までそんな事を云ふのかッ』

『ヘイ……』

『君達までが此榊直也を不義の寃罪に陷うとするのか』

『榊の旦那、俺がそんな者で無い事は旦那は知つて居て下さる筈でございませんか……』

『イヤ人の精神は僕に判らなくなつた、君達が何を思ふて居るかそんな事は知る限りぢやない早く歸りたまへ』

『そ、そんな事を仰有らぬいで、俺の話だけを……』

音藏の聲は暗い中に顫えて聞える。

『聞ん、聞く事は出來ぬのぢや、よし其話を聞いてからが何になる、大野夫人母子に干しては僕は絶對に忌避しなければならぬ、僕が居た爲にあの夫人は姦婦の疑ひを受けたぢやないか僕はあの夫人のあつた爲に生きながら葬られやうとする目に遇つたぢやないか、此寃罪を雪ぐ事は夫人にも僕にも重大な仕事ぢやないか、それに、その仕事を破壞する爲に君達は僕に近づくのかッ』

罵る聲は烈しかつた。

『君達には僕が斯な所へ籠居んでる理由が解らないか』

『ヘイそれは俺にも能く解つて居るのでございますが……』

『解つて居るなら早く歸るが可い』

と膠なく云ひ捨てゝ、直也は座敷へ入りかける。

『お優しい旦那のお精神が解るほど俺ア お縋り申すのでございます……』

『僕は世間一切の事と絶つて居るのぢや鍬と筆を握るより他の事は交渉は無いその僕の事業の妨害をする奴は敵ぢや惡魔ぢや、謂んや君達の……エ、僕の精神を動搖させる君達が此處へ來るのぢや無い、歸れ、歸りたまへ、さ早く歸るが可い』

『御道理でございますが俺ひとりの思案に能はねいので、是非とも旦那にお願ひ申したいと種々に探して漸と參つたのでございます、お仕事の邪魔になれば眞の暫時の間……奥樣は彼時から御病氣で坊樣は……』

『エ、聞かぬ』

と直也は大喝して。

『悲慘もあらう……涙もあらう、皆なそれ〳〵に泣いたり喚いたりする樣に出來てる世界ぢやそれを一人づゝ鬪ふのぢや』

云ふ聲と共に障子をパタと閉める、音藏は暗い庭前に茫然と佇つた。

(三〇)

直也は昨夜音藏を强いて立去らせた後、此頃は靜寂に更け行く夜と共に筆を進めるのが癖になつて居るので、毎時の如く机に對つたのであるが、心を洗ふ寛の水の音も今宵ばかりは騷がしう響いて、何しても筆執る氣分になれなかつた、一日の間に起つた二つの出來事の爲に彼の頭の中は酷く荒されたのである、けれども其一つは大した問題では無い、巽伯の招待會？そんなものに招待される理由も無けねば出席する理由も無いと思つた彼は、謝絶る事が師なり友の譽しい情義に對して心苦しいと感ずるばかりであるが暗い庭に不意に現はれた音藏の姿……それは薫の夢に續いて烈しく彼の精神を攪亂したのである。

『自分は何故彼の少年の事が忘れられぬのであらうか』

とは直也が忘れられぬ薫の事を思ひ惱む前後に屹度呟く詞である、昨夜も苦しい嘆息と共に斯う云つて、己が影のみ從ふ寂しい部屋に寢轉んだ。

薫の事を想ふのは自分の事業を破壞するのである、自分は今瞑想の詩の國に遊ぶ、精神を傾け

た作物は軈て、我生命である、不朽の生命殘す大事業に臨んで、それを邪魔する者は敵である

ア、敵か薫少年、憎い其敵が自分は片時忘れられぬ。

櫻花の影に彷徨ふた過ぎし夜の事は鮮明と印象つた夢である、大野家の家庭は遂に破裂して夫人は離緣され薫は何處かに拉れて行れたとまでは其時始めて知つた其時から自分の苦痛はいよ〳〵加はつたのである、夫人の悲慘な境遇には同情するが假令一時にもせよ、互ひに不義の冤罪を蒙つた者がいよ〳〵誤解と疑惑を招くが如き行爲は斷じて慎むべきである、で切なる音藏の眞情には胸裡で泣いて口で怒つた、家なき夫人に對する無情は即ち有情である、取縋るのを突退けて姿を暗ましし此處に隱れた自分の大きな同情は賢い夫人に了解されやう、それよりも……如彼ほど自分を慕ふた少年は今何處で何して居るのであらうか。

自分と引離された薫は間もなく又慈愛の深い母と別れたのである、何といふ痛ましい不幸であらうか、肉躰を傷けられた彼の精神をも不具にせうとかゝる惡魔の呪ひの殘虐なる事よ、殘虐の月日の下に彼は懷かしい師を呼び戀しい母を慕ふて血の涙に咽んで居る事であらう。

ア、自分は今大きな矛盾に惱まされて居る、一身の爲に彼の夫人の爲に、身を捧げた文藝の努力の爲に、不義の冤罪を雪ぎたい念は烈々として燃えて居る、それが爲には友をも捨て都門を

去つた、熱情の詞に耳を覆ふて心を鬼にして音藏を逐ふた……がその行爲を容れぬのは薫を忘れ得ぬ事ではないか、其消息が知りたい爲には逐ふた音藏が追ひ駈けたい、惜しい筆持つ時間を空しく茫然と消したのは何程であらうぞ……

咄我を呪ふ惡魔の假に少年薫と現じて此快惱を與へるのではないか？。

音藏が夢であつたか薫が現であつたか、それさへ判らぬやうに果は煩悶に疲れて何時となく寢入つて覺めた今朝、一字を爲さぬ机上の原稿紙に顏を反けて直也は苦しげな嘆息をついた。

『オイ又來たぞ』

と宍戸が入つて來た、今朝暗い中に宅を出たのである。

『顏色が惡い樣だぞ餘り過度の强勉をするなよ』

『君達が遣つて來て此腦を動搖させるのぢや』

と云つたがそれでも厭な顏はしなかつた、そして。

『彼の巽伯の招待の事ならモウ勸めて呉れるな、理屈は廢めにして僕は厭だ』

と逸早く防禦線を張つた。

『はゝゝそれでも僕に來るなと云はぬところがまだ以前の榊だな、僕は厭といふ事を强て勸

めに來たんぢやない、今日は自分の事で相談に來た、オイ榊、君と僕とが友人になつたのは決して偶然ぢや無からうな』

『そんな事を今更聞いて何する、偶然ぢや無いさ、僕は斯云ふ人間ぢやから友人は數ふる程も無い、其中で僅た一人の君ぢやないか』

『オイ〳〵斯な田舍でもお世辭が流行るかい』

『お世辭？馬鹿な事を云ふな、僕は腹にないお世辭なんか何して云ふものか知らんのぢや』

『可し、唯一人の友といふのは虚僞ぢやないな』

と宍戸は微笑を湛ゐて。

『榊ッ、そんなら僅た一人の友人を救ふて呉れ、僕は今絶體絶命ぢや』

（三一）

宍戸が智慧を絞つて情の搦手から押寄せる方略も遂に其功を奏しなかつた、招待會に出席して呉れぬとそれを請合つた自分は其爲に絶体絶命の窮地に陷るから友人を助けると思つて承諾し

て呉れと詞を盡して說いたが直也は之ばかりは許して呉れと云つて頑として應じなかつた。

『嬉しい君の情義には屹度酬ひる、それは今書いてる作が出來上つた時だ、それ迄待て呉れ』

『僕は待つが機會は人を待つて呉れぬ、此際進んで出ぬといふのは愚だ、足さへ動かせば文藝の壇上に名譽の位置が占められる機會が眼前に出て來て居るのにそれを捉まえぬといふのは大馬鹿者だ』

『ぢやア暫時僕を其大馬鹿者にして置いて呉れ』

斯な問答で宍戸は遂に我を折つて引上げた、けれども彼は別れ際に斯う云つた。

『モ一度能く考へ直して呉れ、明日又來るからな、僕は良友としての責任が盡したいばかりぢや』

『解つてる、榊直也は土を弄つても精神に泥は塗けぬ、知己に感ずる意氣は有つてるから、けれども今度のには出ぬ、百邊來ても出ぬから堪へて呉れ』

直也は斯う答へた。

宍戸を見送つて座敷に歸つた直也は急いで背戸の清水に趣いて、筧の水をザブザブと頭に浴びた、氣の屈する時薫を想ふ時に彼は頭を抱へる樣にしてこの冷たい水に走るのであつた。

此一日は机に親しんだ、原稿紙は頻りに疊に落ちた、専念にペン走らす彼の面には勇猛精進の氣が迸しる、小説「愛」は其主人公たる青年が一身を犧牲に捧げて階級の壓迫と闘ひ習慣の敵に當りつゝ境遇の爲に惡に墮した、不良女性の靈と肉とを救うといふ筋の、其主眼のところに及んで居る、筆は想に連れて苦もなく流暢に進んだ、氣乘りのした直也は屢々怪しい机を顚覆させかける、一段落まで漕つけた時は煤けた障子の上の棧邊りがモウ薄暗くなつて居た。

「今日は早く暮れる樣ぢや」

と起上つて障子を明けると、外は霧が籠めて雨はシト〳〵と藁屋根に降りそゝいで居る、直也はフト昨夜の今頃を思ひ浮べた……椽に手を突いて我を見上げた音藏の顏。

素氣なく跳ね付ける我に對して何な感情を有つて居るだらうか、それにしても何といふ美はしい性格を有つた彼であらうか、自我といふことのみ知るを賢いとされる世の中に、他に盡す崇高な同情が彼が如き無敎育の人に何して如彼まで根を深く養はれたのであらうか、轅棒握る人の前に敬虔の膝を折るべきである……。

直也は小暗い雨の背戸を眺めて物を思ひつゝ、椽に佇んだ、黑い杉の生垣の外は田圃道である、霧と雨に暮れる寂寥は人を壓えつける樣である、冷たい風が吹いてバラ〳〵と椽を濡らした、

其時垣の外に人の氣勢がするのに氣付いた直也は、凝と佇立つて此方を伺ふ樣な氣がするので

「誰だッ」と聲をかけた、牛盜人が能く村へ入込むのである、直也は續けさまに怒鳴つた。

「誰だッ其處に佇つてるのは」

「へイ音藏でごぜいます……旦那又參りました」

(三二)

「又來た？何をしに來たッ」

直也の怒氣を含んだ聲は雨を隔てゝ高く聞えた。

「へイ旦那……あの話さへしなけりやア可うがせう、俺ア干係を全然斷つたのでごぜいますから……」

直也が何とも返詞せぬ中に音藏はモウ彼方から廻はつて入つて來た、泥の素足に草鞋の紐が喰入つて、雨を彈かぬ破れ合羽の痛々しい姿を見下すと。

「一切あの話をしなければ上りたまへ」

『へイ有難うございます、ちやア御免なすつて』

と音藏はイソ〳〵足を拭うて樣に上る、座敷に招れて對座になると、懷かしいものに繁々と直也の顏を見る。

『旦那、何時か旦那が仰有つた通り、何時まで昔風の忠義立をして意氣地の無ね大野の奧樣に御奉公も馬鹿馬鹿しいと思ひましてね、俺ア奇麗に干係を斷つ了ひましたよ』

『フム』

と直也は腕を組で聞いて居る。

『彼時からね旦那、何しても實家へは歸らぬと云ふ奧樣のお供をして俺の知邊を倚つて其家へあの方を預けたんでございまさ、それから俺ア辻車を曳く、あの方は裁縫の賃仕事で……昨日に變つた悲慘な生活をする中に……餘り氣を勞つた所爲でございませうよ奧樣ア病氣でドッと寢付い了う、不景氣の此頃ぢやア俺の稼ぎで藥代までは手が届きませんや、それでも何しても玉川の實家へは歸れないと云ふので、俺がソッとお袋まで知らせると、あの方のお父樣といふのが又馬鹿に義理堅い昔氣質でね、離緣れる理由の解らぬい中は敷居三寸跨げさせねねといふのでさそんな間に狹まつて……奧樣は病氣が重るばかりでございますが……誰だつて確りした

力になる者はねいので……』

語る音藏の聲は曇つたが急に笑ひに紛らせた。

『はゝゝゝ今ぢや俺ア干係が無ねから何なつたつて構ひませんが……旦那如彼のを因果とでも云ふのでございませうね』

と云つて直也の面を凝と見る。

『それから旦那あの坊樣でございまさ、何かして居所だけ知りていといふ奧樣の賴みで俺が探索するとね、奧樣に代つて今ぢや大野の妾同樣になつてる佐藤男爵の妹の喜代子ッて奴が坊樣を連れて此頃は巽伯爵の邸內に住んでるさうでございます』

『薰君が巽伯爵の邸に？』

と直也は思はず口を切つた。

『へイ何でもあの邸には馬鹿の姫樣とかが居て其お遊び伽を喜代子ッて奴がするんですね、そんな所へ坊樣を連てつて馬鹿娘と一緒に弄り物にして居るのでございませうよ』

『それは事實か』

『へイ俺がツイ昨日確かな所で聞いた事でございます、あの賢い坊樣が定めて旦那や奧樣をお

慕ひ遊ばして……今頃は……』

俯向いて手拭で額を擦ると。

『それもこれも今ぢや干係を切つ了つたから俺ァ何とも無いけれどは、、、』

泣く樣な聲で音藏は笑つた。

直也はホウと息を吹いて面を上げた。

大きな眼は濕んで居る。額を押へて机に倚ると。

『彼な人達に無干係でも……僕は目下大仕事を遣つてるのぢや、頭腦を冷靜にせんと困るから……モウそんな話は廢めにして呉れ、可いか』

物云う間も心臟を抉らるゝが如き深刻な悲哀に堪ねられぬのであらう、衝と坐を立つて椽に出た、暗い背戸を後ろに、障子を捉まへて振顧くと。

『薫君は巽伯爵の邸に居ると云つたな』

雨の晴れ間を空に帛裂く聲。

(三三)

其翌日の朝宍戸の姿は例の如く直也の寓居に現はれた、彼はモウ一縷の希望も繫て居ぬのであるが、來ると約束したから唯來たのである、モ一度考へ直して呉れと云つては置いたが、直也に考へ直す餘地があらうとは思はぬ、的なく放つ矢の無益骨折は知れてありながら、この二三日來中央文壇に華々しく取沙汰さるゝ文士招待會の噂……それは當代の代表的文士といふ月桂冠頂く名譽の人々共を取卷く羨望と賞讃の諸聲……それを聞く度に衝動さるゝは友を思ふの情である、名譽の友を有つ我誇の心である、腕力づくでも押出して遣りたい心は日の逼るに從つて制へ切れぬので、今日で三度目の足を運んだ。

『オ、宍戸今日は此方で待て居たぞ』

と姿を見るなり聲を掛けた直也の顏を呆れた樣に見て。

『待つて居た？はゝゝゝ餘り待つて呉れもすまい、厭がられるのを口說く經驗は僕は始めてだが隨分詰らんものさそれでも今日は元氣が良いのが有難いな』

と机の向ふへ胡坐。

『昨夜は原稿の進捗がいつたと見ねるな馬鹿に嬉しさうぢやないか、思ふ樣に書けた程愉快な事はないと、繪と同じ事だらう』

『オイ宍戸、そんな事は何でも可い……今日は何も云はんな』

『云はんとは』

『招待會の事ぢや』

『は、、、逆襲するね、實は流石の僕も聊か勇氣沮喪ぢや、最後の決答を促しに來た事は來たのだが……考へ直して呉れたか』

『巽伯爵の本邸で行るんぢやな』

『左樣さ、モウ明後日だからな、大分評判になつてるよ、僕は今夜松岡さんの所へ返事をする約束だ先生も瀬川博士も君が出ないのには落膽するだらうよ』

『僕行くぞ』

『ナニ』

宍戸は驚いて直也の顏を眺めた。

『巽伯の招待會に僕出席しやう、其返事をしやうと思つて君の來るのを待つて居たのぢや』

『オイ眞實かい』

と宍戸の驚喜した聲には襖も障子も震ふかと思はれた、直也は友の面に現はれた尊い眞實……我事の樣に喜ぶ樣を見ると涙が出る程嬉しかつた。

『種々配慮をかけて濟まなかつた、瀬川博士にも松岡先生にも君から能く云つて呉れ』

『オイ榊、僕を欺くのぢやあるまいな』

『そんな事はせん、大丈夫ぢや、屹度出席する』

『だつて訝しいぞ天氣の變り具合が……晴後暴風雨になるんぢやあるまいな、チト劇變過る』

『はッはゝゝ考へ直せと云つたぢやないか』

『ウンそれは云つたが……オイ榊嘘を吐いたら承知せんぞ』

『嘘を吐いた事は無い』

直也の眞面目な態度を見て宍戸は急に立ちかける。

『僕は身體が飛行機の樣に飛びさうだぞ、打合せには松岡先生と一緒に來る、失敬するぞ』

躍るやうにして去きかけるのを。

『オイ一寸待つて呉れ』

『何だ……止める？ぢやあるまいな』

『は、、、、まあモ一度坐れよ、出席に條件があるのぢや』

『條件ッて何だ早く云つて呉れ』

『僕を何處までもあの「涙」の神木朱衣の名で通して貰ひたいのぢや』

『變名でか』

『變名ぢやない、あれを實名に扱つて欲しいのぢや、僕は文壇の先生達には誰一人顔を知つた者は無い、それが幸ひぢや、僕はあの作で本名を名乗る程大膽にはなれんからな、これだけ骨を折つて呉れよ』

『ウン可らう出席さへして呉れゝば、併し君を知つてる奴が居んかね』

『餘り交際をしないお蔭ぢや、僕の顔と名を知つとるのは君の外に指を屈める程無い』

『榊、吹聽の上に吹聽したいので選に入つた先生達は大分新聞を賑はして居るが……君ほど偉つた文士も居ないぞ』

『僕は文士ぢや無い』

『君が文士で無けりや何だ』

『僕か、僕は何でもない唯男ぢやはッはは、、、』

（三四）

巽伯爵の文士招待會は開かれた、觀櫻會といふ名義は若葉會と變更さるゝ程豫定の日取よりも遲れた、これは代表的文士を選拔するといふ事に困難の事情があつて急遽しく散る花までに出席文士側の纏りがつかなかつたのである。

伯爵本邸では夜の宴會の準備に種々の人が目眩ろしく立働いた、名園の稱ある景色麗はしい林泉は葉櫻の眺め一層であるそれに面した廣間には風變りの今宵の珍客を驚かすべく一分も隙さぬ設備が調ふて、燈の入るを待つばかりである。

今廊下をバタ〳〵と走つて令嬢雛子の居室へ現はれたのは彼の喜代子であつた。

『雛子樣、あら貴女また泣いて？可けないわねえ、さ、早く御機嫌直して下さいよ、モウ泣かなくても可いのですやう』

『神木さん來るの？』

『貴女能く妾に禮を仰有いよ』

『來て？』

『ほゝほゝゝ嬉しいでせうさ斯しては居られません貴女直お湯を召して化粧室ですよ、お母様が待つて被居るから』

『ほゝほゝゝゝ神木さん今夜來て？』

喜代子は遲緩しがつて舌打した。

『來るのですやう貴女の戀ひ憧れて被居る神木朱衣ッて小説家が、妾何程骨を折つたか知れないわ、何しても來ないといふのを貴女の爲に妾無理に賴んだのよ』

出席文士三十餘名の中傑作と推薦された小説「涙」の作者神木朱衣の居所が知れぬといふのであつたが、其人は今朝になつて、今度の招待會の幹旋役たる瀬川博士から確かに出席するといふ通知が來たのである。

『喜代子さん妾嬉しいわ』

と雛子は縮らぬ顏を一層緩めてニタ〳〵と笑ひながら斯云つた、そしてキョロキョロと四邊を見廻はして居たが、衝と起上つて違ひ棚に載つた美しい文庫を開いて取出したのは刺繍の袱紗

包みである。

『喜代子さん約束の金よ、これ進げます』

包みの中から無雜作に掴み出したのは新しい紙幣の幾束、喜代子は後ろを一寸振顧いて。

『妾預かつて置きますからね、貴女お母様にも誰にも云ふ事はなりませんよ』

手早く懷中に入れる。

『妾誰にも云やしないわ、まだ要るわねえ』

『エゝまだ要りますとも、だけれど今はこれだけ有れば能ござんすからね……妾此金自分で費うのぢありませんよ、皆な神木ッて貴女の好きな人を呼ぶ爲に要るのですからね他人に斯なことが知れたら妾モウ知りませんよ、一寸でも他人に告げたら其人に遇はしやしませんよ、此事は屹度覺ねて被居いよ』

と例の雛子の怯える眼の光りをチラリと呉れて。

『それから妾へのお禮ね、あれも忘れては可けませんよ』

『忘れはしないわ、此處にはお金まだ有るのよ』

『ほゝ』

喜代子は思はず出る笑ひを禁める事が出來なかつた。既に千に近い黄金は斯して雛子の手文庫から彼の懐中へ移されたのである、金ばかりではない、其麗げな狀態の精神さへ今は喜代子の掌握である、雛子は神木といふまだ見ぬ男を對象として盛に煽動された盲目の戀に惱み出してからは一時も喜代子を放さなかつた、で喜代子はその理由で伯爵夫妻に懇請されて此處の邸内に身を置く事になつた、本邸よりは少し離れた別棟で、彼は兄信明に世話せらるゝ向嶋の別莊よりも不自由の無い生活をして居るのである。

（三五）

文星一堂に輝く招待會の宵は來た、主人巽伯爵は羽織袴の服裝で席に臨んで、如才の無い接待振を見せる、蕭々たる雨の夜を膝交へて語る趣向の嘗て催された某侯のとは違つて極めて華美を盡した宴であつた、餘興には斯道の名家を選つた歌舞音曲もある、酒間を斡旋するのは花を揃へた同族の令嬢夫人達で、此趣向は先づ客を驚かせ且つ喜ばせた、美に憧がるゝ筆有つ人々の魂は美の女神と怪しまるゝ艶姿の前に動いて止まぬ、庭前の花は散つたが座敷には千朶萬

朶の色が漲る歡樂をそゝる高い調子に樂聲が起つた、瀬川博士の作「星の集ひ」が奏でられる。

『彼女は何者です』

『あの鼻の高いのかね、君の消息通にして彼女を知らんとは妙ですね、彼女が當邸の主人公の股肱たる佐藤男爵の妹喜代子ですよ』

『喜代子？喜代子といふのは何時か新聞で華族の百美人を募つた時當選した女ぢやないですか彼女なら間もなく結婚したといふ噂でしたが』

『左樣、一度京都の同族へ嫁入して歸つて來たのです、彼女は描寫に餘りある婦人ですぞ、精細に觀察なさい』

『はゝゝは、其傍をくつ付いたやうに離れない令嬢の樣子は妙ですねゝ』

『妙な筈です、あれが伯爵家の痴愚姫殿下さ、低能兒です、喜代子が一切物を云はせないやうにして居るでせう、彼な代物をお座敷に出さなくても可さそうなものだが一世の怪雄巽元卿も痴愚の子の爲に馬鹿になるんですね』

『驚いたねゝ痴愚ですか、尤も惜しい物だとは云へない柄だが』

『あの容貌と來て居るから念が入り過ぎてるのですよ』

『低能の令孃に出戻り夫人か、隨分此邊も赤裸々にしたら描けますね』

『描けますとも、貴方の筆には持つて來いだはゝゝゝ』

斯な話も隅の方では私語かれた、喜代子は令孃雛子に附添ふて華やかな姿を並べた。

瀨川博士は起つて謝辭めいた短い演說を畢つた後、人々に乞ふて其自由な文藝上の說話を聞かん事を求めた、筆の如く鋭い辯で自然主義の憧憬を語る齡の若いゾラに續いて優しい色白のラニスン卿も現はれた、酒に醉ふて文を語り語つて歡ぶ聲は洋々と室に滿ちた。

喜代子は主伯の旨を承けて起上つた、其手には蒔繪の輝く硯筥と一卷の絖を捧げ自づと我に集る衆客の視線に誇の心を滿足させつゝ、靜かに歩みを運んだ、今宵の歡會を紀念すべく主伯から人々の筆跡を求めたのである、瀨川博士が勸誘役の喜代子が墨磨る役で坐の端から順々に廻はつた、墨痕淋漓繪に似た字やら字に近い繪は雪白の絖を狼籍に染めた、中に一字、龍蛇の筆勢宛がらに躍るが如きは男と大きく朱衣と名を小書した筆跡であつた。

伯爵夫人の好みで杵屋連中の長唄も出る清艶な絃の冴ねと戀の道行の歌はいづれ多感多情ならねはなき人々を更に酒の力よりも濃かに醉はせる。

自慢の林泉は客の逍遙に任せる爲紅緒の草履が廣椽の前に並べられた、座敷は長唄の與涌く最

中を唯獨り其處に下り立つたのは神木朱衣の直也あつた。

(三六)

巽邸内に母家と隔つて別に一構の、木口新しい蕭洒な家がある、其棟は廣大な庭園の松の梢の間に繪の樣にかゝつて景を添える一つになつて居る、其處に行くには野と谷とを模した可なりの距離を歩かねばならぬ、富に任せて惜しまぬ人工は殆ど自然の姿の山川溪谷を座して眺めらるゝ、咫尺に移して、花に薫風十里の趣きを愛し月には清流の影掬すべく數奇を盡した名園である。

一連の雜木林に塞がれて燈火の明るい家は、本邸の方からは見ねぬ、家の中には人の聲が聞ねた。

『ナヲ由、一寸行つて覗いて來ても可いだらう、スグ歸るから』

『可けませんッたら可けません』

と烈く叱る調子で。

『あれ程仰有つたぢやありませんか、お歸りになるまで一寸でも出す事はならんッて、又叱られたいのですか』

慳貪な女の聲。

『貴方の叱られるのは勝手だけれど、毎時も々々叱言のお相伴ばかり喰つてこの由が堪るんですかよ、馬鹿々々しい』

『おばさんの歸らない中に僕スグ歸るから……』

『執念いッたら無いわ此坊さんは、貴方は何故そんなにお嬢樣の命令を肯かんのです、あんなに叱られたり叩かれたりする癖に……おばさんッて云はないで姉樣と云へと仰有るのでも幾度だか知れないのに

『僕姉樣ぢやない、僕には姉さんは居ないから』

『又そんな生意氣な事を、お嬢樣が貴方の姉樣におなりなさつたのぢやありませんか……そんな減らず口を聞いては酷い目に遇つてピイ〳〵泣んだもの』

と吐き出す樣に云つた。

お由と呼ばれたのは喜代子の召使ひの女中である、少年は師と母とに引離された大野薫であつた。

『モウお寢みなさいよそんな叱られる事ばかり考へないで……由かて貴方といふ世話の燒ける方があるので氣骨が折れて疲勞しますよ、不在の間に樂でも爲なければ間尺に合ふ奉公ぢや無い』

薫は遙かに聞える本邸の賑やかな樂の音に誘はれて、一寸覗いて見て來たく女中に强請だのであるが承引れさうにも無いので、悄然と奥の寢室へ入つた、小さい影を煩いものに見送つてお由は生欠伸をしながら。

『ヘン足は不具の癖に口ばかり熟せて本統に了ない小童だよ』

罵しりながら太い足を投げ出すとドタリと横になる。

微かに緩う……消えた、とまた近う急調に……ド、ン、ン、勇ましう、洋樂の音は靜かな夜の空氣を傳はつて、寂しい臥床に母を思ひ寢の少年の枕上に落ちる、フト目を覺ました薫は首を動かして我獨りのみなる部屋を見廻はした、明るい瓦斯の光りを凝視めた双の眼には涙が溜つて居る、ムク〳〵と起きると蒲團の上に小さう坐つて。

『お母樣』

と一聲、それに何の反應もない孤獨の寂寥に堪へられぬか、的もなく起つ耳元へ樂聲は一際高い音に響いた。

『行つて見やうか知ら』

急に決心した彼は盜むが如く密と襖の間から覗くと、勝手には臼を引く樣なお由の鼾聲、そろ〳〵と雨戸を明け椽に出る。

（三七）

寞酣はける座敷を脱けて庭園に下りた直也は若葉を照らす月明りに飛石傳い彼方此方を逍遙した、けれども夜目をも驚かす泉石の配り樹木の位置結構を盡した大庭園の風趣も彼には何の感興をも與へなかつた、銀波ゆらぐ心字池の畔で淙々たる飛泉の音を聞きつゝ佇立ると、一片雲なき空明を仰いだ。

心進まぬ今宵の招待を頑く拒んだ彼が忽ち心機一轉の樣子を見せて出席した理由、それは彼より外に知る人も無い、彼は精神を縛ばる太い繩に引かれて我にもあらず此邸へは來たのである

音藏の話で始めて知つた薫の身の上、男爵の令嬢に連れられて此巽邸に居ると聞くと同時に招待を拒む理由も見識も一切の我は消ゆるが如く沒して、鳴りて涌立つ潮の勢ひに胸に昂ぶつた感情は。

『伯爵邸へ行け伯爵邸へ、薫の居る巽伯爵邸へ』

と呟いて止まぬ、モウそれを制へる理性は無つた、果して薫は此邸内に居るだらうか、居れば何處に？、夫許注意する眼に遂に夫らしい影も見られぬ、綺羅と飾つて花の舞ふ如くに振舞ふ夫人令嬢達の明るい華やかな運命とは世界を異にして、暗い冷たい悲哀の底に涙も盡きて倒れて居るのではあるまいか……。

斯う思つた直也は坐に堪へられず密かに庭へ下りたのであるが、其消息さへ聞く術も無いのに探し求むる事の出來やう筈も無い、唯三味線の音色にも切ない哀愁のいよ〳〵催さるゝばかりなのに何とはなく通るゝ如くにして此處へ來たのである。

鳴る飛泉の音は絃聲にも增して亂れた情緒を刺戟する、直也は無意識に歩を移して太鼓橋を渡ると、太い幹の眞黑に聳し合ふ杉林へ出た、枝に遮られた月光は微茫として、見透す向う小さな丘の前に黑い家の影と燈が一つ、白く横はる細徑の端に夢のやうに浮いて見ゐる、直也は其

處の腰掛に倒れかゝるやうに倚つた。

坐敷では又洋樂が始まつた、大喝采だつた博士の作曲が再び所望されたのらしい、俗調な歌詞に優雅な節をつけた作意は、天上の星と人間と相睦みては喜び別れて嘆き、歌取り交はして空と地と久遠の情思を霞に花に遣る……。

眼を閉ぢて居た直也は微かに我に近づく足音に氣付いて屹と其方を見た、夢のやうな細徑を小さな黒い影が歩む『小供だな』と思ふと彼は急に身を起して躍る心に我知らず二三歩前へ出る影は果して少年であつた、人ありとも知らで我に近づく少年の姿。

『オヽ杖を……』

と直也は心に叫んで矢庭に身を交すと、腰掛の後の暗い木下闇に隱れた。

少年は薫である、樂の音に誘はれて密かに此處まで來た彼は、不自由な脚を重さうに腰掛に憩はせつゝ、猶耳を澄して面白い樂聲に聞惚れて居る、曲は最後に近づいて人の心を躍らせる急調に響く、薫はそれに和つて。

花なら散るよ散るから花よ、散る花うけて枝にのせたらまた散つた、散るから花よ、花なら散るよ……。

唱歌は嘗て直也が戯れに作つて櫻が下の運動に薫と共に歌ひ連れて遊んだものである、薫の聲は次第に高くなる、寂とした林の中に鈴を振るやうな美い聲で、散るから花よ、花なら散るよ……。

フッと吹消された燈のやに、樂聲はバタリと止んだ、急霰の如き拍手が暫時聞えた後は、寂寞となる。

薫も歌を止めた、と急に襲ひかゝる夜の幽寥に薄暗い我が周圍を見廻はすと、シク〳〵と泣き出した、

『……榊先生……』

悲しい聲で再び呼んだ。

『……お母樣……』

直也は薫と知つた時手も觸るゝばかり其背後に近づいて、忘れがたなの小さい姿を凝と見下した。

（三八）

『お母様……柳先生……』

懐かしい母と師の耳に達いて、恐ろしい喜代子に聞ねぬものならば、薫は咽喉の破れるまで呼び續けたであらう。

直也は我名を呼ばれて。

『オ、薫君』

と叫びかけた、叫ばうとして彼はヨロヨロと後ろに退ると、杉の大木を抱くやうに身を支へる。

呼んでも呼んでも答への無い空しき林の中を薫は去りかけた、梢を漏るゝ月の光りは蒼白く其横顔を照らす、見違える程頰は痩せこけて、鮮麗しかつた面影は消ねた、此痛しい姿を見て直也は『エ、』と唸るやうに云つて其前に躍り出やうとする時。

『チョイと師匠、あの松の枝にお月様の乗つかゝつてる風趣が何とも云へないぢやありません

か』

『左様、ねゝ清香、庭園も此位ゐのでなくちや可けないわねほゝほゝゝ』

艶めいた女同士の話聲が橋を渡つて此方へ來る、直也は再び姿を沒した。

薫は女の聲にギョッとした風で、杖を力に駈け出さうとした、恐ろしい喜代子の歸り？、此處で見付つたら大變と彼はヒョイヒョイと兎の飛ぶ様にして細徑へ出かける時、覺束ない足に草が絡んで、機みを喰つた薫は地響き立て半間の向うへ抛り出された、急所を打つたのか暫し聲も無い。

『あれ』

と若い女、バタ〳〵と駈寄ると。

『何したの、あ吃驚した、突然に……怪我しやしませんか』

『何だね清香、妾も吃驚したよ、小供ぢや無いかね』

清香と呼ばれた藝妓風の女は俯向に倒れた薫を抱起す、老女も寄つて來た。

『怪我はなくつて』

清香は覗き込むと『あら』ッと驚いて帶の間から半巾を取出して鼻血に凄う染まつた顔を押へ

る。

『まあ危い事ねね、貴方お邸の方？、お邸の坊様？』

薫は其人が喜代子で無つたのにホッと安心して痛い膝頭を押へて首を振つた。

『ぢやないの、何誰、何して斯な處に獨り……さ起つて御覽、ね、あら足怪我して？』

『足僕始めから斯なのぢや』

と薫は杖を拾ふと痛みを堪へて起つて。

『まあ足が惡いの、可愛相にねえ、師匠足が惡いのですつて』

『それに唯獨りで危い事ねえ』

『坊何處へ行くの、妾連れてつて上げませうね、又轉けたら危いわ』

『おばさん有難う……僕向かうに見ゐる家だ……』

『ぢや矢張お邸内ね、御親類？』

『僕預けられてるんだ、喜代子ッておばさん所に』

『喜代子ッ』

彼は喜代子を能く知つて居るのである、喜代子の兄信明の寵妓は此清香である。

『あの喜代子様の、まあ左様』

と云つて老師匠を顧向いて艶麗い顔に笑を浮べた、佐藤男爵との關係は師匠も能く知つて居るのである。

『あの方はお座敷に被居つてよ、連れて上げませう』

『厭だ、僕見付つたら又叱られるから……おばさん有難う、半巾こんなに穢れ了つた、僕歸つて手拭持つて來ておばさんに進げやう』

『ほゝゝまあ賢い事を……坊齡幾ッ？』

『九歳』

『まあ』

と清香は齡にませて確りした子供に驚かされる』

『そんな物は要らないわ、モウ鼻血止んで……彼家まで送つて上げませうね、それでないと妾氣にかゝるから』

『有難う……僕……』

『何したの』

『おばさん』

『何に』

『おばさん僕お母様か榊先生の所へ連れてッて呉れないの』

『お母様の所へ？、坊のお母様何處に被居して』

『何處だか判らないけど……玉川の伯父様の所へ行つたら判るから』

『喜代子様の宅厭？、何故坊預けられて』

『お父様が無理にお母様を離縁して僕おばさん所へ預けられたんだ、おばさんは僕酷い々々目に遇はすんだもの、……僕が默つてる時でもお母様や榊先生の事を考へてるッて毆つたり叩いたりするんだもの……そして僕にお母様や先生の事を忘れて了へッて叱るんだ……僕何してもお母様や先生の事を忘れる事は厭だい……僕おばさん恐いから厭だ』

と誰に向つて訴へる事も出來なかつた胸一ぱいの憤怒と怨恨を、我を優しく介抱して呉れる人に隱さず云並べて。

『おばさん後生だから僕お母様か榊先生の所へ連れてッて下さいよ』

（三九）

清香は今新橋で一流株の姐藝妓である。今宵は杵屋の長唄連中と共に餘興に招かれて來て居るので、連立つた老女は彼の師匠の杵屋某であつた。

思ひ掛なくも扶け起して介抱した少年から朧げながら悲慘な身の上話を聞されて袂を捉れて母の許へ連れて呉れと賴まれたのには持前の同情に強い心を劇しく衝動されて、彼は美くしい眼に涙を宿して居る。

『おばさん連れてッて呉れないの、ね、厭？』

清香は師匠と顏を見合せて何とも答へる詞を知らなかつた。

『僕門外まで出して貰つたら可いのよ、門を出る時直に捉まるんだから』

『そんな事をして？』

『僕二度出かけて捉まつた』

『まあ……そんなにお母様に遇ひたいのそれから先生ッて誰』

『榊先生ッて僕を一番可愛がる人よ、先生は僕に逢ひたければ勉強せいッて云つたから僕勉強せうとするとおばさんが叱るのよ』

『まあ何か事情の混んだ事らしいのね、だけどね、妾連れッてて上げるといふ譯には行かないから、默つて行つたりしたらそれこそ喜代子樣に叱られるわね、そんな事を云はないで早くお歸りなさい、ね、賢いから』

『連れてッては呉れないの』

と薫は落膽した風で。

『おばさん……おばさんは榊先生には遇はないの』

『榊先生ッて何な方』

『背の高い髯の生えた……左の眉毛の上に黑い物のある人』

『ほゝほ唯それだけでは、何處に被居るの』

『神田の下宿屋に居たんだけれど……』

『判らないわねね』

『おばさん先生に遇つて僕此處に居るのを云つて下さいよ』

『だつて雲を捉む樣な……あゝ妾此お邸へは奥樣の所へ月に三度づゝ上るのだからね、又能く尋ねて知れたら云つて上げませうね、それまでは喜代子樣のおばさんの仰有る事を能く聞いて叱られない樣にするのですよ……妾可愛相で他人事とは思はないからね』

『有難う、おばさん先生に遇つたら僕迎ひに來て下さいつて……』

『エゝ云ひますとも、何な事情か知らないけど、そんなにお母樣や先生を慕ふ心は屹度通じてよ、通じて遇へる時が來るからねね』

『おばさん僕歸るよ』

『あゝ賢いねね、轉けない樣にね』

薫は長く渴した優しい詞に嬉しさを染々と覺えて、數歩に佇止る。

『おばさん』

『何に』

『左樣なら』

『あゝ左樣なら』

黑い小さな影はトボ〳〵と行く、清香は師匠に促されて心を殘して引返へす。

『師匠妾スッカリ泣かされてよ』
『可愛相な子供ねね、何したと云んだらうねね』
『妾喜代子様のお嬢様に聞いて見やうか知ら』
『お止しよ』
と師匠は手を振つて。
『却々確りした嬢さんらしいからね、そんな事に我們が口を出しては可けませんよ』
『それも然うねね、だつて師匠妾お腹が何かなるかと思ふ程切なかつたわ、縁も關係もないにねね』
『人にはそんな事が有るものですよ、何でも無い事が一生忘れられなかつたりね』
話しながら座敷の方へ歩む向うへ、雛子の手をとつて現はれたのは、喜代子である、目敏く。
『清香ぢやないかね』
『佐藤のお嬢様』
『お前今橋の向うへ行つて』
『ハイ師匠がお庭を拜見したいと申しますので』

『あの誰かに遇ひはしなくつて』
清香はハッと思つて。
『……い、ね何誰にも』
『あの背の高い髯の生えた方よ』
『そんな方でございますか一向……あのお客様でございますか』
『はあ何處へ入らつしやつたのだらうねえ』
雛子は泣くやうな顔。

(四〇)

杉の木下闇に息を殺して隠れて居た直也は人々が去つた後を立出て、薫の行つた方を眺めたがモウ微かに見る燈火の家に入つたのだらう、それかと思ふ影も見えぬ、今迄薫がかけて居た腰掛にドッカと身を頽して『ア、』と苦しい聲を漏らすと、両手に後頭を押へて横に長う寝轉んだ。

薫は疑ひもなく今喜代子の虐待を受けて居る、それは話振で確に想像される、母や自分の事を思ふなと云つて打ち叩く殘酷を敢てするとは何といふ女であらうか、何な性格を有つ女であらうか、大野廣之とはいかなる關係で其子を預つたのであらうか、果して音藏の云ふが如く忌はしい關係を生じてそれが爲に貞節な綾子夫人を離緣させたのであらうか……それらの事よりも何よりも薫の虐待は眼前の大事實である、我は薫を救はずに居られやうか。

直也はムックと起きた、耳には明確と――お母様や榊先生の事を考へてるッて毆つたり叩いたりするんだもの――悲しい聲が其儘殘る、恰度喜代子の居ぬ今の間に……。

『奪つて遺らうかッ』

斯云つて彼は腕を捲つて徐ら起ちかけた、座敷では演説だらう大喝采が起つた、盛な其音を聞くと、後から強い力の何物にか引倒される樣に直也は再び横樣に寢轉んだ。

不義？不義？、我は彼の少年の母綾子夫人と不義を疑はれたではないか、少年を悲しむ心……それは何事にも自分を惱ます情の所作である、情に惹されて薫を救ふ……ア、何といふ無謀で危險な考へであらうぞ、彼は當然親權を有する大野廣之の子では無いか、虐待が人道問題であらうともそれは救ふ人責むる人が別に有らう、情の命ずる儘に動いて薫を救ふたら我は自ら不

義の名に甘んじねばならぬ、不義の名に甘んじて我が尊い天職を抛つ？、それは精神的の死滅である、今聞ゆる華やかな拍手、生の榮ねと名の譽れを思はしめるあの喝采の聲を聞くと、我の猛進せんとする情の道の暗さ冷たさ……。

あゝされど……、無情の夫に捨られて窮巷に病ひに惱む女、慈母に別れて虐待の鞭の下に泣く小兒……、正しく我と一つ運命の繩に繫がるゝとしか思はれぬ、哀れな人々を見捨て此儘に……。

理が是か情が非か、理を行ふて安きが得らるゝか情に殉ふて苦しみを求めるか、理に活んか情に死せんか……。

三たび身を起した直也は、夢に屢〻來り夢よりも果ない今も暫時の姿を見せた薫は彼家かと、心ゆくばかり微な燈火を眺めるのであつたが、遂に知覺なき人の如く腰掛に倒れて身動きも爲なかつた。

『まあ斯な處に……』

『神木樣居て？』

後ろから大きな聲して駈寄る雛子を手で制すると喜代子は靜かに腰掛に近いて。

『あのお苦しいのでございますか』

『エ』

直也は人の來たのを知らなんだ、女の聲に目を開いた。

『ほゝほゝゝゝ御酒でお苦しいのぢやございませんか、大層お探し申したのでございます』

『オ、令嬢ですか』

憎むべき喜代子ッ？胸中の叫びを堪ねて身を起す。

『あの御氣分がお惡いのならお手當を』

『イヤ何うも無いです、ヤ失敬します』

と直也は大跨に行きかける。

『あの神木樣一寸……』

『僕に用ですか』

『は、あの一寸御紹介したい方が……此方は當家の嬢さんの雛子さんでございます』

喜代子は逃すまじと直也の行路を遮るやうに立塞がつた。

『左樣ですか、僕は神木朱衣です、今夜は御招待を有難う、失敬』

と又行きかける。

『神木樣、甚だ御迷惑でございませうが彼方で一服差上げたうございますが』

『僕ア茶は嫌ひです』

『ほゝほ、あの此方がお作の「涙」に就て是非お話が承はりたいと仰有つて……』

『「涙」？、話は皆小説に描てあります』

『でございませうが暫時、彼所の燈火が妾の住ひでございますから』

直也はッカ〳〵と後へ戻つて。

『貴女の家へ？、左樣ですか、ぢやア一寸伺ひませう』

雛子は眞赤になつた。

（四一）

『萬望此方へ』

と女中が案内に出た、喜代子は表に直也は待たせて雛子を連れて先に入つたのである。

直也は、喜代子のいかなる女であるかを探り且は薫の樣子を確めるには此機を失ふてはと咄嗟に思案を決めて誘はるゝ儘に隨いて來たのである、薫の爲には今宵の不快な招待にも來た、それが爲に餘所ながら薫も見た、痛しい事實も知る事が出來た、モ一つの不愉快を忍び我を殺して敵の根城を探つて置く事は假令我自ら薫を救ひ出さぬにしても無益の事ではあるまいと決心したのであつた。

玄關からスグ二階に通された薫が出るか？、萬一現はれて我れを見た時は？、直也は大膽な冒險的の仕事を危くも思ひ面白くも感じた。

數奇を凝した座敷には、床に立派な提琴が寄せかけてある、違ひ棚には背皮金字の洋書も見へる、銀の透し彫の寫眞挿みには兄信明だらう、カイゼル髯の紳士の半身。

『失禮を致しました』

と喜代子が現はれる、其後に隱れるやうにして雛子が坐つた、女中が菓子と茶を搬ぶ、眩ゆい盛裝の兩女に對して直也が木綿紋付の羽織袴で肩を聳かして坐つた光景は、可笑しい圖であつた。

『萬望これを御緣に……妾平日からお作の「涙」を愛讀いたしたのでございます、斯な所に孤獨で暮して居りますと……淋しい妾共にはあのお作は何とも申上樣の無い程尊い慰藉を與へるのでございますもの、ねえ貴女』

と雛子を見て。

『孃樣は又妾以上の愛讀者ですよ、是非あの小說をお描きになつた貴方に一度遇はせてほゝほゝ、一度お目にかゝりたいと仰有つて妾大變に弱らせられたのですわ』

直也はそんな話は耳にも入れず。

『佐藤さん貴女はお獨居ですか』

『はゝ、兄は御承知の通り麹町の本邸の方に居るのですが、妾斯なお轉婆なものですから皆と趣味が合はない爲に獨りで居るのです、結句氣樂ですわ、それでも男の方は餘り御交際しないものですから……ツイ解りもしない癖に文學なぞとほゝほ、それで其趣味のお方々と何とかしてお親近になりたいと思つて居るのですよ』

と媚ある眼を男に向ける。

『左樣ですかお獨居ですか、それは寂しいでせう』

冷かに笑つた直也の心持を喜代子は又腹の中で冷かに笑つた、足らぬ雛子を最初から出しては

と先づ自分の力で男を引付けて置く手段に口から出任せの事を云つて相手を喜ばさうとかゝつた。

『はあ、まことに寂しいのですよ、尼寺ですわ、ほゝほあの「涙」の雪江ですねえ、夫に捨てられて……妾共は世間に捨られたのですわ、ねえ嬢様』

雛子は始めて口を切つた。

『左様ですねね、妾本統に悲しいわ』

『神木様、始めてお目にかゝつて斯な内證話をお聞せしてまことに濟ないのですが、あの御同情深いお筆致に甘ねて……此嬢様のお身の上ですが御存じの通り只今お父様の御威勢とこの御財産ですものね、何な所へでもお嫁入がお好み次第ですのに、唯モウ文學の趣味を愛して是非貴方々の様な筆をお持ちになる方の所へといふ御希望なのですよ、妾一切委任を受けて只今お探し申して居る最中ですが、お可愛い嬢様の事ですからお支度なぞもお厭ひはないのですし何な條件でも、それは妾が承知して居るのですが……萬望御心當りがあれば……』

直也は何處かに薫の聲はせぬかとそればかりを注意して居る、留守の耳に喜代子の話は何の感じもなかつた。

折から外に賑やかな人聲がして玄關の格子戸が明いた、女中がバタ〳〵と走つて來た。

(四二)

『お嬢様あの本邸のお客様でございませう大變お酒に醉つた方とそれから藝妓の様な女が二三人……』

と女中が取次ぐ間に玄關の人聲はモウ此方へ上つて來る、直也は立上つた、喜代子は『チョッ』と舌打したが。

『本統に詮術が無いねえ、折角お話を伺つてるのに……構ひませんから貴方萬望其儘』

といふ時ドヤ〳〵と座敷に入つた眞先は今宵の客の中なる狹山雪堂といふ自然派の大家を以て任ずる酒豪の文學士であつた、モウ廻らぬ舌で。

『ヤア令嬢……オヤお客様ッ、ゲープ僕は來んといふのをウ、、この女奴がねはッは、、、』

『あら狹山さんの嘘つきッ、ほゝお嬢様妾達皆な御前様の無禮講で斯んなに醉され了つたんですよ、それを此狹山さんが貴女のお姿が見えないから連れて行けッて可かないもんですから

ねね皆さん妾の云ふ事が眞實ねね」

『清香姐さんのが眞實ですわ、狹山さんの嘘つき、助平、おたんちん？』

「ほゝほゝゝゝ」

「はゝはゝゝゝ」

一同揃ひの醉ひで憚らず聲を上げた、直也は清香の名を聞いてハッと思つた、喜代子は馴れたもので、雛子を階下へ下すと。

『能く入らつしつたわね、さ此方へ、皆さんもお座り、何か御馳走しませうね』

『御馳走有難い……令嬢の顏を見たら引下らうと思つた我輩に御馳走とは錦上の花ぢや、ゲーブ花々有難いな、さあ皆も相伴さして遣るぞ』

狹山はドタリと座ると直也の顏を覗き込んで。

『ヤア君ア、先刻は失禮、神木朱衣君でしたな、ウゝこれア驚いた、君が來て居やうとはゲーブオイ皆なッ、これが神木朱衣先生と云つてな、そら、あの「涙」の小說を作られた方ぢや、近う寄つて拜觀を遂げられませう、はッはゝゝゝ』

直也は醉漢の無禮の詞を堪へて何も云はずに室を出やうとすると、清香が其前に手を突いた。

『貴方飛んだ失禮を、お客樣は居らつしやらないと思つて……あの方は醉つて被居るのですから萬望御勘辨なすつて』

直也は此女に顏を見られまじと横を向いて。

『構はん、其處を通して呉れたまへ』

『神木樣暫時……何だか可けませんわね、あの只今一寸した物を差上げたいですから、御一緒に』

と喜代子も狹山の無禮を代つて詫びるといふ心持を見せて、モウ隔ての無い間の樣に碎けた詞で。

『ね、可いでせう、まだお話があるのですから、さ、お前樣お客樣を歸したら可けないよ』

此詞に最前から手持無沙汰の三人の藝妓はスグに直也を取圍んだ。

清香は醉ふていよ〳〵美しい顏を他方に反けた風をして、ジロ〳〵と直也を眺める。直也は見られまじと苦しい思ひをしながら、辱しめらるゝが如き座敷を、默つて堪へる。

喜代子の氣轉で軈て酒肴が出る、狹山は呂律の廻はらぬ口で頻に喜代子と藝妓に喰つてかゝる喜代子は却々〳〵負けて居ない、手嚴し〳〵云懲す度に藝妓は喝采した。

清香は盃を持つて直也の前に座つた。

『神木の旦那妾酔つてますからね、始めてお目にかゝつて相想盡しでせう、だけと忘れずに居て下さいよ、妾新橋の清香です』

直也は横を向いて居る譯に行かなかつた、困つた顔をして盃を受けると。

『僕飲まんから』

清香は始めて正面に直也の顔を見た。

『旦那召上らないの、可けないことね、ちや妾に其盃下さいよ』

矢庭に身を伸して盃引奪る時。

『今の間にお歸りなさいッ』

と耳に聞ねた早口を直也は嬉しく、喜代子の方を見て立ちかける。

『旦那お便所？、妾供しませう』

と先に立つ清香に隨いて階下に下りる。

『榊先生』

突然に我名を呼ばれて直也は顔色變へて振顧いた。

『あら矢張然うですわね、貴方榊樣でせう』

『……清香さん、君には隱されん、僕榊直也だ』

『まあ、それぢや貴方を慕ふ可愛相な子達が此家に居る事御存じ？』

『知つてる、君ッ清香さん、僕ア彼の子供を救ひ出す事の出來ん人間ぢや、先刻の時僕は後に隱れて聞いて居た、君が優しい同情は有難い、僕感謝する、何か保護して遣つて呉れたまへ そして僕の名は誰にも隱して呉れたまへ、それだけ君に賴む……僕頭を下げて賴むのは君が始めてぢや』

『榊樣、妾も子供が氣になつてあの狹山さんをダシに來て見たのよ、清香が屹度賴まれました御安心なさいまし』

清香は住所書を呉れと云つた。

直也はそれを拒む事は出來ぬ、手帳の紙を裂いて渡すと名刺と換て手早く帶へ。

喜代子が下りて來る樣子である。

『お嬢樣早く來て下さいまし、神木の旦那が歸ると仰有るのですよゥ』

（四三）

『奥様今日はいかゞでございます』

と破れ襖を明けて。

『御隠居様はお使でございますかね』

『オ、音蔵か今お歸りだつたの、今日も一日小休みなしの様だつたねゑ』

『ヘエ一寸の晴間もごぜいません、毎日斯陰鬱と降られちやア御病氣に障るだらうと思つて俺ア心配して居るのでごぜいますよ』

『イ、エ妾は寢て居るのだから、それよりお前がさぞお困りだらうと思ふと、妾雨の音を聞くのが辛いのです、お疲れだらうねゑ』

『奥様降られると慘酷な商賣が多うごぜいますが、俥はお蔭を蒙る方でね、今日も一貫跳ねたお祝ひにお好きな刺身を買つて來ましたぜ』

と音蔵は手に持つた竹の皮包みを敷居の上に置くと、懐中から鑵を取出して。

『奥様、それから此品はお醫者が好いと云つた鐵飴でさ、血を増すッて云ふからね、精出してお服みなすつて下せいよ』

『音蔵』

綾子は蒲團の上に起直つて。

『お前まあそんなに……お前そんな配慮ばかり掛けて何うしませうねえ、モウ萬望お金を費はない様にね、長い間お前に厄介になつたのだから……』

『はゝゝ奥様又そんな事を……、その飴の鑵口切りませうかね』

『はあ、ぢや頂かうねゑ』

箸に卷いて出す飴を受けて。

『お前の有難い親切だけでも癒らなければならないのだが……妾モウこれで命を奪られるのだらうねえ』

『可けねい々々』

音蔵は掌を振つて。

『そんな事ア云つこなし、俺が坊様を此處へお連れ申す迄はそんな心細い事を仰有つちやア可

けません、早く以前のお身躰にお成んなすつて下せいまし」

『假令身躰が以前の物になつてもねゝ……以前の妾にはなれないから』

と綾子は眼を拭つて。

『……音藏其後薫の樣子は知らないだらうねゝ』

『ヘイ……巽の邸内に被在るといふ事だけ突止めた限で……俺ア萬一やと思つて毎日彼所の近所の辻で客待をするやうにしてゐるのですが……喜代子ッて奴は贅澤な服裝をして時々出たり入つたりしますが肝腎の坊樣のお姿は皆目……』

『生きて居るだらうかねえ』

『エ』

『妾より先に行つて妾を待つて居る樣に思はれてならないのだよ』

音藏は水を浴びた樣に感じた。

綾子の病氣は過度に精神を刺戟したのが原因で腦貧血を起したのだとの醫師の診斷であつたがそれが一時輕快くなつた頃今度は神經性心臟病に罹つた、胸に劇しい疼痛が來る時は只さへ血の氣の失せた顏は殆んど死人同樣になつて、玉の汗流して苦しむ狀態は傍から見て居られぬ慘

さである、實家の母親絹子は此頃付添で看病に手を盡すのであつた。

當初は音藏の知邊に賴んで綾子一人本郷で煙草屋の二階借をして居たのであるが、絹子が來てから此處麻布の場末なる路次内に型の如き九尺二間の詫住居、音藏も其隣家を借りて相變らず主從の關係を守り、八百八町駈めぐる泥臑の收入を眞心と共に故主に傾け盡すのであつた。

母の絹子が外から歸つて來た。

『御隱居樣お歸んなさい』

『オ、音藏さん、今日は毎時より早い樣ですね』

『ヘエ早く山を入れたんでは、、、、』

『斯降つては大抵ぢやありません、其お疲れの中から然して氣を注けて頂くのが妾本統に濟まないのでね……』

『お母子共そんな事を仰有つちやア可けません、俺ア奥樣の御病氣を癒して早く坊樣と……一日も早くお嬉しい事にしていといふのが俺の願ですからね、願を貫く迄ア辛えの疲れるッていい事ア有ませんや、モウ水臭いお謝辭なぞは止にして下さいましよ』

（四四）

『音藏さん、恰度好い機會だから相談しますがね』

と絹子は病人の枕元に座つて胸元の冷し嚢の直しながら。

『此間から此娘には云ふのだけれど何しても肯きませんがね、強いて逆らうても病ひに惡からうと思つて控へて居ますが……』

綾子の父は道彦と云つて玉川在百戸の村に鎭守の社の神主である、昔氣質一徹の老人で今度の綾子の離緣沙汰が不義の疑ひが原因であると聞いて腹も切りかねまじき程憤つた、そして其忌はしい濡衣を自分で乾す事の叶うまでは寄るに家なく饑に倒れても決して實家の敷居を跨げる事はならぬ、斷じて寄せ付けぬと云ひ張つた、それは最初の病氣の折音藏が內證で離緣の事と一緒にソッと報せた時の事である、綾子は又綾子で再び大野の家に歸る迄は實家の方角へは足蹈みもせぬと云ふ堅い決心を見せた、母樣は女心の起つても座ても居られず、種々に夫を說いて看病に付添ふ事になつたのである。

『お父樣も最初は如彼仰有つたけれど、何と云つても愛情の深い親子の間ですものね、それに此頃は廣之さんの方に重々非分があるといふ事が知れたものだから、宅へ歸つて病氣の保養をするが可いといふ手紙が度々ですよ』

『旦那樣のお心が解けたのでございますか、そいつア有難い』

と音藏は膝を乘出す。

『彼地だつたら空氣も良いし家も此處よりは優だから、お父樣が左樣仰有るのだから歸つたら可いと思ふのですが……』

綾子は肉の殺けた青い手を出して振つた。

『お母樣モウ其話は爲ないで下さいよ、妾當初からお父樣が歸れと仰有つても實家へオメ〳〵歸る精神は有つて居ないのですから……』

『奥樣』

と音藏は臥床へ膝行つて。

『奥樣の潔白なお精神は神樣が見透しでございます、其神樣に仕へて被居る旦那樣に奥樣の精神がお解りにならぬといふ道理がございません、俺が申上げた通りでございます、これアお

考へも何も要つたもんちやごぜいませんや、御氣分の快い日に俺がお供をしまさ、是非お歸りになるが可うごぜいますせ』

『音藏』

と綾子の聲は低いながら鋭かつた。

『お前までまだそんな事を……妾此家を出るのは大野の家へ歸る時か……棺に入つてゞなくちや出ないのだからね、モウそんな事は勸めてお呉でないよ』

『直にあんな事を』

と絹子は襦袢の袖を目に當る、音藏も默つた、梅雨空の黄昏は家も人も黴に包んで了うやうな陰氣に暮れる。

其夜の曉方である、綾子は此二三日止んで居た胸の疼痛が急に起つて四苦八苦に惱み悶えた、音藏が醫者に走る、注射で漸つと鎭まつたが、手足の先を紫藍色にして昏々と眠る姿は宛然再び物云ふ人とは思へなんだ、母親は實家へ電報を打つと云つた出た、音藏は枕元でおど〳〵と心を騷がせながら座る。

『あゝ』

と急に病人の呻く聲、音藏は驚いて中腰に覗き込むと、綾子はパッチリと眼を見開いて遠い物を見る樣に音藏の顏をぢつと見据る。

『奥樣……確りなさいませ、モウお痛みは止んだのでごぜいますか』

『オゝ音藏か』

『へイ俺でごぜいます』

と顏の汗をソッと拭く。

『お母樣は』

『御隱居樣は電……へイ今一寸門外へ』

『妾一寸起してお呉れ』

『お動きになつて可うごぜいますか』

蒲團を除けて扶け起すと、一夜に衰への色いよ〳〵加はつた凄い顏を上げて。

『音藏、薫が此處へ來ましたよ』

と四邊を見る。

『エッ』

と云つて音藏も後ろを振顧いた。

『……夢かねね、音藏薫の身には屹度變があるのだよ……ア、妾薫に一目遇ひたい……音藏何かして……無理だらうが何かして……妾を薫に一目遇はせてお呉れ……』

と昂奮した聲で早口に斯云つて痩せた掌を合はせやうとする。

『も勿躰ない事を……』

と其掌を制えた音藏は手拭を口に咬んで、ハラ〳〵涙を零し男泣きに泣き出した。

（四五）

東京中を黴にするかと濕つぽい曇天は降雨と打續いた、洪水の出た地方の噂も頻りである、電車は河の樣な所を走る、萬象みな雨の裝ひして日中も夜の如く暗く寂しかつた。

暗い晝は闇の夜と代つた、風さへも吹き出て萬木の梢は鳴つた、高壓線の臺柱の空に紅い火は世を呪ふ妖星の地に降るかとも物凄い、其直下なる辻角から今影の如く歩み出た人がある、芝山内の巽伯爵邸の横で。

伯爵邸の門前は明るい電燈に輝いて、宏壯な鐵柵石柱の門は雨に風に干せぬ姿に聳える、暈をつくつた光りの中に允請巡査派出所の紅燈が不穩の夜を警しめるげにキラ〳〵と閃く。

辻に現はれた人の姿は派出所の前を急いで通つた、濕れた合羽が光つた、合羽を彈く雨の音が聞えたか、電燈を反けた暗い家の中でガチヤリと洋劍の音がした。

明るい門前を足早に過ぎた怪しの合羽姿は暗い高塀の下で佇立ると、今過きた派出所の方を凝と透した、雨は又盆を傾ける。

合羽は闇よりも黑い高塀を仰いだ、仰いで石の如く暫時動かぬ。ドッと下す風に吹かれた如く合羽は小走りに門前に戻つた、塀に添ふて光りを避けると、身を地に屈めて今度は門の左右に流れた鐵柵を屹と見る……と忽ち柵に駈寄つて矢庭に手を伸さんとする時、其時パッと輝く光の中に。

『コラッ』

と大喝一聲眞黑の姿が躍り出る、合羽は逃げやうとして石疊の上へ轉んだ、黑い姿は馬乘になつた、派出所から靴音が飛ぶ。

派出所に引致された合羽姿は両人の巡査の間に繩の儘引据ゑられた。

『クリャ汝奴大膽な奴ぢやア、こゝに乃公們が居るチウ事を知つてからに賊に入らうとは、アン』

『……旦那、け、決して盗みなぞ働く料簡ぢやございません、ヘイ萬望御勘辨を……』

『許して臭れェ？、馬鹿な事を吐くな、賊を許して乃公們の職務が盡せると思ふかア、慄ゐ聲なんぞをして瞞着ウ試みたつて左様は可んぞう』

『滅相な……旦那方を欺すの何のと……俺ア決して賊に入る積ぢやアございません……』

『オイ〳〵呆けるなよ』

と之は後から駈付けた巡査が。

『洋劍を提げたつて普通の「行政」とは違ふぜ、俺の顔を知らん手前は「旅稼」だな、何だつて又頓馬な事をしあがるんだ、當邸は巽伯爵のお邸だぜ、手前達の爪も針も立つのぢやア無いはッはゝはゝ』

『ヘエ……』

『それ見ろ圖星だらう』

『イエ俺ア決して賊ぢやアございません』

『默れェ』

と靴を轟かせる。

『賊で無い者が夜密かに人の邸宅を伺ひ柵を越へんとするチウがあるかい、そんな陳述は立んぞう、本署へ引致しちやる』

『旦那萬望これで御勘辨を……決して賊を働く様なそんな卑しい料簡の者ぢやアございません……』

『默つて行けよ、默つて行つて警部さんに賴め、隱すと利益にならん』

『名を申せ名を』

『ヘイ……』

『何チウ者ぢやチウのぢや』

『ヘイ……荒瀨』

『荒瀨何ぢや』

『……音藏でございます』

（四六）

雨風物凄い夜に乗じて巽伯爵邸へ忍び入らんとしたのは俥夫音藏であつた、彼は昨夜一晩を生れて始めて監房―芝警察署留置場の獨房に過したのである。

霖雨は今朝に至つて晴れた、差入弁當の空筥に久しい飢を飛び騒ぐ雀が集る、華やかな朝日影は監房の格子から眩ゆく射し込んだ。

大きな錠前の外される音が音藏の寒い膽を震はせた、彼は訊問所に曳出された。

仁體の警部の白い顔がチラと眼に映つた時音藏は怖ろしい思ひに俯向いた。

『荒瀬音瀬は其方ぢやな』

『へイ』

『其方は昨夜十時頃に芝山内の伯爵巽元卿の邸へ忍び入らんとする所を同家の允請巡査に捕へられたのぢやな、それに相違ないか』

『へイ、それに相違ございません』

『相違ない？』

と警察は案外の顔をして書類を見ながら。

『それでも其方は巡査に對しては否認して居るな、白狀して居らんぢやないか』

『へィ其時は……旦那俺ア昨夜一晩考へたのでへィ』

『考へた？考へて嘘僞を云つては不利益ぢやぞ』

『お上に對して嘘僞は申上げません、眞實あの邸へ入らうとしたのでございます』

『左樣か……賊を働く爲にかね』

『イヱ盗人なぞする料簡は有ちません……』

『賊が目的ぢやない？、フムすると何の目的の爲ぢや』

警部の眼は異樣に輝いた、新政黨組織に就て兎角の批難ある巽伯爵―其邸内に忍ばんとする賊を目的とせざる曲者―風雨の夜―。

『何を目的として同邸に忍入らんとしたかそれを包まず申立るが可い』

『へイ取返す爲でございます』

『ナニ取返す？何を取返すのぢや』

『人でございます』

『人を取返す……訝しな事をいふ、誰から何といふ人を取返すのぢや』

『……旦那一體お上の力で彼な……華族だの何だのッて人の上に立つ身分に居ながら弱い者を虐めて泣かせて……病人を殺す樣な……イケ非道な事をする奴アお上の力でドシ〳〵引縛て下さる譯にア行かねえのでございますかッ』

『何を云ふのだ、突然にそんな事を云つても本職には解らぬ、其方は逆上せて居るのぢやないか』

『ヘイ逆上せるなア通り越して死んで了いてい程辛い目に遇つてるのでございます……旦那お上のお慈悲で萬望俺の力に……死にかゝつてる奥樣や非道な目を見て居なさる坊樣をお助けなすつて下せいまし』

と音藏は横木に顏を俯伏せてオイ〳〵泣き出した。

警部は惡を働く人間ならぬ音藏の狀態を看破して深い事情のあるらしい話を能く聞取つた。

『するとあの大野代議士の今の妻女……妻女同樣にして居る女が佐藤男爵の妹で、其女の許に薫といふ先の妻君の子が養はれて居る、夫が巽伯爵の邸内に居るから、病人の妻君の子供

を慕ふ哀れな狀態を見るに忍びないから抱車夫だつたお前が巽邸へ忍び込んで薫といふ子を取返さうとしたのぢやな』

『ヘイ大病の奥樣が手を合せて……僅た一目で可いから坊樣に遇はせて呉れ……遇はせて呉れッて仰有るのを見ちや……俺ア……』

『フム、それは實に悲慘な事情ぢや、又お前が其處まで奉公の精神を貫くといふのは實に感心ぢや……併しそんな事情だとこれは法律の力で何するといふ事にも可ん……保護といふ事も出來ぬ、其人々の道德に任すより詮術が無いがね……それを强いてお前の樣な手段に出ると反つて善い方のお前達が罪に陷る、現に昨夜の事でも立派な家宅侵入罪になる、繩に掛かつたりする事になる……そんな事をしては可ん、それは誰か確りした、美しいお前達に同情する確りした人を相談相手にして能く事を計るが可い』

『旦那、そ、その相談相手が無いのでございます……』

『無い事はあるまい、世の中はそんな無情な人達ばかりぢやない、善人に同情する味方は屹度有る、無いといふのはまだお前達の努力が足らんのぢや』

『ヘイ……』

『そんな美しいお前と知らずに警察へ引致したのは氣の毒ぢやつた……今後は能く注意して決して法律に觸れん樣にせんければ可ん』

（四七）

音藏は芝警察署の門を出た。

雨の封鎖から解かれた都大路の光景は華やかである、輕い初袷を着て人々は乾かぬ泥濘を苦にせず往來うた、甍の浪はユラユラと陽炎の海に浮く、賑やかな活動が巨きな音響となつて清められた市街の新しい脈搏と轟く。

『エ、危ない氣を付けやがれ奴盲目ッ』

と大喝されて音藏は吃驚した、風の如く我を擦れて自轉車が行つた。

雨を犯した破れ合羽は下の筒袖を濕々にして、氣持の惡い冷たさは身躰に絡みつく、滴の垂るやうな笠を手に提げて、彼は何處の目的も無く足の儘に歩むのであつた。

警察を出てから凡そ二時間の後音藏の姿は何時か彼が松岡學士や宍戸を案内した上下屋の店頭

に現はれた、笠を背中に載せて腕を組んだ儘縄納簾を自棄に頭で分けてヌッと入る、土間の板臺は仲間の二三人で占領されて居る。

『ヤッ音さん、これア珍らしいな、お前が朝ッぱらから來るたア珍らしいぜ』

『眞に音洲ぢやねいか、折角晴つた雨が又降るぜ』

『豪氣だ、飲仲間が增える程嬉しいものア無いや、音さん此方へ來ねいな一緒に飲らうよ』

音藏は頷いた腰を掛けると、酒肴をかけながら差〻れた盃を受ける。

『何したてんだ音洲、お前全濕ぢやねえか、顏色も馬鹿に惡いぜ』

『……なあに昨夜無客れた所爲よ』

と力ない聲で云つてグッと一氣に煽る。

『左樣か、そんな時やア酒に限るッて事よ、飲りねね』

『ウ、今日は飲るんだ、何時でも飲るんだ』

女中が運んだ熱い酒を茶碗に注々と注ぐ。

『音さんお前今日は何かしてるんぢや無いかね、飲るんだッてお前そんなに飲ける口ぢや無からう』

『飲けるたつて飲けねいたつて酒位い何だい……酒でも飲らなけア此胸が裂けつ了ふ』
と音藏は胸をドンと叩いた。
『ウン御酒なと召らずばと來やがらア、醉つて見ねね、心配も苦勞も何處かへ消え了う、借金取も驚の聲よ、音洲なんか其苦勞は無い部だか』
我を取卷く聲に應へもせず、音藏はモウ二三本の銚子を倒した、顏を眞赤にしてフッフッと苦しげな息を吹く。
『オイ音さんお前眞實に可いかね、そんなにガブ〳〵飲つて？』
と先刻から例時に似ぬ樣子を氣遣つたらしいのが覗き込む。
『俺らア何かしてるやうに見ゑるかね』
『だつてお前無暗に飲るぢや無いか、毒だぜ』
『毒ウ？、毒有難いや、毒なら俺らア何程でも飲るんだ、毒なら俺らア……』
とモウ醉ひの眼を輝かす。
『ベラ棒奴ェ酒が毒なら酒屋ア人殺しかッ、そんな法律はあるめね、音洲此鉢で俺らと飲みッ競を遣らねいか』

向ふ鉢卷のが漬物の小鉢を突出した、隣席のがそれを制へて。
『音さん可けねいぜ、自棄は可けねいぜ、何だつてそんなに飲むか知らねいが中毒れて見ねね詰らないや、な、モウ止さねえ惡い事ア云はねいから』
音藏は首を振つた。
『俺らア殺られていのだッ、構はず拋つときねえ、飲る、飲らねいでかい、さ注げ注いで呉れ……ハン面白くも無い、世の中ア俺ア愛想が盡きッ了つたい、弱い者は何時までも蹈んで、蹴つけられてよ惡い奴ばかり蔓こる世の中に居たつて何が面白いのだ、面白くねい世の中が厭になつたから俺ア死ん了うんだ、お前止めるなら俺らの相談相手になるか、そ、それ見ねえ、口先ばかり深切な事を云つたつて相談と云やア逃げるぢや無いか、死んだ後ぢや安い命だなんて評價を爲る奴が飛込む身投げを見殺しにする世の中だい、何が何だか俺達ア正躰の知れねね時勢さ、厭だッ、誰が斯な世の中に生きて居て遣るかッ、俺ア死にてえから飲るんだぜ、死ぬ程飲つて存分思ふ事を決行るんだ、邪魔アしねえで注いで呉んな、死ぬ程飲して呉んねいッて事よ』
『音洲手前存分やつゝけるッて何を遣らかすんだ』

「十人斬ぢやア有るめえ」

「はッ、、、」

「フ、、、」

ドッと笑ひ興じる中に音藏は醉ひに醉ひを重ねて猶盃を離さなかつた。

(四八)

「ヱ、喧ましいやゲア〳〵と鳴きさらして、な、何が悲しくつて泣きくさる……手前達も人間の眞似を爲やがるな、コン畜生ッ止せッたら止せよ、よ、泣くなァ止して臭れ……俺ア泣くなア大嫌いだ……泣く涙も出やがらねねッ」

早稻植ゑた田に蛙が鳴き連れる、近く遠く涌き立つ聲は黃昏の雲を呼んで、村の姿は朦朧と彼方に霞む、蛙の聲分くる田甫道を高く低く蹣跚きながら獨語つて歩くのは音藏であつた。

今の前飯屋を出た彼は平生に嗜まぬ酒を矢鱈に飲んだ爲に、モウ前後を覺えぬらしい樣子で、危く何度も轉げかけ道行く人を驚かせつ、此處まで來たのである、彼は何處を目的に行くのだ

らうか。

「は、、、酒は毒だッて吐しやがつたな……毒を喰はゞ皿までか皿も鉢もあるもんけい、叩壞して飲んゴへッ、や蛙の畜生まだ泣いてやあがるなヤイ蛙ッ、泣くのを止めて笑ひやがれ、笑はねいなコン畜生ッ、笑はなけア笑はねい理由を云つて見ろ……ヘンロ先許り巧い事を云つて俺を欺さうたつてモウ斯なつたら聞く事ちやア無ねぞ、否か應かの二つ一つだ、强つて厭だと吐かしやがるが最後ヘン榊も樒もあつたものか叩き折つて薪材だい』

柔かい草の田甫道を獨り罵りながら歩む音藏は屢々足辷らせて泥田に手を支へ雨に濕れた着物を汚し土から掘りおこされた姿で漸と人家へ出た、其處は榊直也の寓居の横手で、杉垣に添ふた潛り門は忙がしい農事に明ッ放にしてある、音藏は何の躊躇もなくヨロ〳〵として門内へ入つた。

「榊の旦那ア、……はッはゝゝゝ不在を遣つたつて可けねいせ、音藏が又參りましたよ……醉拂の音藏が參りましたよ、オヤ誰も居ねいな、居やがらねいなはッはゝゝ、隱れたつて可けねいッてのに隱れやがつたな、ヘンロ先ばかり巧い事を吐かしやがつたつて眞逆の時の相談にア卑怯に逃げ隱れを爲るたア……ヘン醜態フ見やがれ』

椽にドッサリと腰を下して喚き立る、誰の答へる聲も無い。

『ヘン隱れたつて左樣ならで歸るのぢやア無いぞ……今日の音藏樣はな、些とばかり違つてるから左樣思つてろよ』

彼は合羽を引剝る樣にして脫ぐと、泥足の儘椽に上つて障子をグワラリと引明ける、座敷には直也の姿もなく例の机には原稿紙が高く積れてあつた。

『ヤイ〳〵まだ出ねいな、出やがら……よウし、出なけれア出ねいで此方にも料簡があるぞ、出るなよ、泡を喰つて飛出すな、よしか、此紙に字を書くのが尊い事業と云つたな、ヘン字を書くのが尊けれア區役所の代書は樣付だい、べら棒奴ッ』

蹌めきながら泥足に疊を蹈みつけ机に近づくと、足を上げてハタと蹴る、行李と筥火鉢に渡された板は覆つて原稿紙はバラバラに亂れて落ちた、落ちた紙を引掴むと座敷中に撒き散らす。

『はッはゝゝゝ面白いな、面白いな、そうら今度ア……春は三月落花の体とこせいとけつかるはッはゝゝゝ』

直也が精力を傾けた小説「愛」の原稿は泥の疊の上へ無殘に散らばつた、散り敷く紙を面白さうに眺めて音藏は猶狼藉の手を止めぬのであつた。

(四九)

夕月の影蹈んで直也は喜作夫婦と牛の一家内連れで歸つて來た、昨日今日早稻の植付に猫の手も借りたい一年中の忙がしさを直也は半日宛手傳ふ事にして居る、鍬を納屋に仕舞つて筧の水で手足を滌ぎ勞働の汗拭ふ休息の快味を喜びつゝ、彼は椽に上りかけた、とモウ暗くなつた椽端を透して不審の耳を聳する、閉めて置いた障子が明け放たれて、座敷の中の闇に人の唸き？。

直也は椽にかけた片足をソッと退いて屹と身を構えた、靜かに後退りして跣足の儘勝手へ走る

と、喜作に耳打して燈火を持たせ、自分は手頃の棒を引提げて座敷へ返す、必定賊と思込んだ直也は只一挫きと覗ひ寄る、喜作は鉢卷をしたがブルブルと慄えて從ふた。

『オッ』

と直也が驚愕の聲を放つたも道理、座敷中に散らばつた白い物は我精神を打込んで執筆中の小說「愛」の原稿である、彼はヨロ〳〵として後ろの喜作に倒れかけ、棒に支へて辛く立つた。

『燈を見せッ』

叫んだ聲が烈しかつたので喜作は肝を潰し臺洋燈を其處に置いて庭へ飛下りた、それを片手に棒を右手に、直也は猛然として座敷へ進んだ、洋燈は驚くべき一室の狼藉を照らし出す、散り敷く原稿紙の上へ大の字形に寢轉んで雷の如き鼾聲を發くのは、泥だらけになつた淺ましい姿の音藏である。

『オ、音藏ッ』

直也は呆れて其儘立竦む『ウーン』と微かに唸つて音藏は彼方へ寢反りした、其顏と散つた原稿紙を見交して暫時無言の儘立盡す直也を。

『先生樣、泥棒は寢て居るで無いか、其間に早く此繩で引縛つて呉んなさろ、今村の若い者呼びに遣つたゞからね、其奴の所爲に違ひは無いだ此中からの牛盗人は』

と喜作がいきり立つ。

『人を呼ぶのは止めて下さい、これは知つた人間ぢや』

『エッ先生樣知つた泥棒かね』

と寢た顏を恐々覗く。

『オ、これ此間から來る車夫で無ねか』

『彼ぢや……僕が調べるから餘り騷がぬ樣にして下さい』

喜作を制して遠ざけた後、直也は散らばつた原稿紙を一枚づゝ拾つた、音藏の寢像に敷れた分の外は數が揃ふた、泥の足型殘る机の板を元の通りにして洋燈を置くと、其前に坐つて凝と音藏を眺める。

『音藏……音藏……』

『……』

『音藏ッ』

劇しい二度目の聲が耳に入つたか、音藏は微かに目を開くと『ワアー』と大きな欠伸をして顏を頻に擦る。

『音藏目が覺めたかッ』

『エ』

と其時始めて人心地の付いたらしい彼は又大きな生欠伸をしながら眩い燈火を見て直也の顏を見た。

『目が覺めたら其處へ坐れッ』